神学講話

ナジアンゾスのグレゴリオス
藤遥　制作

第27講話（1〜5章）　エウノミオス派の人々への前置き

27:1:1 言葉を巧みに操る人々に、この言葉を向けます。聖書から始めましょう。『高ぶる者よ、見よ、わたしはおまえの敵となる』（エレミヤ五〇・三一）。実際、いるのです。わたしたちの言葉を聞くと、耳も舌もむずむずさせる人々がいます。見たところ、もう手までむずむずさせています。彼らは、俗悪なむだ話や、偽りの知識による反対論や、なんの益もない言葉の争いを喜んでいます（第一テモテ六・二〇、第二テモテ二・一四、一六）。27:1:2 言葉の上の余計なこと、無用な詮索を、パウロはすべてこう呼んでいるのです。パウロは、切り詰められた言葉を宣べ伝え、それを確かなものとした人です。漁師たちに学び、また漁師たちを教えた人です。27:1:3 いま話しているこの人たちは、よく回る舌を持っています。品位のある、選りすぐりの言葉を使うのにもたけています。その舌と同じように、せめて少しでも行いにも心を用いてくれたらよいのですが。そうすれば、これほど奇妙で突飛な、言葉の詭弁家、言葉の曲芸師ではなかったかもしれません。おかしなことについて、少しおかしな言い方をすればですが。

27:2:1 この人たちは、敬虔の道をすべて壊してしまいました。そして、ただ一つのことだけを見ています。持ち出された問いのうち、何を縛り、何を解くかということです。劇場で格闘の技を見せる人々と同じです。その技も、競技の決まりに従って勝ちに導くものではありません。こうしたことに疎い人々の目をくらまし、喝采を奪い取る技です。こうして、どの広場も、彼らの言葉で騒がしくならずにはすみません。どの宴も、たわごとと不快さでうんざりさせられます。祝いの日も、喪の日も、同じです。祝いは祝いでなくなり、沈んだ思いで満たされます。喪は、もっと大きな災いで慰められます。その災いとは、彼らの問いのことです。素朴さとともに育つ婦人の部屋も、すべてかき乱されます。言い争いの口の早さが、恥じらいの花を奪っていくのです。このようなありさまで、悪は止めようもなく、耐えがたいものになりました。わたしたちの偉大な奥義が、小手先の技になりかねないのです。さあ、あら探しをする人々も、せめてこれだけはわたしたちを忍んでほしいものです。わたしたちは父親の情に動かされています。聖なるエレミヤの言うように、胸の内を引き裂かれています（エレミヤ四・一九）。忍んでほしいというのは、このことについての話を、とげとげしく受け取らないでほしい、ということです。そして、できることなら、少し舌を控えて、わたしたちに耳を貸してほしいのです。27:2:2 いずれにしても、あなたがたが損をすることは何もありません。わたしたちが聞く耳に語ったのであれば、この言葉は何かの実を結んだことになります。その実とは、あなたがたの益です。種をまく人は、どの心にも言葉をまきますが、実を結ぶのは、良い、肥えた心だからです。そうでなければ、あなたがたはこれもあざけって帰って行ったことになります。反論の材料も、わたしたちをののしる材料も、いっそう多く手に入れて帰ったのです。それで、ますます自分を楽しませることができるでしょう。27:2:3 これからわたしが意外なことを言っても、驚かないでください。あなたがたのしきたりに反することでも、です。あなたがたは、何でも知っていて、何でも教えられると請け合います。まことに若々しく、気前のよいことです。無知で厚かましい、と言って気を悪くさせないように、そう言っておきます。

27:3:1 あなたがた、神について論じることは、だれにでもできることではありません。だれにでもではないのです。それは、そんなに安いものではなく、地を這う者たちのものでもありません。さらに付け加えましょう。いつでもではなく、だれの前でもではなく、何もかもでもありません。ふさわしい時があり、ふさわしい相手があり、ふさわしい程度があるのです。27:3:2 だれにでもではない、というのは、こういうことです。それは、吟味を経て、観想にしっかりと足を据えた人々のものです。それより先に、魂も体も清められた人々のもの、少なくとも清められつつある人々のものです。清くない者が清いものに触れるのは、おそらく安全でもないからです。弱った目で日の光に触れるのが安全でないのと同じです。27:3:3 では、いつでしょうか。外からの泥と騒ぎを離れて、静まっていると

きです。わたしたちの心が、悪い、さまよう像でかき乱されていないときです。かき乱されていては、汚い字に美しい字を書き混ぜ、泥に香油のかおりを混ぜるようなものです。27:3:4 まことに静まって、神を知らなければならないからです。そして、時が来たとき、神について語ることがまっすぐであるかを判断しなければなりません。では、だれの前でしょうか。この事柄を真剣に受け止める人々の前です。ほかのことと同じように、これも楽しくおしゃべりする人々の前ではありません。彼らは、競馬や芝居や歌や腹、そして腹の下のことの後で、これもしゃべるのです。この人たちにとっては、このことについての冗談や、反対論の小器用さも、ぜいたくの一部なのです。27:3:5 では、何を論じるべきでしょうか。また、どこまででしょうか。わたしたちの手の届くことを、聞く人の備えと力が届くところまでです。度を越した音は耳を損ない、度を越した食べ物は体を損ないます。お望みなら、力に余る荷は担ぐ人を損ない、激しすぎる雨は地を損なう、と言ってもよいでしょう。それと同じように、聞く人たちも、言ってみれば堅い言葉に押しつぶされ、重荷を負わされるかもしれません。そして、もとからあった力まで損なうかもしれません。そうならないためです。

27:4:1 いつも神を覚えていなければならない、ということを否定しているのではありません。何にでも気安く飛びつく人々が、またわたしたちに食らいついてこないでほしいものです。息をするより、むしろ神を覚えるべきです。こう言ってよければ、ほかのことは何もせず、ただこれだけをするべきです。27:4:2 わたしも、聖書のあの言葉をたたえる者の一人です。その言葉は、昼も夜も思いめぐらすように、と命じています。夕べにも朝にも真昼にも語り告げるように、いつでも主をほめたたえるように、と命じています。モーセの言葉も挙げるなら、寝るときも、起きるときも、道を行くときも、ほかに何をしているときにも、です（申命記六・七）。そして、神を覚えることによって、清さへと形づくられるように、と命じています。27:4:3 ですから、わたしが止めるのは、絶えず神を覚えることではなく、神について語ることです。それも、神について語ることを、不敬虔なことであるかのように止めるのではありません。止めるのは、時をわきまえないことです。教えることを止めるのでもありません。止めるのは、度を越すことです。蜜も、食べ過ぎて飽きれば吐き気を催します。蜜であってもです。ソロモンもわたしも思うように、『すべてのわざには時がある』のです（伝道三・一）。良いことも、良く行われなければ良くありません。冬の花はまったく季節外れです。女に男の装い、男に女の装いも、喪の席の幾何学も、酒の席の涙も、同じです。それなのに、ほかでもなくここで、わたしたちは時を軽んじるのでしょうか。ここでこそ、時にかなうことを何よりも重んじなければならないのに。

27:5:1 とんでもないことです、友よ、兄弟たちよ。いまもあなたがたを兄弟と呼びます。兄弟らしいふるまいではないとしても、です。そのように考えないようにしましょう。熱くはやる、御しがたい馬のようになってはなりません。乗り手である理性を振り落とし、ほどよく手綱を締める慎みを吐き捨てないようにしましょう。折り返しの柱から大きくそれて走ることのないようにしましょう。わたしたちの境の内で論じましょう。エジプトへ運び去られたり、アッシリアへ引きずられたりしないようにしましょう。異国の地で主の歌を歌うことのないようにしましょう。異国の地とは、あらゆる聞き手のことです。よその人も身内も、敵も味方も、好意のある人もない人も含めて、です。聞き手の中には、わたしたちのことを細かく見張る者がいます。その者は、わたしたちの中にある悪の火花が炎になればよいと願っています。そして、気づかれないように自分の息を吹きかけて、火をつけ、あおり、天にまで燃え上がらせます。周りのものを焼き尽くしたバビロンの炎よりも高くするのです[1]。27:5:2 彼らは、自分たちの教えの中に力を持っていません。それで、わたしたちの弱いところに力を求めて狩りをするのです。ですから、はえが傷口にたかるように、わたしたちの痛いところにたかるのです。それを不運と呼ぶべきか、罪と呼ぶべきかは別として。27:5:3 しかし、わたしたちは、これ以上、自分自身を知らずにいるのはやめましょう。このことについての節度を軽んじないようにしましょう。敵意を解くことができないとしても、せめてこのことだけは互いに取り決めましょう。奥義は奥義らしく、聖なることは聖なるしかたで語ること、口外してはならないことを汚れた耳に投げ与えないことです。悪霊を拝み、恥ずべき神話と行いに仕える人々のほうが、わたしたちより慎み深いということにならないようにしましょう。彼らは、ある種の言葉を秘儀を授けられていない人に分け与えるくらいなら、先に自分の血を分け

与えるでしょう。27:5:4 着るものにも、暮らし方にも、笑いにも、歩き方にも、ある節度があります。それと同じように、ことばにも沈黙にも節度があることをわきまえましょう。わたしたちは、神のほかの呼び名や力とともに、ことばをも敬っているからです。わたしたちの争う心も、決まりにかなったものにしましょう。

訳注

1 ギリシア語訳のダニエル書では、炉の炎が高く噴き上がり、周りの者を焼いた。

第27講話（6〜10章） 多くのすまいと多くの道

27:6:1 なぜ、語られることに意地の悪い耳を傾ける者が、神の出生と創造について、無から生じた神について聞くのでしょうか。言葉を切り刻み、分け、ばらばらにするのを聞くのでしょうか。なぜ、わたしたちを訴える者を、裁き手の席に着かせるのでしょうか。27:6:2 なぜ、敵の手に剣を握らせるのでしょうか。あなたはどう思いますか。このことについての話を、どのように、またどんな心で受け取るでしょうか。受け取るのは、姦淫と少年を汚すことをほめ、情欲を拝み、体より上のことは何も考えられない者です。つい昨日今日、自分のために神々を立て、それも最も恥ずべき行いで知られる神々を立てた者です。27:6:3 物質のこととして受け取るのではないでしょうか。恥ずべきしかたで、粗雑に、いつものとおりに受け取るのではないでしょうか。あなたの神学を、自分の神々と情欲の弁護に使うのではないでしょうか。わたしたち自身が、こうした言葉を乱用しているとしましょう。それなら、その人たちを説き伏せて、わたしたちの教えのうちで知恵を求めさせることなど、とてもできないでしょう。彼らは自分からすでに悪事をたくらむ者です。差し出されたものに、どうして手を出さずにいるでしょうか。27:6:4 互いに戦うことが、わたしたちにこのようなことをもたらすのです。ことばなるかたのために、ことばなるかたがお喜びになる以上に戦う人々も、このようなことをもたらすのです。この人々は、狂った人々と同じありさまです。狂った人々は、自分の家に火をつけ、子供を引き裂き、親を手荒に扱います。よその者だと思い込んでいるのです。

27:7:1 さて、わたしたちはこの話から、なじまないものを取り除きました。大ぜいのレギオンを豚の群れの中へ送り込み、それは深みへと駆け下って行きました。次に、わたしたち自身に目を向けましょう。神について語る者を、像を彫るように美しく磨き上げましょう。27:7:2 しかし、まず考えましょう。言葉をめぐるこれほどの功名心とおしゃべりは、何なのでしょうか。この新しい病、この飽くことのなさは何なのでしょうか。なぜ、手を縛ったまま、舌を武装させたのでしょうか。27:7:3 わたしたちは、旅人をもてなすことをたたえないのでしょうか。兄弟を愛すること、夫を愛すること、おとめであること、貧しい人を養うことに感嘆しないのでしょうか。詩篇を歌うこと、夜通しの祈り、涙に感嘆しないのでしょうか。断食で体を抑えないのでしょうか。27:7:4 祈りによって、神のもとへ旅立たないのでしょうか。劣ったものを、すぐれたものに従わせないのでしょうか。ちりを霊に、ということです。ちりと霊の混じり合ったものについて正しく裁く人なら、そうするでしょう。27:7:5 生涯を、死に備える修練としないのでしょうか。上からの生まれの尊さを覚えて、情欲の主人とならないのでしょうか。ふくれ上がり、猛り立つ怒りを飼いならさないのでしょうか。人を倒す高ぶり、分別のない悲しみ、しつけのない快楽を飼いならさないのでしょうか。みだらな笑い、締まりのない目、飽くことのない耳、度を越した言葉、とりとめのない思いを飼いならさないのでしょうか。悪い者は、わたしたちのうちにあるものを取って、わたしたちに向けて使います。そうしたものすべてを、飼いならさないのでしょうか。悪い者は、聖書の言うように、窓から、つまり感覚から、死を入れるのです（エレミヤ九・二一）。27:7:6 いいえ、まったく逆です。わたしたちは、ほかの人々の情欲にまで自由を与えてしまいました。王たちが勝利を祝って捕虜を放つようにです。条件はただ一つ、わたしたちの側になびき、神に逆らって、ますます大胆に突き進むことです。わたしたちは、良くないことに悪い報いを返しています。不敬虔に対して、はばかりなく語る自由を報いとして与えているのです。

27:8:1 それにしても、理屈屋よ、おしゃべりよ、あなたに少し尋ねます。『わたしに答えよ』と、つむじ風と雲の中からお答えになるかたも、ヨブにおっしゃいます（ヨブ三八・三）。あなたも聞いているとおり、神のもとには多くのすまいがあるのでしょうか。それとも、一つでしょうか。27:8:2 多い、とあなたはもちろん認めるでしょう。一つではない、と。では、そのすべてが満たされなければ

ならないのでしょうか。それとも、あるものは満たされ、あるものは満たされず、空のまま、むだに備えられているのでしょうか。「もちろん、すべてだ。神から出たもので、むだなものは何一つないのだから」 27:8:3 では、このすまいとは何だとするのか、言えますか。向こうでの安らぎと、幸いな人々に備えられている栄光でしょうか。それとも、ほかの何かでしょうか。 27:8:4 「ほかでもない、それだ」。それを認め合ったので、もう一つのことも調べてみましょう。わたしの言うように、このさまざまなすまいを得させる何かがあるのでしょうか。それとも、何もないのでしょうか。「もちろん、ある」 27:8:5 それは何でしょうか。「生き方と志がさまざまであることだ。それぞれが、信仰の程度に応じて、それぞれ別のすまいへ導く。わたしたちは、それを道とも呼んでいる」。では、これらの道をすべて歩むべきでしょうか。それとも、そのうちのいくつかでしょうか。 27:8:6 「できるなら、同じ一人の人が、すべてを歩むのがよい。できなければ、なるべく多く。それもできなければ、いくつか。それさえできなければ、一つでも際立って歩めば大したことだ。わたしにはそう思える」 27:8:7 あなたは正しく考えています。では、道は一つで、しかもそれは細い、と聞くとき、その言葉は何を表していると思いますか。「一つというのは、徳の道だからだ。徳の道は、多くに枝分かれしても一つだ。細いというのは、汗を流さなければならず、多くの人には歩めないからだ。反対の道を行く大ぜいや、悪の道を行く人々に比べてのことだ」 27:8:8 わたしもそう思います。それなら、すぐれた人よ、そのとおりだとすれば、なぜでしょうか。あなたがたは、わたしたちの教えに何か貧しさでもあるかのように決めつけ、ほかの道をすべて捨てています。そして、ただこの一本の道に押し寄せ、押し合っています。言葉と観想の道です。あなたがた自身はそう思っています。しかし、わたしに言わせれば、むだ話とこけおどしの道です。 27:8:9 パウロに、あなたがたを叱ってもらいましょう。パウロは、賜物を数え上げた後で、このことを厳しくとがめています。そこでこう言うのです。『みんなが使徒だろうか。みんなが預言者だろうか』（第一コリント一二・二九）。そして、その先も続けます。

27:9:1 仮に、こうだとしましょう。あなたは高い人です。高いところをも越え、お望みなら雲の上にいます。見えないものを見る人、言い表せないことを聞く人です。エリヤに次いで空高く上げられた人、モーセに次いで神の現れにあずかった人、パウロに次いで天に属する人です。それなら、なぜ、ほかの人々まで一日で聖人に仕立て、神について語る者に任じるのですか。なぜ、息を吹き込むように教えを授け、学のない物知りたちの会議を、たくさん作り出したのですか。 27:9:2 なぜ、弱い人々をクモの巣でからめ取るのですか。それが、さも知恵ある偉大なわざであるかのようにです。なぜ、スズメバチの巣をつついて、信仰に襲いかからせるのですか。なぜ、わたしたちに向けて、理屈屋たちを急ごしらえで湧き出させるのですか。昔の物語が、大地から巨人が湧き出たと語るようにです。 27:9:3 なぜ、男たちのうちの軽く、男らしくない者たちをみな、ごみのように一つの急流に寄せ集めたのですか。なぜ、へつらいで、いっそう女々しくしたのですか。なぜ、そうして不敬虔の新しい工房を造り上げたのですか。彼らの愚かさから、抜け目なく利を得ているのです。 27:9:4 これにも反論するのですか。ほかのことは、あなたにはどうでもよいのですか。どうしても舌が君臨しなければならず、言葉の産みの苦しみを抑えられないのですか。あなたには、ほかにも題目がたくさんあります。功名心を満たす題目です。そこへ、この病を向けなさい。役にも立つように。

27:10:1 ピュタゴラスの沈黙を撃ちなさい。オルペウス派の豆の掟を撃ちなさい。「あのかたがそう言われた」をめぐる、とんでもない大言も撃ちなさい。プラトンのイデアを撃ちなさい。わたしたちの魂が体を移り、巡るという説も、想起の説も撃ちなさい。美しい体を通して魂へ向かうという、美しくない愛も撃ちなさい。エピクロスの無神論、原子、哲学者らしくない快楽を撃ちなさい。アリストテレスのけちな摂理、技巧、魂を死ぬものとする言葉、教えの人間くささを撃ちなさい。ストア派の高慢、キュニコス派の貪欲と下品さを撃ちなさい。 27:10:2 空っぽで、たわごとに満ちたものを撃ちなさい。彼らは、神々やいけにえについて、偶像について、善い霊と悪さをする霊について、こけおどしを語ります。占いについて、神々を呼び出すことと死者の魂を呼び出すことについて、星の力について、こけおどしを語ります。それを撃ちなさい。 27:10:3 しかし、あなたはこうしたものを、小さく、何度も論駁されたものだとして、論じるに値しないと見下すかもしれません。そして、自分の筋にこだわり、その中で功名心を満

たすものを求めるかもしれません。それなら、わたしはここでも、あなたに広い道を差し出しましょう。27:10:4 世界について、あるいは諸世界について論じなさい。物質について、魂について、理性ある本性のうちのすぐれたものと劣ったものについて論じなさい。復活、裁き、報い、キリストの苦しみについて論じなさい。こうしたことでは、言い当てても無益ではなく、言い損ねても危険はないからです。27:10:5 しかし神には、いまは少しだけ、まもなく、おそらくはもっと完全に、お会いすることになるでしょう。わたしたちの主、キリスト・イエスご自身においてです。栄光が、世々限りなくこのかたにありますように。アーメン。

第28講話（1〜4章）神について語ること

28:1:1 わたしたちは、言葉によって、神について語る者を磨き上げました。その人がどのような者でなければならないかを述べ、だれの前で論じるべきか、いつ、どこまで論じるべきかを述べたのです。まず、論じる者は、できるかぎり清くなければなりません。光によって光がとらえられるためです。また、心を配る人々の前で論じるべきです。言葉が実を結ばない地に落ちて、実を結ばずに終わらないためです。また、外のめまぐるしさから離れて、内に静けさを得ているときに論じるべきです。取り乱した人々のように、息が途切れてしまわないためです。そして、わたしたちが受け止めたかぎり、聞く人々がわたしたちを受け止められるかぎりで論じるべきです。こうしたことは、このとおりです。わたしたちはまた、自分のために神にふさわしい新田を耕しました。いばらの中に種をまかないためです。地のおもても平らにしました。聖書によって形づくられ、また人々を形づくりながらです。さあ、いよいよ神について語る言葉に進みましょう。この話の前に、父と子と聖霊とを守り手として立てましょう。この話は、このかたがたについての話だからです。父がよしとしてくださり、子がともに働いてくださり、聖霊が息を吹き込んでくださいますように。いえ、むしろ、一つの神性から一つの照らしが来ますように。その照らしは、一つのままで分かれ、分かれたままで結ばれています。これは不思議なことです。

28:2:1 わたしは意気込んで山に登って行きます。いえ、もっと正確に言えば、意気込みながら、同時に不安を抱きながらです。意気込むのは望みのため、不安なのは弱さのためです。雲の中に入り、神とともにいるためです。神がそうお命じになるのです。だれかアロンのような人がいるなら、ともに登り、近くに立ちなさい。雲の外にとどまらなければならないとしても、それを受け入れなさい。

28:2:2 ナダブやアビウのような人、あるいは長老たちのひとりなら、登りなさい。ただし、遠く離れて立ちなさい。清めの度合いに応じてです。多くの人々のひとりで、これほどの高さと観想にふさわしくない人もいるでしょう。その人がまったく清くないなら、近づいてもなりません。安全ではないからです。せめて一時でも身を清めたなら、下にとどまりなさい。そして、声とラッパの音だけを聞きなさい。敬虔の言葉を、その表だけ聞くのです。また、煙り、いなずまのひらめく山を見なさい。登れない人々にとって、それは脅しであり、同時に驚きです。

28:2:3 だれかが悪い、荒々しい獣で、観想の言葉も、神について語る言葉も、まったく受けつけないとしましょう。その者は、悪だくみと悪意を抱いて森にひそんではなりません。何かの教えや言葉を捕らえようと、いきなり跳びかかり、健全な言葉を言いがかりで引き裂いてはなりません。それよりも、いっそう遠く離れて立ち、山から退きなさい。さもなければ、石で打たれ、砕かれ、悪い者として無残に滅びるでしょう。獣のような者にとって、真実で堅固な言葉は石なのです。

28:2:4 豹なら、その斑点もろとも死になさい。かき裂き、ほえたけり、わたしたちの魂や言葉のどれを餌食にしようかと探している獅子もいるでしょう。真理の美しく澄んだ真珠を踏みつける豚もいるでしょう。異邦のおおかみ、アラビアのおおかみ[1]もいるでしょう。詭弁にかけては、このおおかみよりも鋭い者もいるでしょう。狐もいるでしょう。人を欺く、不実な魂です。時と必要に合わせて、そのつど姿を変えます。この狐を養うのは、死んで臭いを放つ体です。あるいは小さなぶどう園です。大きなぶどう園には手が届かなかったからです。ほかにも、生肉を食らう獣で、律法に退けられ、食べて楽しむには清くないものもいるでしょう。そうしたものはみな、山から退きなさい。

28:2:5 わたしの話は、こうしたものから離れて、そうしてはじめて、堅い石の板に書き記されたいと願っているのです。しかも、その板の両面に書かれたいのです。律法には、表に現れたところと、隠れたところがあるからです。表は、下にとどまる多くの人々のため、裏は、上にまで達する少数の人々のためです。

28:3:1 友よ、奥義をともにする人々よ、真理をともに愛する人々よ、わたしの身に何が起きたのでしょうか。わたしは、神をとらえようとするかのように走って

いました。そうして山に登り、雲を突き抜けました。物質と物質に属するものから離れて内に入り、できるかぎり自分の内に集まったのです。28:3:2 ところが、目を凝らしたとき、わたしはかろうじて神のうしろを見ました。それも、岩におおわれてのことです。わたしたちのために肉となってくださった神のことばにおおわれて、です。そして少しのぞき見ましたが、見たのは本性の前のほう、混じりけのないところではありません。そこは、本性みずからに、つまり三位一体に知られているところです。いちばん奥の幕の内にとどまり、ケルビムにおおわれているところです。わたしが見たのは、いちばんうしろの、わたしたちにまで届いているところです。28:3:3 それは、わたしの知りうるかぎりでは、造られたもののうちにある神の偉大さです。神が造り出し、治めておられるもののうちにある偉大さです。あるいは、聖なるダビデの呼び方では、威厳です（詩篇一一一・三、一四五・五）。28:3:4 これらのものが、神のうしろです。神がご自分のあとに残された、ご自分の印のすべてです。ちょうど、水に映る太陽の影や像のようなものです。それは、弱った目に太陽を指し示します。太陽そのものを見つめることはできないからです。太陽は、混じりけのない光で感覚を打ち負かしてしまいます。28:3:5 ですから、あなたが神について語るのも、このようになるでしょう。たとえ、あなたがモーセであり、パロに対して神であっても、そうです。たとえ、パウロの言うように第三の天にまで達し、口に言い表せない言葉を聞いたとしても、そうです（第二コリント一二・二、四）。たとえ、パウロをも超えて、天使や大天使の位と立場にあずかったとしても、そうです。28:3:6 天のものはすべて、そうなのです。天を超える何かがあっても、そうです。それは、本性においてわたしたちよりはるかに高く、神に近いかもしれません。それでも、神からも、神を完全にとらえることからも隔たっています。その隔たりは、それがわたしたちの上にそびえる高さよりも大きいのです。わたしたちは、組み合わされた、低い、下へ重く沈む混じり合ったものです。

28:4:1 そこで、改めてこう始めなければなりません。「神を思い描くことは難しい。言い表すことはできない」。ギリシア人のあいだで神について語った者のひとりが、そう論じました。わたしの見るところ、巧みなやり方です。「難しい」と言うことで、自分はとらえたと思われるようにしたのです。そして「言い表せない」と言うことで、反証を逃れたのです。28:4:2 しかし、わたしの言葉ではこうです。「言い表すことはできない。思い描くことは、なおさらできない」。思い描いたものなら、言葉が明らかにすることもできるでしょう。十分にではなくても、少なくともおぼろげには明らかにできます。耳がすっかり損なわれてはおらず、思いもすっかり鈍ってはいない人に向けてならです。28:4:3 しかし、これほどのものを思いのうちに抱え込むことは、まったくできず、手立てもありません。たるんで下ばかり向いている人々には、もちろんできません。きわめて高く、神を愛する人々にもできません。生まれたあらゆる本性にも、同じようにできません。この闇とこの厚ぼったい肉が、真理を見て取ることをさえぎっている者たちのことです。28:4:4 より上の、知性ある本性にとっても、そうなのではないかと思います。これらの本性は、神の近くにいて、光の全体に照らされています。ですから、もしかすると、はっきりと見て取ることもあるでしょう。すべてではないにしても、少なくともわたしたちよりは完全に、くっきりと見て取るでしょう。また、位の段階に応じて、あるものは多く、あるものは少なく見て取るでしょう。

訳注

1 ギリシア語訳のハバクク書の言葉。口語訳では『夜のおおかみ』。

第28講話（5〜9章）神があることと、神が何であるか

28:5:1 このことは、ここに置いておきましょう。わたしたちの考えはこうです。すべての思いととらえることにまさるのは、神の平安だけではありません。義人たちのために約束のうちにたくわえられているものも、そうです。それは、目で見ることも、耳で聞くこともできず、思いで観想することも、せいぜいわずかしかできないものです。被造物を正確に見きわめることも、そうです。被造物についても、あなたがもっているのはその輪郭だけです。次の言葉を聞くとき、そう信じなさい。『わたしは、あなたの指のわざである天を見るでしょう。月と星とを、そしてそこに定まっている秩序を見るでしょう』（詩篇八・三）[1]。いま見ているのではなく、いつか見るであろう者として言っているのです。しかし、それらよりはるかにまさって思いを超えるのは、それらを超え、それらを生じさせた本性です。この本性は、とらえることも、抱え込むこともできません。とらえられないと言うのは、その本性があることも、わたしたちの信仰も空虚ではです。28:5:2 わたしたちの宣教はむなしくはなく、わたしたちが知らないことを認めたからありません。わたしたちが教えとして立てているのは、宣教や信仰をむなしくするようなことではないのです。わたしたちの分別を、またもや、神を否むことや言いがかりの口実にしてはなりません。わたしたちが知らないことを認めたからといって、わたしたちに向かって高ぶってはなりません。28:5:3 何かがあると確信することと、それがいったい何であるかを知ることとは、大きく違うのです。

28:6:1 神があること、すべてを造り、保つ原因があることについては、目が教師となり、生まれつきの道理も教師となります。目は、見えるものに向かいます。それらが美しく据えられ、道を進み、言ってみれば動かずに動き、運ばれているのを見るのです。道理は、見えるもの、秩序づけられたものを通して、それらを始めたかたを推し量ります。28:6:2 神がすべてに存在を与え、保っておられるのでなければ、どうしてこの宇宙が存在するようになり、まとまりを保ったでしょうか。だれかが、美しく念入りに作られた竪琴を見るとします。その調子のよさと整いを見るとします。あるいは、竪琴の演奏そのものを聞くとします。その人は、竪琴を作った者と弾く者のほかには、何も思い浮かべないでしょう。目では作り手や弾き手を知らなくても、思いのうちでその者のもとへさかのぼるでしょう。28:6:3 同じように、わたしたちにも、造るものは明らかです。造られたものを動かし、守るものも明らかです。たとえ、思いのうちに抱え込むことはできなくてもです。生まれつきの道理による証明に従って、自ら進んでここまで来ようとしない者は、まったく分別のない人です。28:6:4 しかし、わたしたちが想像し、形にし、言葉で素描したもの、それが神だということにはなりません。もしだれかが、いつか、いくらかでも神を思いのうちに包み込んだことがあるとしても、その証拠は何でしょうか。28:6:5 いったいだれが、それほど知恵の果てにまで達したでしょうか。だれが、それほどの賜物にふさわしいとされたでしょうか。だれが、思いの口をそれほど開いて、霊を吸い込んだでしょうか。すべてのものをきわめ、知り、神の深みまでもきわめておられる御霊によって、神をとらえるほどにです。もう先へ進む必要がなく、欲求の究極のものをすでに手にしているほどにです。それは、高い志をもつ人の生き方も思いも、すべてが急いで目指すものです。

28:7:1 理屈の道筋をすべて頼みにするなら、あなたは神をいったい何だと考えるのでしょうか。論を吟味していけば、それはあなたをどこへ導き上るのでしょうか。このうえない知恵者よ、このうえない神学者よ、限度をこえて誇る人よ。28:7:2 神は体でしょうか。では、無限なもの、境のないもの、形のないもの、触れられないもの、見えないものが、どうして体なのでしょうか。それとも、これらも体なのでしょうか。何という勝手でしょう。体の本性は、そのようなものではありません。28:7:3 それとも、体ではあるが、これらの性質はもたないのでしょうか。何という鈍さでしょう。それでは、神はわたしたちより何も多くもたないことになります。限られているなら、どうしてあがめるべきものでしょうか。ま

た、要素から組み立てられ、ふたたび要素に分かれ、あるいはすっかり崩れることを、どうして免れるでしょうか。28:7:4 組み合わせは争いの始まりです。争いは分離の始まり、分離は崩壊の始まりです。崩壊は、神と最初の本性には、まったく無縁です。ですから、分離はありません。崩壊があってはならないからです。争いもありません。分離があってはならないからです。組み合わせもありません。争いがあってはならないからです。それゆえ、体でもありません。組み合わせがあってはならないからです。論は、こうして最後のものから最初のものへとさかのぼって、成り立つのです。

28:8:1 神があるものを限り、ほかのものに限られるとすれば、どうして次のことが保たれるでしょうか。神はすべてを貫き、すべてを満たしておられる、ということです。『わたしは天と地とに満ちているではないか、と主は言われる』（エレミヤ二三・二四）とあるとおりです。また、『主の霊は世界に満ちている』（知恵一・七）ともあります。28:8:2 さもなければ、神は空っぽの宇宙を通って行き渡ることになります。そうなると、わたしたちにとって、すべてのものは消え失せます。それも、神が侮りを受けるためです。神は体となり、しかもご自分がお造りになったものを失うのです。あるいは、体が体の中にあることになります。これはありえないことです。あるいは、からみ合い、並び置かれることになります。液体どうしが混ざり合うときのようにです。神はあるものを切り、またあるものに切られるでしょう。これは、エピクロス派の原子の説よりも、さらにばかげた、老婆の作り話めいたものです。こうして、体についての論は、わたしたちの手の中でばらばらになります。体をなさず、何の固さももたなくなるのです。28:8:3 では、神は物質でないと言うとしましょう。ある人々が考えたように、それが第五の元素であり、円を描いて運ばれるものだとします。そうであれば、それは物質でない何か、第五の体だとしておきましょう。彼らが望むなら、体をもたないものだとしてもよいでしょう。彼らが自分勝手に言葉を使い、こしらえるのに任せます。このことについて、いまは争いません。28:8:4 では、神は、動かされ運ばれるもののうちで、どういう位置を占めるのでしょうか。それが侮りであることは言わないでおきます。お造りになったかたが造られたものと同じように動かされ、運ぶかたが運ばれるものと同じように運ばれることになるのです。彼らがそもそも、神が運ぶかただと認めるならの話ですが。28:8:5 では、この第五の元素を動かすのは何でしょうか。すべてを動かすのは何でしょうか。そして、それを動かすのは何でしょうか。さらに、それを動かすのは何でしょうか。こうして限りなく続きます。それに、運ばれるものなら、どうして必ず場所のうちにないことがあるでしょうか。28:8:6 では、第五の元素とは別の何かだと言うとしましょう。それが天使の体だとすれば、天使が体だと、どこから分かるのでしょうか。それはどのような体なのでしょうか。それに、そうなら、神は天使をどれほど超えておられることになるでしょうか。天使は神に仕える者なのにです。28:8:7 天使の体よりも上のものだとすれば、またもや、数えきれない体の群れが持ち込まれます。たわごとの淵です。どこにも止まることができません。

28:9:1 こうして、わたしたちにとって、神は体ではありません。神の霊感を受けた人々のだれひとりとして、そう言ったことも、受け入れたこともありません。また、わたしたちの囲いの中の教えでもありません。28:9:2 残るのは、神が体をもたないと考えることです。しかし、体をもたないとしても、それもまだ、本質を示し、包み込むものではありません。生まれることのないこと、始まりのないこと、変わらないこと、朽ちないことも、そうです。そのほか、神について、あるいは神のまわりのこととして言われるものも、みな同じです。28:9:3 神が始まりをもたず、ご自分のあり方から外れることがなく、限られることもない。それは、神の本性と実在にとって、何なのでしょうか。いや、存在の全体を抱え込むことこそ、なお論じ、調べるべきこととして残っています。それをするのは、本当に神の思いをもち、観想においてより完全な人です。28:9:4 体であるとか、生まれたとか言うだけでは足りません。それでは、それらの言葉が当てはまるあれこれのものを示し、明らかにすることはできません。思い描いているものを完全に、十分に示そうとするなら、それらの性質を担っているものも言わなければなりません。この、体をもち、生まれ、朽ちるものは、人なのか、牛なのか、馬なのか、です。そのように、あるものの本性を探る人も、それが何でないかを言うだけで止まりはしません。何でないかを言うことに加えて、何であるかも言わなければなりません。何でないものを取り去り、何であるものを立てることで、思い描かれているものが抱え込まれるためです。それに、すべてのものを一つ一つ

否定するよりも、一つのことを抱え込むほうが、たやすいのです。28:9:5 何でないかを言って、何であるかを黙っている人は、次のような人に似ています。五の二倍はいくつかと問われて、二ではない、三でも四でも五でもない、二十でも三十でもない、と答えるのです。手短に言えば、十に満たない数でも、何十という数でもない、と言うのです。それでいて、十であるとは言わず、問う人の思いを、求めているものの上にしっかり据えてやらないのです。28:9:6 何であるかから何でないかを明らかにするのは、はるかにたやすく、手短です。何でないものを取り去って何であるかを示すよりも、そうなのです。いずれにせよ、このことは、だれの目にも明らかです。

訳注

1 ギリシア語訳の詩篇は『見るであろう』と未来の形で言う。

第28講話（10〜13章）神と場所、神の呼び名

28:10:1 さて、神はわたしたちにとって体をもたないものです。そこで、もう少し調べてみましょう。神はどこにもおられないのでしょうか。それとも、どこかにおられるのでしょうか。どこにもおられないとすれば、ひどく詮索好きな人なら、こう問うかもしれません。それなら、そもそもどうして存在しうるのか、と。28:10:2 ないものはどこにもないのなら、どこにもないものは、おそらく、ないものだからです。どこかにおられるとすれば、もちろん、宇宙の中か、宇宙の上か、そのどちらかにおられるはずです。28:10:3 宇宙の中なら、その一部か、至るところか、です。一部におられるなら、神はその一部、つまり宇宙より小さいものに限られることになります。至るところにおられるなら、より大きなもの、ほかの大きなものよりも大きなものに限られることになります。つまり、包まれるものが、包むものに限られるということです。宇宙が宇宙そのものに包まれ、しかも、限られることを免れる場所が一つもないとすれば、そうなります。28:10:4 宇宙の中におられる場合は、以上のとおりです。それに、宇宙ができる前には、どこにおられたのでしょうか。これも、少なからぬ難問です。では、宇宙の上におられるとすれば、神を宇宙から分けるものは何もないのでしょうか。28:10:5 宇宙の上とは、どこなのでしょうか。超えるものと超えられるものを、どうして思い描けるでしょうか。それらを切り分け、分ける境が何もないのにです。やはり、間にあるものがなければならないのではありませんか。宇宙と、宇宙の上にあるものとの境となるものです。28:10:6 それは、場所でなくて何でしょうか。わたしたちが退けた、あの場所です。思いでとらえられるなら、神はそれだけでもう限られていることになります。しかし、そのことは、まだ言わずにおきます。とらえることも、限ることの一つの形だからです。

28:11:1 では、なぜわたしは、こうしたことを論じてきたのでしょうか。それも、おそらく多くの人の耳に合う以上に念入りに、しかも、いまはやりの言論の型に合わせてです。この型は、気高く素直なものを軽んじ、ねじれた謎めいたものを持ち込みました。木はその実でわかります。そのように、こうした教えを動かしている闇が、語られることの暗さからわかるようにしてです。28:11:2 わたしがそうしたのは、自分も人の意表を突くことを言うと思われたかったからではありません。結び目を編んでは、固く結ばれたものをほどいてみせ、知恵にすぐれた者と見られたかったからでもありません。それこそはダニエルの大いなる不思議でした（ダニエル五・一二）。そうではなく、わたしの話が初めから言おうとしてきたことを、明らかにしたかったからです。28:11:3 それは何だったでしょうか。神は人の思いではとらえられない、ということです。神がどれほど大いなるかたかを、まったく想像することもできない、ということです。それは、神が妬むからではありません。妬みは、神の本性からは遠いものです。神の本性は情に動かされることがなく、ただひとり善く、主であるからです。とりわけ、ご自分がお造りになったもののうちで最も尊いもの、すなわち人を妬むことはありません。ことばなるかたにとって、ことばをもつもの、つまり理性あるもの以上に、何があるでしょうか。28:11:4 そもそも、理性あるものが存在するようになったこと自体が、このうえない善のわざなのです。また、神がそうなさるのは、ご自分の誉れと栄光のためでもありません。神はすでに満ち足りておられます。近づきえないことによって尊ばれ、あがめられようとなさるのではないのです。ほかの人を妨げて、自分が一番になろうとすること。それはまったく詭弁家のすることです。神に縁がないのは言うまでもありません。人並みに良識があり、少しでもまっとうな自覚をもつ人にも、ふさわしくないのです。

28:12:1 ほかの理由もあるかどうかは、神により近い人々が知っているでしょう。その窮めがたいさばきを見守り、観想する人々です。それほどの徳をもつ人が本当にいて、言われるとおり淵の足跡を歩んでいるならの話ですが。28:12:2 いずれにせよ、わたしたちのとらえたかぎりで言いましょう。見きわめがたいものを、小さな物差しで測ってのことですが。おそらく一つは、たやすく手に入った

ために、手に入れたものを失うのもたやすくならないようにするためです。苦労して手に入れたものは、いっそう固く保たれます。たやすく手に入れたものは、すぐに吐き捨てられがちです。もう一度手に入れられるものとみなされるからです。こうして、恵みがたやすく手に入らないこと自体が、恵みとなります。少なくとも、わきまえのある人々にとってはそうです。28:12:3 おそらくもう一つは、わたしたちが、あの落ちた明けの明星と同じ目にあわないためです。光をすべて受け入れたために、全能の主に向かって首をもたげ、高ぶりから落ちる。だれよりもあわれな落ち方です。28:12:4 あるいはまた、苦労と輝かしい生き方の報いが、かの世でいっそう大きくなるためかもしれません。この世で清められ、慕い求めるものを忍耐して待つ人々への報いです。そのために、わたしたちと神との間には、この体の暗がりが立っています。昔、エジプト人とヘブル人との間に、あの雲が立ったようにです。28:12:5 神が『やみをおおいとして』お置きになった（詩篇一八・一一）その闇とは、おそらくこれのことでしょう。わたしたちの厚ぼったさです。そのために、わずかな人しか、それもほんの少ししか、のぞき見ることができません。このことは、それを仕事とする人々に論じさせ、探究をできるかぎり先へ進めさせましょう。28:12:6 わたしたちは、聖なるエレミヤの言う『地の捕われ人』（哀歌三・三四）であり、この厚ぼったい肉をまとっています。そのわたしたちにわかっているのは、次のことです。自分の影を追い越すことはできません。どんなに急いでも、とらえようとすればするだけ、影はいつも先に行くからです。間にある光と空気を抜きにして、見えるものに目を近づけることはできません。泳ぐものが水の外をすべるように進むこともできません。それと同じように、体のうちにある者は、体に属するものをすっかり抜きにしては、知性で知られるものとともにいられないのです。28:12:7 わたしたちのものが、いつも何か割り込んでくるからです。知性が、見えるものからできるかぎり自分を切り離し、自分ひとりになって、自分と同じ類の見えないものに近づこうとしてもです。あなたは、次のようにしてそれを知るでしょう。

28:13:1 霊、火、光、愛、知恵、義、知性、ことば、そのほかこうしたものは、最初の本性の呼び名ではないでしょうか。では、どうでしょう。28:13:2 霊、すなわち息を、動きと流れ出しなしに思い描けるでしょうか。火を、燃えるものを抜きにして、上へ向かう動きも、固有の色も形もなしに思い描けるでしょうか。光を、空気と混ざらず、いわば生み出し照らすものから切り離されたものとして、思い描けるでしょうか。28:13:3 知性とは、どのようなものでしょうか。ほかのものの中にあって、考えがその動きであるような知性ではないでしょうか。考えが内にとどまっているにせよ、外に出されるにせよです。ことばとは、わたしたちの内に静まっていることばか、流れ出ることばのほかに、何でしょうか。28:13:4 「消えていく」とは、言いかねるからです。知恵だとしても、身についた状態としての知恵、観想することがらに向かう知恵のほかに、何でしょうか。それが神のことがらであれ、人のことがらであれ、です。義と愛は、ほめられる心の向きではないでしょうか。義は不義に、愛は憎しみに逆らうものです。強まったり弱まったりし、加わったり失われたりします。そしておよそ、色が体を変えるように、わたしたちを形づくり、変えるものではないでしょうか。28:13:5 それとも、わたしたちはこうした動きや変化から離れなければならないのでしょうか。そして、これらの呼び名から、神そのものを、できるかぎり見るのでしょうか。なぞらえから、ある部分的な像を集めてです。では、これらの呼び名から像を集め、しかもそれをこれらと同じものとしないには、どんな手立てがあるでしょうか。28:13:6 あるいは、どうしてこれらすべてが、しかもその一つ一つが完全に、一つのものでありえるでしょうか。本性において組み合わされておらず、なぞらえようのないものです。こうして、わたしたちの知性は、体に属するものから出て、むき出しの、体をもたないものと交わろうとして、疲れ果てます。自分の弱さを抱えたまま、力を超えるものを調べるかぎり、そうなのです。28:13:7 ことばをもつ本性はみな、神を、第一の原因を慕い求めます。しかし、わたしが述べた理由のために、とらえることはできません。慕う思いに疲れ、いわばあがき、その損失に耐えられず、二番目の船出をします。つまり、次の手を取るのです。一つは、見えるものに目を向け、そのうちの何かを神とすることです。これは悪い考えです。見えるもののうち、見る者よりも高く、神に似たものが何かあるでしょうか。どれほどまさるというのでしょうか。一方が拝み、他方が拝まれるほどにです。もう一つは、見えるものの美しさと秩序を通して神を知ることです。目

を、目を超えるものへの道案内として使うのです。見えるものの壮麗さのために、神を失うことのないようにするのです。

第28講話（14〜18章）　見えるものを拝む人々と、神を求めた聖徒たち

28:14:1 ここから、ある人々は太陽を拝みました。ある人々は月を、ある人々は数多くの星を拝みました。ある人々は、それらとともに天そのものを拝みました。こうした人々は、これらのものに、宇宙を導くはたらきまで与えたのです。その動きのありさまや速さに応じて導く、というのです。ある人々は元素、すなわち地、水、空気、火を拝みました。役に立つからです。それらがなければ、人の暮らしは成り立つことさえできません。またある人々は、見えるもののうち、めいめいがたまたま行き当たったものを拝みました。目にしたもののうち最も美しいものを、神々として、自分たちの守り手に立てたのです。28:14:2 さらに、絵姿や像まで拝む人々もいます。初めは身内の像でした。少なくとも、情が深く、体のことに傾きやすい人々がそうしました。亡くなった人を、形見によって敬ったのです。次には、よその人の像も拝みました。その人々より後の、それもずっと後の世代の人々です。最初の本性を知らず、伝えられた敬い方に従ったのです。それを、法にかなった、欠かせないものとみなしてです。時がたつうちに習わしが固まり、法とみなされたからです。28:14:3 わたしの思うに、ある人々は、権力にへつらい、力の強さをほめ、美しさに見とれました。そして、自分たちが敬っていた人を、時がたつうちに神にしてしまったのです。そのうえ、欺きを助けるために、何かの作り話まで持ち出しました。

28:15:1 その中でも情欲に囚われた人々は、情欲そのものまで神々とみなしました。あるいは、情欲に神々をあてがって敬いました。怒り、血を流すこと、好色、酒に酔うこと、そのほか、これに似たものなら何でもです。こうして、自分の罪の言いわけを見つけたのです。りっぱでも正しくもない言いわけです。28:15:2 そして、ある神々は地上に残し、ある神々は地の下に隠しました。賢いやり方は、これだけでした。またある神々は、天に上げました。なんとばかげた分け前の割り振りでしょう。それから、こうした作りごとの一つ一つに、神々や霊の名を付けました。迷いのおもむくまま、勝手気ままにです。そして像を建てました。像は、金をかけたおとりでもあります。その人々は、これを血といけにえの脂の煙で敬うべきだと考えました。中には、ひどく恥ずべきわざ、狂乱や人殺しまで敬うべきだと考えた者もいます。28:15:3 このような神々には、このような敬い方がふさわしかったからです。やがては、怪物のような獣や、四つ足のものや、這うものによって、自分をはずかしめました。それも、そのうちで最も醜く、最も滑稽なものによってです。そして、神の栄光を持ち出して、これらのものに付けてしまいました。そのため、どちらをいっそう軽んじるべきか、決めるのはたやすくありません。拝む者たちか、拝まれるものたちか、です。28:15:4 おそらく、仕える者たちのほうを、はるかにいっそう軽んじるべきでしょう。彼らは、ことばをもつ本性のものであり、神から恵みを受けていながら、劣ったものを、まさるもののように上に立てたからです。これも、悪い者の巧みなはかりごとでした。善いものを、悪のために使ったのです。悪い者のたくらみの多くは、そのようなものです。28:15:5 人々の慕う思いは、神を探し求めてさまよっていました。悪い者は、その思いを引き受けました。力を自分のほうへ引き寄せ、慕い求める心を盗むためです。そして、道を求める盲人の手を引くようにして、人々を、ある者はこちら、ある者はあちらで、崖から突き落としました。死と滅びの一つの淵へと、まき散らしたのです。

28:16:1 その人々は、このとおりでした。しかし、わたしたちは違います。わたしたちは神を慕い求め、導く者も舵を取る者もいないことに耐えられません。理性は、そのようなわたしたちを受け止めました。そして、見えるものに向かい、創造の初めからあるものに行き当たりました。けれども、わたしたちをそこで止めはしませんでした。感覚の上でわたしたちと同じ列にあるものに、導き手の座を与えることは、理性のすることではなかったからです。理性は、それらを通して、それらを超えるものへと導きます。それらに存在を与えておられるかたへと導くのです。28:16:2 天にあるものと地にあるもの、空を行くものと水の中にすむ

ものを、秩序づけたのは何でしょうか。いや、むしろ、それより前にあるもの、天と地と空気と水の本性を秩序づけたのは何でしょうか。28:16:3 だれが、これらを混ぜ合わせ、また分けたのでしょうか。これらが互いに結びつき、一つに育ち、息を合わせているのは、どこから来るのでしょうか。こう言った人を、わたしはほめます。たとえ信仰の外の人であってもです。これらを動かし、やむことのない、妨げられない運行を導いているのは何でしょうか。28:16:4 これらの作り手ではないでしょうか。すべてのものに理法をお置きになり、それに従って宇宙が運ばれ、治められるようになさったかたではないでしょうか。では、これらの作り手とはだれでしょうか。これらをお造りになり、存在させてくださったかたではないでしょうか。28:16:5 偶然に、これほどの力を帰すわけにはいかないからです。生じたことは、偶然のしわざだとしましょう。では、秩序づけたのはだれのしわざでしょうか。それも、よければ、偶然に譲りましょう。では、それらが初めに成り立ったときの理法のとおりに、それらを保ち、守ってきたのはだれのしわざでしょうか。28:16:6 偶然とは別の何かでしょうか。それとも偶然でしょうか。もちろん、偶然とは別のものです。それは、神のほかの何でありえるでしょうか。こうして、神から出た理性が、わたしたちを見えるものから神へと導き上げました。この理性は、すべての人に生まれつき結びつき、わたしたちのうちにある最初の道理であり、すべての人につながっています。では、改めて始めて、語りましょう。

28:17:1 神が、その本性と本質において何であるか。それを見いだした人は、これまでひとりもいません。これからも、決して見いだすことはないでしょう。もっとも、いつか見いだすことがあるかどうかは、望む人々が探り、論じればよいことです。28:17:2 わたしの考えでは、見いだすのは、このときです。この神に似た、神的なもの、つまりわたしたちの知性と理性が、自分と同じ類のものと交わるときです。そして、かたちが原型のもとへ上っていくときです。かたちは、いまその原型を慕い求めているのです。28:17:3 あの深く論じられてきた言葉が言っているのも、このことだとわたしは思います。わたしたちは、知られているほどに、いつか知るようになる、という言葉です。いまのところは、わたしたちに届くものはみな、わずかな流れ出にすぎません。いわば、大いなる光の小さな照り返しです。28:17:4 ですから、神を知った人や、知っていたとあかしされている人がいるとしても、その人が知ったのは、ある程度までです。同じほどには照らされていないほかの人より、明るく見える程度にすぎません。そして、まさっていることが、完全だとみなされたのです。真理に照らして測られたのではなく、隣の人の力に照らして測られたのです。

28:18:1 そういうわけで、エノスは主を呼ぶことを望みました[1]。成し遂げられたのは、望むことでした。それも、知ることを望んだのではなく、呼ぶことを望んだのです。エノクは、たしかに移されました。しかし、それが神の本性を抱え込んだからなのか、これから抱え込むためなのかは、まだ明らかではありません。28:18:2 ノアが神に喜ばれたことは、りっぱなことです。ノアは、世界をまるごと水から救い出すことを任されました。いや、むしろ世界の種を、です。洪水を逃れる小さな木の舟によってです。偉大な族長アブラハムは、たしかに信仰によって義とされました。また、不思議ないけにえをささげます。あの大いなるいけにえの型です。しかし、神を神として見たのではありません。人として食事でもてなしたのです。そして、とらえたかぎりで敬ったので、ほめられました。28:18:3 ヤコブは、高いはしごの幻を見ました。御使たちが上っていくさまも見ました。また、奥義として柱に油を注ぎます。それはおそらく、わたしたちのために油を注がれた石を、それとなく示すためでした。また、ある場所に『神の姿』という名を付けます[2]。お現れになったかたを敬ってのことです。また、人に対するように、神と組打ちします。神が人と組打ちするとは、どういうことであるにせよ、です。あるいは、人の徳を神と突き合わせて試すことだったのかもしれません。また、組打ちのしるしを体に負います。生じた本性が負けたことを示すしるしです。そして、敬虔の褒美として、新しい名を受けます。ヤコブに代えて、イスラエルと名を改めたのです。これこそ、あの大いなる尊い名です。しかし、次のことを誇った者はいません。ヤコブ自身も、ヤコブを父とする十二の部族のうちでヤコブにまさる者も、今日まで誇ったことがないのです。神の本性や姿を、そっくり受け入れた、ということです。

訳注

1 ギリシア語訳の創世記四・二六。口語訳は『人々は主の名を呼び始めた』。

2 ギリシア語訳の創世記がペニエルを訳した名。『神の家』（ベテル）と読む刊本もある。

第28講話（19〜21章）　預言者と使徒が見たものと、知ることの難しさ

28:19:1 エリヤに神の臨在をおぼろに示したのは、激しい風でも、火でも、地震でもありませんでした。あなたが聖書の記事で聞くとおりです（列王紀上一九・一一〜一二）。示したのは、何か小さなそよ風でした。しかも、示したのは臨在であって、本性ではありません。それも、どのようなエリヤにでしょうか。28:19:2 火の車が天へ運び上げた人です。正しい人が人を超えていることを示すためでした。では、先の時代の士師マノアと、後の時代の弟子ペテロに、あなたはどうして驚かないのでしょうか。28:19:3 マノアは、幻のうちにお現れになった神を見ることにさえ耐えられませんでした。そのため、「わたしたちはもうおしまいだ。妻よ、わたしたちは神を見たのだ」（士師記一三・二二）と言いました。人には、神の幻さえ受け止めきれないからです。まして本性は、なおさらです。ペテロは、お現れになったキリストさえ、舟に迎え入れようとせず、そのため、去っていただこうとしました。28:19:4 けれども、ペテロはほかの者たちよりも熱心にキリストを知ろうとした人です。そのため、さいわいだと言われ、最も大いなるものを託されました。では、イザヤについては、何と言うでしょうか。最も大いなるものを目にしたエゼキエルや、ほかの預言者たちについては、何と言うでしょうか。28:19:5 そのうちイザヤは、栄光の座に着いておられる万軍の主を見ました。六つの翼をもつセラピムが主を取り囲み、ほめたたえ、覆い隠していました。また、自分が燃えている炭で清められ、預言のために整えられるのを見ました。エゼキエルは、神の乗り物であるケルビムを描いています。ケルビムの上の王座、王座の上の大空、大空のうちにお現れになったかたも描いています。また、ある声や、動きや、わざも描いています。これらは、昼間の幻で、聖徒たちにだけ見えるものだったのでしょうか。夜に見た、偽りのない夢だったのでしょうか。心に刻まれた印で、心が来るべきことに、いまあることのように触れたのでしょうか。あるいは、何かほかの、言い表せない預言の形だったのでしょうか。わたしには言えません。けれども、預言者たちの神はご存じです。そうしたことをその身に受けた人々も知っています。28:19:6 しかし、いま話してきた人々も、彼らのような者のだれも、書いてあるとおり、主の実在と本質のうちに立ったことはありません（エレミヤ二三・一八）[1]。神の本性を見たことも、語り明かしたこともないのです。

28:20:1 第三の天は、パウロに何かを与えました。パウロは、そこまで進み、あるいは上り、あるいは引き上げられました。もしそれらが口外できるものだったなら、わたしたちは、神について、もう少し多くを知ったかもしれません。もっとも、それが、あの引き上げの奥義であったとすればです。28:20:2 けれども、それは口に言い表せないものでした。ですから、わたしたちも、沈黙をもって敬いましょう。ただ、パウロ自身がこう言うのを、これだけは聞きましょう。『わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない』（第一コリント一三・九）。このことと、これに似たことを告白しているのは、知識においてつたなくない人です。自分のうちで語っておられるキリストの証拠を見せると言って迫った人です。真理のために先頭に立って戦った、偉大な教師です。この人は、この下の知識をみな、鏡や謎と変わらないものとみなしています（第一コリント一三・一二）。その知識は、真理の小さな写しのうちにとどまっているからです。28:20:3 こうしたことを調べるわたしが、余計なことを無用に詮索している、とある人々にひどく思われないのなら、こう言えます。ことばなるかたご自身は、いまは担いきれないことがあると、それとなくお示しになりました（ヨハネ一六・一二）。それは、いつか担えるようになり、はっきり示されることでした。それは、おそらくほかでもない、これらのことだったのでしょう。また、ヨハネは、ことばなるかたの先駆けであり、真理の大いなる声です。そのヨハネは、この下の世そのものも収めきれないものがあると言い切りました（ヨハネ二一・二五）。それも、これらのことだったのでしょう。

28:21:1 さて、どんな真理も、どんな論も、つきとめがたく、見きわめがたいものです。わたしたちは、いわば小さな道具で大きなものを作っています。人の知恵で、存在するものの知識を追い求めているのです。そして、感覚とともに、少なくとも感覚なしにではなく、知性で知られるものに向かっています。その感覚に、わたしたちは振り回され、迷わされます。裸の知性で裸のものごとに出会って、もう少し真理に近づくということが、わたしたちにはできません。とらえたものによって知性を形づくることもできません。28:21:2 神についての論は、完全であればあるほど、達しがたくなります。難点も多くなり、その解き方も骨の折れるものになります。どんな妨げも、たとえごく小さなものでも、論の走りを止め、阻み、前へ進む勢いを断ち切るからです。それは、走っている馬を、手綱で急に引き戻す人々のようです。思いがけない揺さぶりで、馬の向きを変えてしまうのです。28:21:3 ソロモンもそうです。ソロモンは、先にいたすべての人々にも、同じ時代の人々にもまさって、ことのほか知恵を得ました。神からの賜物として広い心を授かり、砂よりも豊かに広がる観想をもっていました。そのソロモンも、深みに踏み入れば踏み入るほど、目がくらみます。そして、神についての論がどれほど自分から逃れていったかを見いだすことを、知恵の極みとします。28:21:4 パウロも、達しようと努めます。神の本性に、とは言いません。それがまったくできないことを、パウロは知っていたからです。ただ、神のさばきにだけです。けれども、上っていく道に出口も、とどまるところも見つかりません。思いの探求も、はっきりした終わりに行き着きません。足りないものが、いつもまた少し姿を見せるのです。ああ、なんという不思議でしょう。わたしも同じ思いを味わうために、こう叫びます。そこでパウロは、驚きのうちに話を締めくくります。そして、このようなものを神の富と深さと呼び、神のさばきがとらえられないことを告白します（ローマ一一・三三）。ダビデとほとんど同じことを言っているのです。ダビデは、あるときは、神のさばきを大きな淵と呼びます（詩篇三六・六）。その底は、物差しでも感覚でも測り知ることができません。またあるときは、知識が、自分自身から、自分の成り立ちから、驚くべきものとなったと言います。知識が自分の力とつかむ力を超えて強いものになった、とも言います（詩篇一三九・六）[2]。

訳注

1 口語訳は『主の議会に立って』。ギリシア語訳の語を本質の意味に取る。

2 ギリシア語訳は『あなたの知識はわたしから驚くべきものとなった』。

第28講話（22〜25章）人の成り立ちと、生きものの不思議

28:22:1 実際、ダビデはこう言うのです。「ほかのことはさておき、わたし自身に目を向けよう。人の本性と成り立ちのすべてに目を向けよう。わたしたちの混じり合いとは何か。わたしたちの動きとは何か。死なないものが、どうして死ぬものと混ぜ合わされたのか。28:22:2 わたしは、どうして下へ流れ去りながら、上へ運ばれるのか。魂は、どうして限られているのか。どうして体に命を与えながら、体の受ける苦しみにもあずかるのか。知性は、どうして限られていて、しかも限りがないのか。どうしてわたしたちのうちにとどまりながら、運ばれ流れる速さで、すべてを訪れるのか。28:22:3 知性は、どうして言葉によって受け取られ、分け与えられるのか。どうして空気を通って進み、ものごととともに入ってくるのか。どうして感覚と手を組みながら、感覚から身を引くのか。さらにそれより前に、自然の仕事場での、わたしたちの最初の形づくりと組み立てとは何か。28:22:4 最後の形の仕上げと完成とは何か。養いを求める思いと、それを配る備えとは何か。だれが、教わりもしないわたしたちを、生きるための最初の泉、乳の手だてへと導いたのか。28:22:5 どうして体は食べ物で、魂は言葉で養われるのか。生む者と生まれた者を愛情で結び合わせている、自然の引き寄せる力と互いの結びつきとは何か。28:22:6 形は、どうして変わらずに保たれながら、見分けの印によって分かれているのか。その数はこれほど多いのに、それぞれの特徴は、どうして互いに紛れることがないのか。同じ種の生きものが、どうして死ぬものでもあり、死なないものでもあるのか。死ぬのは世を去ることによってであり、死なないのは出生によってである。28:22:7 一方が去り、他方が代わって入ってくるからだ。ちょうど、立ち止まることなく、しかもとどまり続ける川の、その水路のように」。あなたは、さらに多くのことを論じることもできるでしょう。手足や体の部分について、またそれらが互いによく釣り合っていることについてです。それらは、用と美の両方のために、組み合わされ、また分けられています。突き出たものと、引っ込んだものがあります。一つにされたものと、分かれたものがあります。包むものと、包まれるものがあります。自然の法と理法によるのです。28:22:8 声と耳についても、多くのことを論じられるでしょう。声は発声の器官を通って運ばれ、耳はそれを受け取ります。どうしてそうなるのでしょうか。声と耳は、あいだにある空気が打たれ、刻まれることを通して、互いに交わるのです。28:22:9 視覚についても、多くのことを論じられるでしょう。視覚は、言い表しようもなく、見えるものと交わります。ただ意志するだけで、しかも意志と同時に動きます。知性と同じことを身に受けるのです。知性が知性で知られるものと交わるのと同じ速さで、視覚も見えるものと交わるからです。28:22:10 ほかの感覚についても、多くのことを論じられるでしょう。感覚は、外のものを受け入れる器のようなものですが、理性では見通せません。眠りのうちの休み、夢の中での像の作り直し、記憶と想起、思慮と気概と欲求についても、多くのことを論じられるでしょう。手短に言えば、この小さな宇宙、すなわち人を治めているすべてのものについてです。

28:23:1 ほかの生きものの違いを、あなたに数え上げてみましょうか。わたしたちとの違い、互いの違いです。その本性、生まれ方、育ち方、すみか、習性、いわば社会のありさまを数え上げてみましょうか。28:23:2 どうして、あるものは群れで暮らし、あるものはひとりで暮らすのでしょうか。あるものは草を食べ、あるものは肉を食べます。あるものは猛々しく、あるものはおとなしいのです。あるものは人に親しみ、人とともに育ちます。あるものは飼いならされず、自由です。28:23:3 あるものは、いわば理性と学ぶ力に近く、あるものは理性をまったくもたず、何も学ぶことができません。あるものは多くの感覚をもち、あるものは少ない感覚しかもちません。あるものは動かず、あるものは移り動きます。28:23:4 あるものはきわめて速く、あるものはきわめて鈍重です。あるものは大きさと美しさで、あるいはそのどちらかでまさっています。あるものはごく小さいか、ひどく醜いか、あるいはその両方です。あるものは強く、あるものは弱いの

です。28:23:5 あるものは迎え撃ち、あるものは疑い深く、隙をうかがいます。あるものは用心深く、あるものは無防備です。あるものはよく働き、やりくりが上手です。あるものはまったく怠惰で、先のことを考えません。28:23:6 さらにそれより前に、どうして、あるものは這い、あるものはまっすぐに立つのでしょうか。あるものはすみかを離れず、あるものは陸にも水にも住みます。あるものは美しく装うことを好み、あるものは身を飾ることに無頓着です。つがいになるものも、ならないものもいます。28:23:7 慎み深いものも、ふしだらなものもいます。子を多く産むものも、多くは産まないものもいます。長く生きるものも、短く生きるものもいます。一つ一つをたどっていけば、わたしたちの話は疲れてしまうでしょう。

28:24:1 泳ぐものも見てください。水の中をすべるように進み、いわば水の中を飛んでいます。自分たちの空気を吸い、わたしたちの空気の中では危うくなります。わたしたちが水の中でそうなるのと同じです。その習性と気性、交わりと子、大きさと美しさを見てください。すみかを離れないことと、さまようこと、集まることと離れていくことを見てください。地上の生きものとほとんど同じほど多くの特徴があります。中には、形にも名にも、共通の特徴や正反対の特徴をもつものもいます。28:24:2 鳥の群れも見てください。その形と色のさまざまなことを見てください。ほかの鳥にも、歌う鳥にもです。その旋律のわけは何でしょうか。それはだれから来たのでしょうか。28:24:3 だれがセミに、胸の上の竪琴の駒を与えたのでしょうか。枝の上での歌とさえずりを与えたのでしょうか。セミは、太陽に誘われて動き出すと、真昼の曲を奏でます。林を歌声で満たし、旅人を声で送っていきます。28:24:4 だれが白鳥に、歌を織り合わせて与えたのでしょうか。白鳥は、そよ風に翼を広げ、風を切る音を旋律にします。無理に出させる声のことは、言わずにおきます。人の技が真実に逆らってこしらえるもののこともです。28:24:5 クジャクは、見栄を張るメディアの鳥です。どこから、あれほど美しく装うことを好み、誉れを好むようになったのでしょうか。クジャクは自分の美しさを知っています。そこで、だれかが近づくのを見たとき、あるいは、人の言うところでは、雌のために装うときには、首をもたげます。金色に輝き、星をちりばめた羽を、丸く広げます。そして、もったいぶった足どりで、恋する者たちに美しさを見せびらかすのです。28:24:6 聖書は、女たちの機織りの知恵にさえ驚いて、こう言います。『だれが女たちに、機織りの知恵と刺しゅうの知識を与えたのか』（ヨブ三八・三六）[1]。それは理性ある生きもののわざです。知恵にすぐれ、天上のことにまで歩みを進める生きもののわざです。

28:25:1 けれども、あなたは、理性のないものの生まれつきの賢さにも驚きなさい。そして、そのわけを示しなさい。どうして鳥には、岩や木や屋根が巣となるのでしょうか。その巣は、安全と美しさの両方のために念入りに作られ、育てられるひなにもふさわしいのです。28:25:2 ミツバチとクモの働き好きと技の巧みさは、どこから来るのでしょうか。ミツバチは、互いに組み合う六角の管で、巣房を編み、まとめ上げます。あいだの仕切りの壁と、角と直線の組み合わせで、構えを固めます。しかもそれを、あれほど暗い巣箱の中で、目に見えない組み立てで行うのです。クモは、あれほど細く、ほとんど空気のような糸をさまざまに張り渡して、入り組んだ巣を織り上げます。しかも、目に見えない端から始めて、そうするのです。その巣は、立派な住まいであると同時に、自分より弱いものを捕らえて食べ物を楽しむための狩り場でもあります。28:25:3 どんなエウクレイデスが、これをまねることができたでしょうか。エウクレイデスは、実在しない線について論じ、証明に骨を折っています。どんなパラメデスの戦術が、ツルの動きと隊形をまねることができたでしょうか。ツルは、人の言うところでは、隊列を守って同じ教練の動きをし、しかもさまざまな飛び方をするのです。28:25:4 ペイディアスやゼウクシスやポリュグノトス、パラシオスやアグラオポンのような人々のだれが、まねることができたでしょうか。美しいものを並外れて巧みに描き、また彫ることを知っていた人々です。クノッソスでダイダロスが造った、調子の整った踊りが、まねることができたでしょうか。それは、乙女アリアドネのために、美を尽くそうと苦心して造られたものです。クレタの迷宮が、まねることができたでしょうか。詩人の言い方をすれば、抜け出しがたく、ほどきがたい迷宮です。技の工夫によって、幾度も自分自身に行き当たる迷宮です。28:25:5 アリの倉と倉番のことも、言わずにおきます。必要な時期に見合った食べ物の蓄えのことも、言わずにおきます。道や導き手のこと、働きの整った秩序のことなど、わたしたちが話に聞いて知っているほかのことも、言わずにおきます。

訳注

1 口語訳は『雲に知恵を置き、霧に悟りを与えたのはだれか』。

第28講話（26〜28章）植物と大地と海、そして空気

28:26:1 これらのことのわけがあなたに届き、その理解を得たのなら、植物の違いも見てください。葉に見られる技の巧みさにまで、目を向けてください。葉は、目にはこのうえなく快く、実にはこのうえなく役立つように作られています。28:26:2 実のさまざまなことと、その豊かさも見てください。とりわけ、もっとも欠かせないものの、このうえない美しさを見てください。根と汁と花と香りの力も見てください。それらは、このうえなく快いばかりでなく、健康にも役立ちます。色の美しさと、そのさまざまな趣も見てください。28:26:3 さらに、宝石の高価さと透き通った輝きも見てください。自然は、皆のための宴のように、あなたの前にすべてを並べてくれたのです。欠かせないものも、楽しむためのものも並べてくれました。それは、ほかに何もなくても、せめて、あなたが受ける恵みから神を知るためです。また、乏しさを覚えることで、これまでの自分より賢い者となるためです。28:26:4 次に、大地の広さと長さをめぐってください。大地は、すべてのものの共通の母です。海の入り江もめぐってください。入り江は、互いに、また陸と結ばれています。林の美しさ、川、豊かで尽きることのない泉もめぐってください。冷たい飲み水の泉や、地上に湧く泉ばかりではありません。地の下を流れる泉もあります。その泉は、地下の通り道をくぐって流れ、激しい風に押し出され、はね返されます。さらに、そのせめぎ合いとぶつかり合いの激しさに、燃えるほど熱せられます。そして、出口の許すところから、少しずつ噴き出します。こうして、地上の多くの場所で、わたしたちに温かい湯あみの恵みを与えてくれます。しかも、病に逆らう力によって、代価のいらない、ひとりでに得られる癒やしをもたらしてくれるのです。28:26:5 これらがどのようにして、どこから来たのか、言ってみなさい。この大きな、技によらない織物は何なのでしょうか。これらは、一つ一つ見ても称えるに値しますが、互いの結びつきの点でも、それに劣らず称えるに値するのです。28:26:6 大地は、どうして固く、傾くことなく立っているのでしょうか。何の上に乗っているのでしょうか。下から支えているものは何でしょうか。そして、それを支えているものは、また何でしょうか。理性にも、神のみこころのほかには、大地のよりどころが見つからないのです。28:26:7 また、大地は、あるところでは山の頂にまでせり上がり、あるところでは平地に腰を据えています。それも、さまざまな形で、変化に富んでいます。少しずつ移り変わって、姿を変えていきます。どうして、それによって用にはいっそう豊かになり、変化に富むぶん、いっそう美しくなっているのでしょうか。28:26:8 また、ある部分は住まいとして割り当てられ、ある部分は人が住めません。山のあまりの高さが、自分のものとして切り取っているところです。ある部分はほかから分かれて、それぞれ別の果てに至ります。こうした大地が、どうして神の大いなるわざの、もっとも明らかなしるしとなっているのでしょうか。

28:27:1 海については、もしその大きさに驚くことがなかったなら、わたしはその穏やかさに驚いたでしょう。海がゆったりと横たわったまま、自分の境の内にとどまっていることに驚いたでしょう。また、もし穏やかさに驚くことがなかったなら、きっと、その大きさに驚いたでしょう。28:27:2 けれども、その両方があるのですから、両方のうちにある力を称えることにします。何が海を集めたのでしょうか。何が海を縛ったのでしょうか。海は、どうして盛り上がりながら、とどまっているのでしょうか。まるで隣の陸をはばかっているかのようです。どうして、すべての川を受け入れながら、同じままでいるのでしょうか。量があまりに多いためでしょうか。そうでなければ、ほかに何と言えばよいのか、わたしには分かりません。28:27:3 これほど大きな元素である海にとって、どうして砂が境となるのでしょうか。自然学者たち、むなしいことに賢い人々は、何か言えるでしょうか。彼らは、まことに柄杓で海を量るように、自分の考えで、これほど大きなことを量っているのです。28:27:4 それとも、わたしは聖書から、手短にこのことを論じましょうか。長い議論よりも説得力があり、より真実に論じましょう

か。『水のおもてに命令を巡らされた』（ヨブ二六・一〇）[1]。この命令こそが、水というものの絆なのです。28:27:5 また、海は、陸に住む船乗りである人を、小さな木切れと風とで、どうして運ぶのでしょうか。あなたは、これを見て驚かないのでしょうか。あなたの思いは我を忘れないのでしょうか。海が人を運ぶのは、陸と海とが、必要と行き来によって結ばれるためです。本性においてこれほど互いに隔たったものが、人のために一つになるためです。28:27:6 泉の、そのいちばん初めの泉は何でしょうか。人よ、尋ね求めなさい。これらのことのどれかを、たどり出し、見つけ出すことができるのならです。また、川のために平地も山も切り開き、その流れを妨げのないものにしたのは、だれでしょうか。28:27:7 また、どうして相反することから驚きが生まれるのでしょうか。海はあふれ出ることがなく、川も止まることがないのです。水の養いとは何でしょうか。その違いは何でしょうか。ある水は上から潤され、ある水は根から飲むのです。神のくださるぜいたくを説き明かすのですから、わたしも少しは、言葉のぜいたくをさせてもらいましょう。

28:28:1 さあ、大地と大地のまわりのものをあとにして、思いの翼で、空気のほうへ身を軽く舞い上がらせなさい。それは、話があなたのために順を追って進むためです。そこから、わたしはあなたを天のものへと連れて上りましょう。天そのものへ、天を超えるものへと連れて上りましょう。28:28:2 話は、この先へ近づくのをためらいます。それでも、許されるところまでは近づくでしょう。空気を注ぎ出したのはだれでしょうか。この大きく、惜しみない富を注ぎ出したのはだれでしょうか。空気は、功績によっても運によっても量られません。境によって抑えられることもなく、年齢によって分けられることもありません。マナの分配のように、だれもが足りるだけ取り込み、だれの分け前も等しい値打ちをもちます。空気は、飛ぶものの乗り物、風の座、季節のほどよさ、生きものに魂を与えるものです。いや、むしろ、魂を体につなぎとめておくものです。体はその中にあり、言葉はそれによって語られます。光と照らされるものも、その中にあります。視覚も、それを通って流れていきます。28:28:3 その先のことも見てください。わたしは、空気のしわざと思われているもののすべての支配を、空気に与えることには同意しないからです。風の蔵とは何でしょうか。28:28:4 雪の倉とは何でしょうか。書いてあるとおり、『露の玉はだれが生んだか』（ヨブ三八・二八）。『氷はだれの胎から出たか』（ヨブ三八・二九）。『水を濃い雲の中に包まれる』（ヨブ二六・八）かたは、だれでしょうか。そのかたは、水の一部を雲の上にとどめておられます。ああ、なんという驚きでしょう。流れる本性が、理法によって抑えられているのです。また、ほかの一部を全地のおもてに注ぎ、時にかなって、分け隔てなく蒔いておられます。水のすべてを、とどめもなく自由に放つことはなさいません。ノアのときの洗い清めで、もう十分だからです。決して偽ることのないかたは、ご自分の契約をお忘れになりません。また、水をすっかり差し止めてしまうこともなさいません。わたしたちが、またエリヤのような人を必要として、日照りを解いてもらうことにならないためです。28:28:5 聖書はこう言います。「神が天をお閉ざしになるなら、だれが開けようか。天の窓をお開きになるなら、だれがとどめられようか」（ヨブ一二・一四）。雨を降らせるかたは、ご自分の量りと重りで万物をお治めになります。そうでなければ、雨が多すぎても少なすぎても、だれがそれに耐えられるでしょうか。28:28:6 あなたは、稲妻と雷について、わたしに何を論じるのでしょうか。地上から雷を鳴らすあなたよ。真理の小さな火花にさえ照らされていないあなたよ。地から立つどんな蒸気を、雲を造るものとして、原因に挙げるのでしょうか。それとも、空気が何かの形で濃くなることでしょうか。それとも、あのごく薄い雲が押しつぶされることや、ぶつかって裂けることでしょうか。押しつぶされることが稲妻を、裂けることが雷を生み出すとでもいうのでしょうか。28:28:7 どんな風が、狭いところに押し込められ、出口をもたないというのでしょうか。押しつぶされて稲妻を光らせ、裂けて雷を鳴らすというのでしょうか。空気と空気のまわりのものを思い巡らしてたどり終えたのなら、さあ、わたしとともに天と天のものにも触れてみなさい。28:28:8 ただし、これからは理性よりも信仰に、わたしたちを導かせましょう。あなたが、もっと近いものについてさえ理性の弱さを学び、理性を超えるものを知ることこそ理性だと知ったのならです。それは、あなたがまったく地上の者、地にしがみつく者となって、自分の無知そのものさえ知らずにいることのないためです。

訳注

1 口語訳は『水のおもてに円を描いて』で、命令の語がない。

第28講話（29〜31章）　天と星、そして天使たち

28:29:1 天を巡らせたのはだれでしょうか。星を並べたのはだれでしょうか。いや、それより先に、天と星とは何なのか、あなたは言えるでしょうか。宙に浮いたあなたよ。足もとのことも知らず、自分自身さえ量ることができないあなたよ。それでいて、自分の本性を超えることを詮索し、量りがたいものにぽかんと口を開けているあなたよ。28:29:2 仮に、あなたが回転や周期をとらえているとしましょう。星どうしが近づくことと離れること、星の出と昇り、いわゆる度や分もとらえているとしましょう。あなたがこの驚くべき学問を誇る、そのほかのすべてのこともです。それでも、これはまだ、存在するものをとらえることではありません。ある動きを観測することにすぎません。その観測が、たび重なる訓練で確かめられ、多くの人の観測したことを一つにまとめます。そのうえで理屈を考え出したとき、学問と呼ばれるのです。ちょうど、月の満ち欠けが多くの人に知られるようになったのと同じです。その知識は、目で見ることに始まりました。28:29:3 あなたがこれらのことにひどく通じていて、人から感心されて当然だと思うのなら、言ってみなさい。この秩序と動きの原因は何でしょうか。太陽が、まるで合唱隊を率いる者のように、全世界とすべての目にのろしを掲げるのは、どこから来るのでしょうか。太陽は、その輝きでほかの星々を隠します。ほかの星のいくつかが別の星を隠すよりも、ずっと強く隠すのです。28:29:4 その証拠に、星々は太陽に向かって輝きますが、太陽はそれをしのいで輝きます。星々が太陽とともに昇っていることさえ、気づかせないのです。太陽は花婿のように美しく、勇士のように速く、大いなるものです（詩篇一九・五）。太陽をたたえるのに、わたしは、自分の側のもの、つまり聖書の言葉のほかは、使う気になれないのです。太陽の力はたいへん大きく、天の一方の果てから他方の果てまで、その熱で届きます。太陽を感じずにすむものは、何もありません。すべての目は光で満たされ、すべての体は熱で満たされます。太陽は温めはしますが、焼きはしません。ほどよい穏やかさと、動きの秩序によるのです。太陽は、すべてのもののそばにいて、すべてを等しく包んでいるのです。

28:30:1 あなたが気づいているなら、次のことは、どれほど大きなことでしょうか。信仰の外のある人が、こう言いました。「感覚で知られるもののうちの太陽は、知性で知られるもののうちの神にあたる」。太陽は、神が知性をお照らしになるように、目を照らすからです。また、太陽は見られるもののうちで、もっとも美しいものだからです。神が、知性で知られるもののうちで、もっとも美しいかたであるようにです。28:30:2 しかし、初めに太陽を動かしたものは何でしょうか。いつも太陽を動かし、巡らせているものは何でしょうか。太陽は巡らされていながら、理法によって定まっていて、動かされることがありません。そして、まことに疲れを知らず、いのちの糧をもたらし、いのちを生みます。そのほか、詩人たちがもっともなことに歌ってきたとおりのものです。そして、自分の運行も恵みも、決して止めることがないのです。28:30:3 地の上では昼を造り、地の下では夜を造るのは、どうしてでしょうか。いや、太陽を見つめると、何と言えばよいのか、わたしには分かりません。昼と夜が互いに増し、また減るのは、何によるのでしょうか。あえて逆説めいたことを言えば、等しくないことのうちにある等しさは、何によるのでしょうか。28:30:4 また、太陽が季節の造り手であり、分け手であるのは、どうしてでしょうか。季節は、秩序正しくやって来ては去っていきます。そして、合唱隊が舞うように、互いに組み合い、また離れます。組み合うのは友愛の法により、離れるのは秩序の法によります。季節は少しずつ混ざり合います。そして隣り合うことで、昼と夜がするのと同じように、気づかれずに互いのものをくすね取ります。慣れない変わり目で、わたしたちを悩ませないためです。28:30:5 けれども、太陽のことは、これくらいにしておきましょう。あなたは、月の本性を知ったのでしょうか。その満ち欠けも、光の量も、道筋も知ったのでしょうか。どうして太陽が昼をつかさどり、月が夜の座に着くのかを

知ったのでしょうか。どうして月が獣に自由を与え、太陽が人を起こして仕事に就かせるのかを知ったのでしょうか。どうして太陽が、高く昇ったり低く昇ったりして、いちばん役に立つようにしているのかを知ったのでしょうか。28:30:6 あなたは、プレアデスの絆やオリオンの囲いを悟ったのでしょうか[1]。星それぞれの栄光の違いと、運行の秩序を悟ったのでしょうか。『もろもろの星の数を定め、すべてそれに名を与えられる』（詩篇一四七・四）かたのようにです。そうであれば、わたしもあなたを信じましょう。星によってわたしたちの身の上を織りなし、被造物に武器を取らせて創造主に逆らわせるあなたを、です。

28:31:1 あなたはどう言うのでしょうか。わたしたちは、物質と見えるもののところで、話を止めるのでしょうか。それとも、こうしましょうか。モーセの幕屋が全宇宙の写しであることを、理性は知っています。全宇宙とは、見えるものと見えないものとからなる組み立てのことです。ですから、最初の幕を開き、感覚を越えて、聖所を、つまり知性で知られる天の本性を、のぞき込みましょうか。28:31:2 この本性さえ、わたしたちは体の姿を借りずに見ることはできません。たとえ、それが体をもたないとしてもです。それは火とも霊とも呼ばれ、あるいはそうなるのです。神は『御使たちを霊とし、ご自分に仕える者たちを炎とされる』と書いてあるからです（ヘブル一・七）[2]。もっとも、ここで言う「とする」が、造られたときの理法のとおりに保つことであるなら、話は別です。28:31:3 この本性は、霊とも火とも呼ばれます。霊と呼ばれるのは、知性で知られる本性だからです。火と呼ばれるのは、清めるものだからです。最初の本質にも、同じ呼び名があることを、わたしは知っているからです。いずれにせよ、わたしたちにとっては、この本性は体をもたないものとしておきましょう。あるいは、できるかぎりそれに近いものとしておきましょう。28:31:4 あなたにも見えるでしょうか。わたしたちは、この話をめぐって目がくらみ、どこへ進めばよいのか分からずにいます。せいぜい、次のことを知るところまでしか進めません。わたしたちに知りうるのは、天使たちと大天使たちがいるということくらいです。位、主権、支配、権威、輝き、上り、知性ある力、あるいは知性たちがいることも知っています。それらが清く混じりけのない本性であることも知っています。悪いほうへは動かない、あるいは動きにくい本性です。そして、第一の原因のまわりで、いつも舞っています。いや、これらを、どのようにたたえればよいでしょうか。これらは、そこから、このうえなく清い照らしを受けて輝いています。あるいは、本性と位の段階に応じて、それぞれ別の照らしを受けているのです。美しいものによって、それほどまでに形づくられ、かたどられているので、自分もまた光となります。そして、最初の光から流れ出し、分け与えられるものによって、ほかの者たちを照らすことができるのです。これらは、神のみこころに仕える者たちです。生まれつきの力と、後から身につけた力とによって強い者たちです。すべてのところをめぐり、どこででも、すべての者のそばに、すぐに来ます。仕えることへの熱心さと、本性の軽さによるのです。あるものは人の住む地のある部分を受けもち、あるものは万物のうちのほかの何かを任されています。それらをお定めになり、お分けになったかたが、ご存じのとおりです。これらは、すべてを一つにまとめます。万物をお造りになったかたの、ただ一つのうなずきに向けてまとめるのです。これらは、神の偉大さを歌いたたえる者、永遠の栄光を永遠に観想する者です。そうするのは、神が栄光をお受けになるためではありません。満ち足りておられるかたに、加えられるものは何もないからです。そのかたは、ほかのものにも、善いものを惜しみなく与えておられます。これらがそうするのは、神に次ぐ最初の本性にも、恵みを受けることが欠けないためです。28:31:5 これらのことが、ふさわしくたたえられたのなら、それは三位一体の恵みです。三つのうちにある一つの神性の恵みです。望んだほどには足りていなくても、話はそれでも目的を果たしています。28:31:6 話が示そうと努めてきたのは、このことだったからです。第二の本性でさえ、知性を超えています。まして、最初の、ただ一つの本性は、言うまでもありません。「ただ一つの」と言うのは、「すべてのものの上にある」とは言いかねるからです。

訳注

1 ギリシア語訳のヨブ三八・三一。口語訳は『プレアデスの鎖を結ぶ』。

2 口語訳は『風とし』。原語は風とも霊とも訳せる。

第29講話（1〜5章）御子について

29:1:1 さて、この人たちの言葉の手軽さと速さを抑えるために言えることは、以上のとおりです。速さの危うさについても、同じです。速さはどんなことにおいても危ういものですが、神についての言葉においては、とりわけそうです。29:1:2 しかし、非難することは、大したことではありません。それはいともたやすく、望む者ならだれにでもできるからです。それに代えて自分の考えを立てることこそ、敬虔で分別のある人のすることです。さあ、聖霊に信頼しましょう。この人たちが侮り、わたしたちが礼拝している聖霊です。神性についてのわたしたちの考えを、それがどのようなものであれ、光のもとに産み出しましょう。生まれのよい、月の満ちた子供を産むようにです。わたしたちは、これまでも黙っていたわけではありません。この点でだけは、わたしたちは若者のように血気盛んで、気が大きいのです。しかし、いまは、なおいっそう大胆に真理を語りましょう。書いてあるとおり、尻込みしたために、喜ばれないという裁きを受けることのないためです（ヘブル一〇・三八〜三九）。29:1:3 言葉には、どれも二つの種類があります。一つは自分の説を打ち立てる言葉、もう一つは相手の説を覆す言葉です。わたしたちも、まず自分の説を述べ、それから相手の説を覆すことを試みます。どちらも、できるかぎり手短にします。言うことが一目で見渡せるためです。この人たちが、素朴な人々や人のよい人々を欺くために考え出した、入門の書のようにです。また、話が長くなって、考えが散ってしまわないためです。管に押し込められずに、平らな野に流れ広がって消えてしまう水のようにです。

29:2:1 神についての最も古い考えは、三つあります。支配者のないこと、多くの者の支配、ひとりの支配です。初めの二つは、ギリシアの子らのもてあそびものになりました。もてあそばせておけばよいのです。というのは、支配者のないものには秩序がないからです。多くの者が支配するものには争いが絶えず、そのために支配者のないものとなり、秩序のないものとなるからです。29:2:2 二つとも、同じところ、つまり無秩序に行き着きます。無秩序は、崩壊の下稽古だからです。わたしたちが敬うのは、ひとりの支配です。ただし、ひとりの支配といっても、一つのペルソナに限られる支配ではありません。一つのものでも、自分自身と争って、多くのものになることがあるからです。そうではなく、次のものが成り立たせる、ひとりの支配です。本性の誉れが等しいこと、思いが一つであること、動きが同じであることです。また、一なるものから出たものが、一なるものへと向かい集まることです。その結果、数では違っていても、本質においては分かたれないのです。こうしたことは、生じた本性にはありえません。29:2:3 そのため、一は初めから二へと動き、三で止まりました。これが、わたしたちにとっては、父と子と聖霊です。父は生む者であり、送り出す者です。ただし、苦しみを受けることなく、時を超え、体によらずに、と言うのです。あとのかたがたは、一方は生まれたもの、他方は送り出されたものです。あるいは、見えるものをすっかり取り去るなら、これらをどう呼べばよいのか、わたしには分かりません。29:2:4 わたしたちは、善があふれ出たのだ、と言う勇気はもちません。ギリシアで論じた者のひとりは、あえてそう言いました。混酒器があふれ出たようなものだ、と。第一の原因と第二の原因について論じるところで、はっきりそう言っているのです。そう言えば、出生を、意に反したものとして持ち込むことになりかねません。本性のままに出てくる、抑えきれない余りもののようなものとしてです。それは、神性についての考えには、少しもふさわしくありません。29:2:5 そのため、わたしたちは、わたしたちの境の内にとどまります。そして、生まれることのないものと、生まれたものと、父から発出するものとを立てます。神であり、ことばなるかたご自身が、どこかでおっしゃるとおりです（ヨハネ一五・二六）。

29:3:1 「では、それらはいつからあるのか」。このかたがたは、『いつ』を超えておられます。少し血気盛んに言わせてもらうなら、父がおられたときからです。「では、父はいつからおられるのか」。父がおられなかったときは、ありません

でした。29:3:2 ですから、子も聖霊も同じです。さあ、もう一度わたしに問いなさい。わたしはもう一度あなたに答えます。「子は、いつ生まれたのか」。父がお生まれにならなかった、そのときです。29:3:3 「では、聖霊はいつ発出したのか」。子が発出なさったのではなく、お生まれになった、そのときです。時を超え、言葉を超えてお生まれになったのです。時を超えるものを、わたしたちは示すことができません。時を思わせる響きを避けたいと思っても、です。『とき』も、『これより前』も、『その後』も、『初めから』も、時を離れた言葉ではありません。どれほど無理をしても、です。ただし、永遠のものに沿って延びる隔たりを、『とこしえ』と受け取るなら、話は別です。とこしえは、何かの動きや太陽の運行によって分けられたり、測られたりしません。時は、そうされるものです。29:3:4 「それなら、ともに永遠でありながら、どうしてともに始まりのないものではないのか」。父より後ではないにしても、あちら、つまり父から出ておられるからです。始まりのないものは、永遠でもあります。しかし、永遠のものが、必ずしも始まりのないものとはかぎりません。父を始まりとし、そこにさかのぼるかぎりは、始まりのないものではないのです。29:3:5 ですから、原因の点では、始まりのないものではありません。とはいえ、原因が、それの原因となっているものより必ずしも古いわけではないことは、明らかです。太陽も、光より古くはないのです。そして、時の点では、ある意味で始まりのないものです。あなたが素朴な人々を、お化けで脅かしても、です。時がそこから出たものは、時の下にはないからです。

29:4:1 「では、どうして出生が苦しみを伴わないのか」。体によらない出生だからです。体による出生が苦しみを伴うなら、体によらない出生は、苦しみを伴いません。わたしのほうからも、あなたに問い返しましょう。造られたものなら、どうして神なのでしょうか。造られるものは、神ではありません。造ることにも苦しみがあることは、言わないでおきます。体のこととして受け取るなら、という話ですが。たとえば、時、欲求、心に形を描くこと、思い煩い、望み、悲しみ、危うさ、しくじり、手直しです。これらはみな、いえ、これより多くのものが、造ることにはつきまといます。だれの目にも明らかなとおりです。29:4:2 わたしは、あなたがこんなことまで言い出さないのが、不思議です。何かの交わりや、身ごもる期間や、流産の危うさを思い描くことです。父がそのようにお生みになったのでなければ、生むことはまったくできない、とでもいうようにです。あるいはまた、鳥や陸の生きもの、水の生きものの生まれ方を数え上げることです。そして、神の言い尽くせない出生を、そのどれかに当てはめることです。さもなければ、その新しい仮説によって、子を消し去ってしまうことです。29:4:3 あなたは、次のことさえ見て取れないのです。肉による出生がほかと違うかたは、霊的な出生もまた、ほかと違っているのです。あなたの知っているもののうちに、神の母となったおとめが、どこにいたでしょうか。いや、むしろ、存在することが同じでないものどうしは、生むことも違うのです。

29:5:1 「では、父であることを始めなかった父とは、何者なのか」。存在することさえお始めにならなかったかたです。存在することを始めた者には、父であることにも始まりがあります。ですから、父は後から父になったのではありません。お始めにならなかったからです。また、父は本来の意味で父です。同時に子でもあるのではないからです。子もまた、本来の意味で子であるように、です。同時に父でもあるのではないからです。29:5:2 わたしたちの場合は、本来の意味ではありません。わたしたちは、父でもあり子でもある、その両方だからです。一方であるより他方である、ということもありません。また、わたしたちは一人からではなく、二人から生まれます。そのため、二人のあいだに分かたれています。また、少しずつ人になります。ことによると、人にさえなりません。親の望んだとおりの者にもなりません。そして、相手を置いて去り、また置いて去られもします。その結果、関係だけが、中身を失ったみなしごのように残るのです。29:5:3 「しかし、『生んだ』とか『生まれた』とかいう言葉は、出生の始まりを持ち込むものにほかならないではないか」。では、それさえ言わずに、『初めから生まれていた』と言ったら、どうでしょうか。時にこだわる、あなたのいらぬ異議を、たやすく逃れるためです。29:5:4 あなたは、わたしたちを訴えるでしょうか。わたしたちが聖書と真理に、偽りの刻印を押している、と言って。それとも、次のことは、だれの目にも明らかではないでしょうか。時について言われることの多くは、時の形を入れ替えて語られています。聖書の言い慣わしでは、とくにそうです。過去の形で言うものや、現在の形で言うものだけではありませ

ん。未来の形で言うものも、そうなのです。29:5:5 たとえば、『なにゆえ、もろもろの国びとは騒ぎたったのか』という言葉です（詩篇二・一）。まだ騒ぎたってはいなかったのです。また、『人々は徒歩で川を渡るであろう』という言葉です（詩篇六六・六）[1]。これは、渡った、ということです。このような言い方をすべて数え上げれば、長くなるでしょう。労をいとわない人々が、それらを見つけて書き留めてきました。

訳注

1 口語訳は『渡った』と過去形。ギリシア語訳は未来形。

第29講話（6〜9章） 意志と出生をめぐる難問

29:6:1 この点については、以上のとおりです。次の言い分も、いかにも彼らのものです。なんと争い好きで、恥知らずなことでしょう。彼らは言います。「父は意志して子をお生みになったのか、それとも意志せずにお生みになったのか」。そして、彼らの思うところでは、両側から結び目でわたしたちを縛ります。しかし、その結び目は強くはなく、ひどくもろいものです。29:6:2 彼らは言います。「意志せずにお生みになったのなら、父は力ずくで従わされたことになる。では、従わせたのはだれか。力ずくで従わされた者が、どうして神なのか。意志してお生みになったのなら、子は意志の子だ。それなら、どうして父から出たと言えるのか」。29:6:3 こうして彼らは、父の代わりに、意志という新しい母を作り上げるのです。もっとも、彼らがこう言うのなら、まず一つ、気の利いたところがあります。苦しみを受けることから離れて、意志に逃げ込んでいることです。意志は、苦しみを受けることではないからです。29:6:4 次に、彼らが強みとしている言い分を見ましょう。ただ、その前に、もっと間近で彼らと組み合うのがよいでしょう。何でも意のままに軽々しく口にするあなた自身は、どうでしょうか。あなたは、意志するあなたの父から存在するようになったのですか。それとも、意志しない父からですか。29:6:5 意志しない父からなら、あなたの父は力ずくで従わされたのです。なんという無理強いでしょう。では、だれがその父を従わせたのでしょうか。まさか本性だとは言わないでしょう。本性は、自分を抑えることも許すからです。29:6:6 意志する父からなら、わずかな音節のために、あなたは父を失いました。あなたは、父の子ではなく、意志の子だと分かったのですから。しかし、わたしは神と造られたものに話を移します。そして、あなたの問いを、あなたの知恵に突きつけます。29:6:7 神は、意志してすべてのものに存在をお与えになったのでしょうか。それとも、強いられてでしょうか。強いられてなら、ここでも力ずくの支配があり、力ずくで従わせた者がいます。意志してなら、造られたものも神を奪われています。だれよりも先に、あなたがそうです。このような理屈を見つけ出し、このような小賢しいことを論じるあなたが、です。29:6:8 間に立つ意志が壁となって、造り主から隔てられているからです。しかし、わたしの思うに、意志する者と意志とは別のものです。生む者と出生、語る者と言葉も、別のものです。わたしたちが酔っているのでなければ、ですが。前の三つは動く者であり、後の三つはいわばその動きです。29:6:9 ですから、意志されたものは、意志から出たのではありません。意志されたからといって、意志から出たことには、必ずしもならないからです。生まれたものも出生から出たのではなく、聞かれたものも声に出すことから出たのではありません。それらは、意志する者から、生んだ者から、語る者から出たのです。29:6:10 神のことは、これらすべてを超えています。神にとっては、おそらく、生もうとする意志がそのまま出生なのです。その間に立つものは何もありません。もっとも、それは、そもそもこのことを受け入れるとしての話です。出生は意志よりもさらにまさっている、と考えるのでなければ、です。

29:7:1 父についても、少し戯れてみましょうか。こうしたことをあえてする大胆さを、わたしはあなたから学んだのですから。父は、意志して神であられるのでしょうか、それとも意志せずにでしょうか。あなた自身の両刃の剣を、うまく逃れてごらんなさい。意志して神であられるのなら、いつ意志することをお始めになったのでしょうか。29:7:2 神であられる前ではありません。父が、それより前に何かであられたことはないからです。それとも、父のうちの一部が意志し、別の一部がその意志の対象となったのでしょうか。それなら、父は分けられるものです。また、あなたによれば、どうしてこのかたも意志の産物でないことがあるでしょうか。29:7:3 意志せずに神であられるのなら、何が、神であるように強いたのでしょうか。強いられたのなら、どうして神なのでしょうか。しかも、ほかでもない、神であることそのものへと強いられたのです。29:7:4 「では、子はどのように生まれたのか」。子はどのように造られたのでしょうか。あなたによれ

ば、子は造られたのですから。これも、同じ難しさを抱えているのです。あなたは、こう言うかもしれません。「意志と言葉によってだ」。しかし、それでは、まだすべてを言ってはいません。29:7:5 意志と言葉が、どのようにしてわざを成し遂げる力を得たのでしょうか。それを言うことが、まだ残っています。人は、意志し語るだけで物を造りはしないからです。

29:8:1 では、子はどのようにお生まれになったのでしょうか。その出生があなたにとらえられるものなら、それは大きなものではなかったでしょう。あなたは、自分の出生さえ知りません。とらえていても、ほんのわずかで、口にするのも恥ずかしいほどです。それなのに、すべてを知っていると思うのですか。29:8:2 次のことを見つけ出すまでには、あなたはさんざん苦労するでしょう。体が固まり、形づくられ、外に現れる法則です。魂が体と、知性が魂と、理性が知性と結ばれていることです。動くこと、育つこと、食べたものを自分のものにすること、感じること、記憶、想起です。そのほか、あなたを成り立たせているものです。また、そのうちのどれが魂と体の両方を合わせたものに属し、どれが別々に振り分けられ、どれが互いから受け取るものなのかです。後になって完成に至るものも、その法則は出生とともにあるからです。29:8:3 それがどんな法則なのか、言ってみなさい。そして、そのときでさえ、神の出生について論じてはいけません。それは危ういからです。あなたが自分の出生を知っていても、神の出生まで知っているとはかぎりません。自分の出生さえ知らないのなら、どうして神の出生を知っているでしょうか。29:8:4 神が人よりも推し量りがたいのと同じだけ、上なる出生は、あなたの出生よりもとらえがたいのです。あなたにとらえられないから、そのために生まれてもいない、と言うのでしょうか。それなら、存在するもののうち、あなたがとらえていない多くのものを、名簿から消す時です。何よりもまず、神ご自身をです。神が何であられるのかも、あなたは言えないのですから。たとえ、あなたがひどく大胆で、度を越して気が大きくても、です。29:8:5 流れ出ることや、分けることや、切り刻むことの考えを捨てなさい。体をもたない本性について、体について考えるように考えることを捨てなさい。そうすれば、神の出生について、何かふさわしいことを考えられるかもしれません。29:8:6 どのようにお生まれになったのでしょうか。わたしは、うんざりしながら、もう一度同じことを口にします。神の出生は、沈黙をもって敬うべきものです。お生まれになったことを学ぶだけでも、あなたには大きなことです。どのようにかを思い描くことは、天使たちにさえ、わたしたちは許しません。ましてあなたには、なおさら許しはしません。29:8:7 その『どのように』を示してほしいのですか。お生みになった父と、お生まれになった子が知っておられるとおりです。それを超えることは雲に隠れていて、あなたのかすんだ目を逃れるのです。

29:9:1 「では、父は、存在していた子をお生みになったのか。それとも、存在していなかった子をお生みになったのか」。なんというたわごとでしょう。そういうことは、わたしやあなたについて言えることです。わたしたちは、ある意味では、すでに存在していました。レビがアブラハムの腰の中にいたようにです。また、ある意味では、生じたのです。ですから、わたしたちのことは、ある意味で、存在していたものからでもあり、存在していなかったものからでもあります。最初の物質は、それとは反対です。それは明らかに、存在していなかったものから存在するようになったのです。ある人々が、それを生じたのでないものとして作り上げるとしても、です。29:9:2 しかし、ここでは、生まれたことと存在することとが、ともに走っています。しかも初めからです。それなら、この両側が崖になった問いを、あなたはどこに置くのでしょうか。『初めから』より古いものが、何かあるでしょうか。そこに、子がかつて存在したこと、あるいは存在しなかったことを置けるような何かが。29:9:3 どちらを答えても、『初めから』は崩れるからです。ただし、次のことを認めるのなら、話は別です。わたしたちがもう一度、父についても、存在していたものからか、存在していなかったものからか、と問うとします。すると、あなたにとっては、父も二度存在することになりかねません。一度は先におられたかたとして、一度はいまおられるかたとして、です。あるいは、子と同じ目にあって、存在していなかったものから存在することになりかねません。あなたの問いの戯れと、砂で建てたもののためにです。そよ風にさえ立っていられないものです。29:9:4 わたしとしては、どちらも受け入れません。そして、おかしいのは問いの方であって、答えに窮しているのではない、と言います。あなたは、理屈屋としての自分の前提に従って、どんな

ことでもどちらか一方は必ず真だ、と思うかもしれません。それなら、わたしの小さな問いを一つ受けてみなさい。29:9:5 時は時の中にあるのでしょうか、それとも時の中にないのでしょうか。時の中にあるのなら、どの時の中にでしょうか。その時は、中にある時とは別の何なのでしょうか。また、どのようにそれを含むのでしょうか。時の中にないのなら、時のない時を持ち込むとは、なんという度を越した知恵でしょう。29:9:6『いま、わたしはうそをついている』という言葉は、真であるだけか、偽であるだけか、どちらか一方を認めなさい。両方だとは、わたしたちは認めませんから。「しかし、それはありえない。うそをついているなら真を語ることになり、真を語っているならうそをつくことになるからだ。どうしてもそうなる」。29:9:7 ここで反対のものがともに成り立つように、あの問いでは両方とも偽となるとしても、何の不思議があるでしょうか。こうして、あなたの知恵は愚かさだと明らかになるでしょう。謎をもう一つ、わたしのために解きなさい。あなたは、自分が生まれるとき、自分のところに居合わせたのですか。29:9:8 いまは、居合わせているのですか。それとも、どちらでもないのですか。居合わせたのであり、いまも居合わせているのなら、だれとして、だれのところにでしょうか。一人であるはずのあなたが、どうして二人になったのでしょうか。いま言ったどちらでもないのなら、どうしてあなたは自分から離れているのでしょうか。29:9:9 その離れていることの原因は何でしょうか。「しかし、一人の者について、自分のところに居合わせているかどうかを詮索するのは、愚かなことだ。そういうことは、ほかの者について言うのであって、自分について言うのではない」。よく知っておきなさい。初めからお生まれになっていたかたについて、出生より前に存在していたかどうかを問いただすのは、もっと愚かなことです。そういう議論は、時によって分けられるものについてのものだからです。

第29講話（10〜13章） 生まれないことは神の本質か

29:10:1 「しかし、生まれることのないものと生まれたものは、同じではない。そうなら、子も父と同じではない」と彼らは言います。この議論が、子を、あるいは父を、神性からはっきりと締め出していることは、言うまでもないでしょう。29:10:2 生まれることのないことが神の本質なら、生まれたものは本質ではありません。逆に、生まれたものが本質なら、生まれることのないことは本質ではありません。どんな議論がこれに言い返せるでしょうか。それなら、二つの不敬虔のうち、好きな方を選びなさい。むなしい神学者よ。どうしても不敬虔でいたいと思っているのなら、です。29:10:3 次に、どうして生まれることのないものと生まれたものが同じではない、などと言うのですか。造られなかったものと造られたもののことなら、わたしも受け入れます。始まりのないものと造られるものとは、本性において同じではないからです。29:10:4 しかし、生んだものと生まれたもののことなら、同じではないと言うのは正しくありません。両者は、どうしても同じでなければならないからです。生まれたものの本性とは、生んだものと本性において同じであることなのです。29:10:5 あるいは、こう問い直しましょう。あなたは、どういう意味で、生まれることのないものと生まれたものと言うのですか。生まれないことそのものと、出生そのもののことなら、同じではありません。しかし、それらが属しているもののことなら、どうして同じでないことがあるでしょうか。29:10:6 知恵のないことと知恵のあることも、互いには同じではありません。しかし、同じもの、つまり人に属することです。その違いは、本質を分けるのではなく、同じ本質のまわりで分かれるのです。29:10:7 さもなければ、不死であることも、悪のないことも、変わらないことも、神の本質だということになります。しかし、そうなら、神の本質は多くあり、一つではありません。あるいは、神はそれらから組み立てられていることになります。それらが本質であるなら、組み立てなしにそこにあるはずはないからです。

29:11:1 彼らは言います。「それらは本質ではない。ほかのものにも共通しているからだ。神だけのもの、神に固有のもの、それが本質だ」。しかし、物質とイデアをも、生まれることのないものとして持ち込む人々がいます。その人々なら、生まれることのないことが神だけのものだとは認めないでしょう。29:11:2 マニ教徒の闇は、もっと遠くへ投げ捨てておきましょう。それはともかく、生まれることのないことは神だけのものだとしましょう。では、アダムはどうでしょうか。アダムだけが、神に形づくられたものではありませんか。「まったくそのとおりだ」と、あなたは言うでしょう。では、アダムだけが人なのでしょうか。29:11:3 「決してそうではない」。それはなぜでしょうか。形づくられることが、人であることではないからです。生まれたものも人なのです。同じように、生まれることのないものだけが神なのでもありません。たとえ、生まれることのないことが父だけのものであっても、です。生まれたものも神であると受け入れなさい。29:11:4 神から出ているのですから。たとえ、あなたがどれほど『生まれることのない』という語を好んでいても、です。次に、どうしてあなたは、あるものを立てることではなく、ないものを取り去ることを、神の本質だと言うのですか。この言葉が示すのは、神に出生がないということです。神が本性において何であられるかを示すのではありません。出生をもたないものが何であるかを示すのでもありません。29:11:5 「では、神の本質とは何か」。そう問うのは、出生まで詮索するあなたの狂気のすることです。わたしたちには、いつか、後になってでもそれを学べるなら、それで大きなことです。この闇と鈍さが解かれたときにです。偽ることのないかたの約束のとおりです。29:11:6 これは、そのために清められている人々が、思い描き、望めばよいことです。わたしたちは、あえて、これだけは言います。父にとっては、どこからも出ておられないことが大きなことです。しかし、子にとっても、このような父から出ておられることは、それに劣らず大きなことです。29:11:7 子は、原因のないかたから出ておられるので、原因のない

かたの栄光にあずかっておられるでしょう。そのうえ、出生ということが加わります。思いがすっかり地に落ち、すっかり物質にとらわれた人々でなければ、これはそれほど大きく、敬うべきことなのです。

29:12:1 彼らは言います。「しかし、子が本質において父と同じなら、父は生まれることのないかたなのだから、子もそうなる」。けっこうです。生まれることのないことが神の本質だというのなら、ですが。そうすれば、何か新しい混ぜもの、『生まれた生まれないもの』ができあがるでしょう。29:12:2 しかし、違いが本質のまわりのことにあるのなら、どうしてそれを強い論のように言うのですか。あなたは、本質においてあなたの父と同じです。それなら、何ひとつ父に劣ることがないように、あなたも父の父なのでしょうか。29:12:3 そうではなく、明らかに、固有性は動かさないままで、神の本質が何であるかを探ることになるのではありませんか。そもそも探るとしても、ですが。生まれることのないものと神とが同じではないことは、次のようにして学べるでしょう。29:12:4 もし同じなら、神はだれかの神なのですから、生まれることのないものも、だれかの生まれることのないものだったはずです。あるいは、生まれることのないものはだれのものでもないのですから、神もだれの神でもなかったはずです。29:12:5 まったく同じものは、同じように言い表されるからです。しかし、生まれることのないものは、だれかの生まれることのないものではありません。だれのものだというのでしょうか。そして、神はだれかの神です。すべてのものの神だからです。それなら、どうして神と生まれることのないものとが同じでありえるでしょうか。29:12:6 また、生まれることのないものと生まれたものは、所有と欠如のように互いに対立しています。そうなら、互いに対立する本質も持ち込まれなければなりません。そんなことは、認められていません。あるいはまた、所有は欠如より先にあり、欠如は所有を打ち消すものです。そうなら、子の本質が父の本質より古いだけでなく、父によって打ち消されることにもなります。あなたの前提に従うかぎり、です。

29:13:1 彼らの言う逃れられない論法として、ほかに何が残っているでしょうか。おそらく、最後にこういうところへ逃げ込むでしょう。「神が生むことをまだおやめになっていないなら、出生は未完成で、いつかはおやめになる。29:13:2 おやめになったのなら、必ず始められたこともあったのだ」。またしても、体にとらわれた人たちが、体のことを言っています。わたしとしては、子がお生まれになることが永遠であるかどうかは、まだ言いません。次の言葉をよく調べるまでは、です。『すべての丘より前に、わたしをお生みになる』という言葉です（箴言八・二五）[1]。29:13:3 しかし、その議論のどこに必然があるのか、わたしには分かりません。彼らの言い分では、終わることになるものが始まったものなら、終わることのないものは、必ず、始まっていないことになります。それなら、魂や天使の本性について、彼らはどう言い表すでしょうか。29:13:4 始まったのなら、終わることにもなります。終わらないのなら、彼らの言い分では、明らかに始まってもいません。しかし実際には、始まったのであって、終わることはありません。それなら、彼らの言い分では、終わることになるものは始まってはいないことになります。29:13:5 わたしたちの教えは、こう言います。馬にも、牛にも、人にも、同じ種に属するそれぞれのものにも、一つの定義があります。その定義にあずかるものが、本来の意味でその名で呼ばれます。あずからないものは、その名で呼ばれないか、本来の意味では呼ばれません。それと同じように、神にも一つの本質、一つの本性、一つの呼び名があります。区別されたいくつかの見方に合わせて、名も分かれるとしても、です。29:13:6 そして、本来の意味で神と呼ばれるものは、実際に神であり、本性において神であるものは、まことに神と呼ばれます。わたしたちにとって、真理は名にではなく、事柄にあるのですから。29:13:7 ところが彼らは、真理にさからって何もかも動かすのを恐れているかのようです。そして、理屈と聖書の証言に強いられると、子が神であることは認めます。しかし、それは名だけが同じ神であり、呼び名だけをともにするものだと言うのです。

訳注

1 口語訳は『わたしはすでに生れた』と過去形。ギリシア語訳は現在形。

第29講話（14〜17章）　名だけが同じという論と、子の呼び名

29:14:1 わたしたちは、彼らにこう言い返します。では、どうなのでしょうか。子は、本来の意味では神でないのでしょうか。描かれた生きものが、本来の意味では生きものでないように、でしょうか。本来の意味で神でないなら、どうして神なのでしょうか。すると彼らは言います。「これらが名だけが同じで、しかも両方とも本来の意味でそう呼ばれる、ということを、何が妨げるのか」。29:14:2 そして、彼らは犬を持ち出してくるでしょう。陸の犬と、海の犬、つまり犬と呼ばれる魚です。これらは名だけが同じで、しかも本来の意味でそう呼ばれます。名だけが同じもののうちには、そういう類もあるからです。ほかにも、同じ呼び名を用い、その呼び名に等しくあずかりながら、本性の違うものがあれば、持ち出してくるでしょう。29:14:3 しかし、すぐれた人よ、そこでは、あなたは二つの本性を同じ呼び名の下に置きます。それでも、一方を他方よりすぐれたものとして持ち込みはしません。一方が先に、他方が後にその名のものであるとも、言いません。一方がより多く、他方がより少なくその名のものであるとも、言いません。29:14:4 その名には、両者にそういう区別を強いるものが、何も結びついていないからです。一方の犬がより多く犬で、他方がその犬より少なく犬である、ということはありません。海の犬が陸の犬より、あるいは逆に陸の犬が海の犬より、ということはないのです。そうなるわけが、どこにあるでしょうか。どういう理屈で、そうなるというのでしょうか。29:14:5 呼び名をともにするのは、誉れの等しい、しかも異なる事柄のあいだでのことです。ところが、ここでは、あなたは神に、敬うべきことを結びつけます。すべての本質と本性を超えていることも結びつけます。それは神だけのことで、いわば神性の本性です。そのうえで、それを父には与えながら、子からは奪って下に置きます。そして、誉れと礼拝において、子に二番目の位を割り当てます。言葉の上では同じであることを許しても、実際には神性を切り詰めているのです。そして、等しさを保つ同じ名から、等しくないものを結ぶ同じ名へと、ずる賢く移っていきます。ですから、あなたの説の神性をたとえるなら、例に出した犬たちよりも、描かれた人と生きた人のほうが近いのです。29:14:6 さもなければ、両方に、呼び名をともにすることを与えるのと同じように、本性の等しい誉れも与えなさい。たとえ、それらの本性を異なるものとして持ち込むとしても、です。そうすれば、等しくないことを言い立てるために見つけ出した自分の犬たちを、あなたは自分で片づけてしまったことになります。29:14:7 あなたが分けたものが等しい誉れを持つのなら、名が同じであることが、何の役に立つでしょうか。あなたが同じ名と犬たちに逃げ込んだのは、誉れが等しいと示すためではありません。誉れが等しくないと示すためです。自分自身とも神性とも戦っていることを、これ以上はっきりと暴かれる人がいるでしょうか。

29:15:1 わたしたちは、父は原因の点で子より大きい、と言います。すると、彼らは『原因であることは本性による』という前提を加え、そこから『本性によって大きい』と結論を引き出します。そうするなら、彼らが惑わしているのは自分自身なのか、話の相手なのか、わたしには分かりません。29:15:2 あるものについて言われることが何でも、そのまま、その下にあるものについても言われるわけではないからです。何について、どの点で言われているのかは、見れば分かることです。そうでなければ、わたしも同じようにしてよいはずです。『父は本性によって大きい』を前提とします。次に、『しかし、本性によっては、必ずしも大きいわけでも、父であるわけでもない』を加えます。そこから『大きいものは、必ずしも大きくない』、あるいは『父は、必ずしも父でない』と結論を引き出します。それを何が妨げるでしょうか。29:15:3 あるいは、こうしてもかまいません。『神は本質である。しかし、本質は必ずしも神ではない』。その先は、あなたが自分で結論を引き出しなさい。『神は、必ずしも神ではない』。しかし、思うに、この誤った推論は、『ある点で』と『端的に』を取り違えるところから来ています。こういうことを術語で論じる人々が、いつも言うとおりです。29:15:4 わ

たしたちは、大きいということを、原因であることの本性に帰しています。ところが、彼らはそこから、本性によって大きいということを導き出すのです。それは、わたしたちが『だれそれは死んだ人だ』と言うと、彼らが、人というものが端的に死んだと導き出すようなものです。

29:16:1 しかし、次のことを、どうして素通りできるでしょうか。これまで述べたどれにも劣らず、驚くべきことです。「父とは、本質の名か、はたらきの名か」と彼らは言います。わたしたちを両側から縛るつもりなのです。わたしたちが本質の名だと言えば、子は本質を異にする、と認めることになります。神の本質は一つであり、この人たちの言うように、父がそれを先に占めておられるからです。はたらきの名だと言えば、子は作られたものであって、生まれたものではない、とはっきり認めることになります。29:16:2「はたらく者のいるところには、必ず、はたらきが生み出したものもある。作った者と作られたものが、どうして同じでありえるのか、驚くほかない」と彼らは言うでしょう。二つのうち一つを受け入れなければならないのなら、わたしも、あなたがたのこの分け方に、すっかり恐れ入ったことでしょう。しかし実際には、二つとも避けて、もっと真実な第三のことを言えるのです。まことに賢い人たちよ、父とは、本質の名でも、はたらきの名でもありません。関係の名、つまり父が子に対して、あるいは子が父に対して、どのようにあるかを示す名なのです。29:16:3 わたしたちのあいだで、これらの呼び名は、血のつながりと、身内であることを知らせます。それと同じように、神においても、生まれたものが生んだものと本性を同じくすることを示すのです。しかし、あなたがたのために、父とはある本質のことだ、としてもかまいません。それでも、父は子を締め出すのではなく、子をも伴います。だれもが持っている考えと、これらの呼び名の意味に従えば、そうなります。29:16:4 よければ、父とははたらきの名だ、としてもかまいません。それでも、あなたがたはわたしたちを捕らえられません。その場合、父のはたらきが生み出したのは、まさに本質を同じくするものでしょう。そうでなければ、このことについてはたらきを考えること自体が、不合理だからです。29:16:5 あなたがたが卑怯な戦い方をしようとしても、わたしたちがどのようにそのひねり技をかわすか、分かりますか。しかし、あなたが理屈とひねり技では敵なしだということは、もう分かりました。それなら、聖書の言葉から、あなたの力も見てみましょう。あなたが、そこからもわたしたちを説得しようと引き受けるなら、ですが。

29:17:1 わたしたちのほうは、子についての偉大で高い言葉から、子の神性をとらえ、宣べ伝えています。それはどんな言葉でしょうか。『神』『ことば』『初めにおられるかた』『初めとともにおられるかた』『初め』です。『初めにことばがあった。ことばは神と共にあった。ことばは神であった』（ヨハネ一・一）。また、『初めはあなたとともにある』（詩篇一一〇・三）[1]。また、『代々から、それを初めとお呼びになるかた』（イザヤ四一・四）[2]。29:17:2 このかたは『ひとり子』だからです。『父のふところにいるひとり子、このかたが神をあらわした』（ヨハネ一・一八）[3]。『道』『真理』『いのち』『光』です。『わたしは道であり、真理であり、いのちである』（ヨハネ一四・六）。また、『わたしは世の光である』（ヨハネ八・一二）。29:17:3『知恵』『力』です。『神の力、神の知恵たるキリスト』（第一コリント一・二四）。『輝き』『真の姿』『かたち』『証印』です。『神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿』（ヘブル一・三）。また、『善のかたち』（知恵七・二六）。また、『父なる神は、このかたに証印をお押しになった』（ヨハネ六・二七）[4]。29:17:4『主』『王』『今いますかた』『全能者』です。『主は火を主の所から降らせた』（創世記一九・二四）。また、『あなたの王のつえは公平のつえである』（詩篇四五・六、ヘブル一・八）。また、『今いまし、昔いまし、やがてきたるべき者、全能者』（黙示録一・八）。29:17:5 これらは、はっきりと子について言われた言葉です。これらと同じ力をもつ言葉も、そうです。そのどれ一つとして、子にとって、後から身につけたものではありません。後になって子や聖霊に加わったものでもありません。父ご自身にとって、そうでないのと同じです。29:17:6 完全さは、付け加えによるものではないからです。父が、ことばのないかたであったときは、ありませんでした。父でなかったときも、ありませんでした。真理や知恵や力のなかったときも、ありませんでした。いのちや輝きや善を欠いておられたときも、ありませんでした。

訳注

1 口語訳は『あなたの民は』と読み、『初め』の語がない。

2　口語訳は『初めから世々の人々を呼び出した』。
3　口語訳は『ひとり子なる神』と読む。

4　口語訳は『ゆだねられた』。原文の語は『証印を押す』。

第29講話（18〜21章）　高い言葉と低い言葉

29:18:1 では、あなたのほうは、これらに対して、自分の分別のなさが持ち出す言葉を数え上げてみなさい。『わたしの神またあなたがたの神』『より大きい』『わたしを造られた』『お立てになった』『聖別した』などです。よければ、『僕』『従順』も加えなさい。『与えた』『学んだ』『命令を受けた』『遣わしを受けた』も加えなさい。自分からは何事もすることができない、ということも加えなさい。言うことも、さばくことも、授けることも、意志することも、できないということです。29:18:2 さらに、次のことも加えなさい。知らないこと、服従、祈り、尋ねること、成長、全うされることです。よければ、これらよりもっと低いことも加えなさい。眠ること、飢えること、疲れること、涙を流すこと、苦しみもだえること、身を引くことです。29:18:3 もしかすると、十字架と死までも、このかたを責める種にするかもしれません。復活と昇天は、素通りするだろうと思います。そこには、わたしたちの側に立つものも見つかるからです。29:18:4 これらに加えて、まだ多くのことを、ついばむように拾い集めることもできるでしょう。あなたの、名だけが同じで、名簿にこっそり書き込まれた神を、組み立てようとするならです。わたしたちにとっては、まことの神、誉れの等しい神です。これらの一つ一つを細かく追って、あなたのために最も敬虔な意味に解き明かすことは、難しくありません。書かれた文字のうちにあるつまずきを取り除くことも、難しくありません。ただし、あなたが本当につまずいているのであって、わざと悪事を働いているのでなければ、です。29:18:5 要点を一つにまとめるなら、こうです。より高い言葉は、神性と、苦しみと体にまさる本性に帰しなさい。より低い言葉は、合わさったかたに帰しなさい。あなたのためにご自分をむなしくし、肉となられたかたです。さらに、こう言っても差し支えありません。人となられたかたです。そして、その後に高く上げられたかたです。それは、あなたが自分の教えの肉的で地に落ちたところを打ち壊して、もっと高くあることを学ぶためです。神性とともに高く上り、目に見えるものにとどまらず、知性で知られるものとともに引き上げられるためです。そして、何が本性の理で、何が救いのわざの理なのかを、知るためです。

29:19:1 今あなたが見下しているこのかたは、かつてはあなたを超えておられました。今は人であるかたも、かつては合わさっていないかたでした。もとあったもののままでおられました。なかったものを、お取りになりました。29:19:2 初めにおられたのは、何かのわけによってではありません。神に、どんなわけがあるでしょうか。しかし後には、あるわけがあって、人となられました。そのわけとは、あなたが救われることでした。侮りに満ちたあなたが、です。あなたは、このかたがあなたの粗さを受け入れてくださったというので、神性を見くびっているのです。このかたは、知性を仲立ちとして肉と交わり、人となられました。その人は地上の神です。神と混ざり合って、一つになったからです。よりすぐれたほうが打ち勝ったのです。それは、あのかたが人となられたその分だけ、わたしが神となるためでした。29:19:3 お生まれになりましたが、それより前にお生まれになっていました。女からでしたが、おとめからでもありました。前のほうは人のこと、後のほうは神のことです。人としては父がなく、神としては母がありません。このすべてが、神性のしるしです。胎に宿られましたが、自分もまだ胎にいた預言者に知られました。預言者は、自分がそのために生まれてきた、ことばなるかたの前で躍り上がったのです。29:19:4 布にくるまれましたが、よみがえるときには、葬りの布をお脱ぎになります。飼葉おけに寝かされましたが、天使たちがその栄光をたたえ、星がそのかたを知らせ、博士たちが拝みました。29:19:5 どうしてあなたは、目に見えるものにつまずき、知性で知られるものに目を向けないのでしょうか。エジプトへ追われましたが、エジプトの偶像をお追い払いになります。ユダヤ人のもとでは、『見るべき姿』も『美しさ』もありませんでした（イザヤ五三・二）。しかしダビデにとっては、『人の子らにまさって麗しく』

おられました（詩篇四五・二）。また、山の上では稲妻のように輝き、太陽よりもまばゆくなられます。来たるべきことの奥義をお示しになるのです。

29:20:1 人としてパプテスマをお受けになりましたが、神として罪をお解きになりました。ご自分が清めを必要となさったのではありません。水を聖別するためでした。人として試みをお受けになりましたが、神としてお勝ちになりました。それどころか、勇気を出しなさいとお命じになります。世にお勝ちになったかたとしてです。29:20:2 飢えられましたが、何千もの人をお養いになりました。それどころか、いのちを与える、天からのパンです。渇かれましたが、叫んでおっしゃいました。『だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい』（ヨハネ七・三七）。そればかりか、信じる者たちが泉となって水をわき出させると約束なさいました。29:20:3 疲れられましたが、重荷を負うて苦労している者たちの休みです。眠りに重くなられましたが、海の上では軽やかに歩まれます。それどころか、風をおしかりになり、沈みかけたペテロを軽々とお引き上げになります。税をお納めになりますが、それは魚から取ったものです。それどころか、税を求める者たちを治める王です。29:20:4 サマリヤ人、悪霊に取りつかれた者と呼ばれます。それでも、エルサレムから下って強盗に襲われた人をお救いになります。それでも、悪霊たちはこのかたがだれかを見抜きます。このかたは悪霊を追い出し、霊のレギオンを深みに沈め、悪霊のかしらが電光のように落ちるのをご覧になります。29:20:5 石を投げつけられますが、捕らえられはしません。お祈りになりますが、祈りをお聞き入れになるかたです。涙をお流しになりますが、涙をお止めになるかたです。ラザロはどこかとお尋ねになります。人だったからです。しかし、ラザロをよみがえらせなさいます。神だったからです。売り渡されます。それもひどく安く、銀貨三十枚で、です。しかし、世を買い戻してくださいます。それも大きな代価で、ご自分の血によってです。29:20:6 羊のように、ほふり場に引かれて行きますが、イスラエルを牧しておられます。今では、全世界をも牧しておられます。声のない小羊のようですが、ことばです。荒野で呼ばわる者の声によって、告げ知らされたかたです。29:20:7 わずらいを負い[1]、傷をお受けになりましたが、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになります。木の上に上げられ、釘で打ちつけられますが、いのちの木によって、わたしたちを元に戻してくださいます。それどころか、ともに十字架につけられた強盗をもお救いになり、目に見えるものをことごとく暗くなさいます。29:20:8 酢を飲まされ、胆汁を食べさせられます。それはだれでしょうか。水をぶどう酒にお変えになったかたです。苦い味をお消しになるかた、甘さそのもの、慕わしさそのもののかたです[2]。いのちをお渡しになりますが、それを再び得る力をもっておられます。それどころか、幕は裂けます。上にあるものが示されるからです。岩は裂け、死人たちは先立ってよみがえります。29:20:9 死なれますが、いのちを与え、死によって死をお滅ぼしになります。葬られますが、よみがえられます。黄泉に下られますが、魂をお引き上げになります。それどころか、天に上られます。そして、生きている者と死んだ者とをさばくためにおいでになります。あなたのこのような議論を吟味するためにも、です。29:20:10 低いほうの事柄があなたに迷いのきっかけを与えるなら、高いほうの事柄が、あなたの迷いを解きます。

29:21:1 謎をかける人々に対して、わたしたちの言うことは以上です。進んで言ったのではありません。信じる者たちには、むだ話や、言葉で反対論を戦わせることは、楽しくないからです。敵対する者は、ひとりで足ります。それでも、襲いかかってくる人々のために、やむをえず言ったのです。病があるから薬もあるのと同じです。彼らが、何でも知っている賢い者ではないことを、知るためです。福音をむなしくする余計な議論で負け知らずの者でもないことを、知るためです。29:21:2 わたしたちが、信じることをやめて、理屈の力を武器のように押し出すとします。御霊の言葉の確かさを、詮索で崩してしまうとします。そのうえで、理屈が事柄の大きさに負けるとします。理屈は必ず負けます。わたしたちの思いという弱い道具から出てくるものだからです。そのとき、何が起こるでしょうか。29:21:3 理屈の弱さが、奥義の弱さに見えてしまうのです。こうして、言葉の巧みさは、十字架をむなしくするものであることが明らかになります。パウロもそう考えているとおりです（第一コリント一・一七）。信仰こそが、わたしたちの言葉を満たすものだからです。29:21:4 結び目をお告げになり、固く結ばれたものをお解きになるかたがおられます。わたしたちにも、むりやりな教えのもつれた結び目をほどくことを、思いつかせてくださったかたです。そのかたが、できることならこの人たちをも変えてくださいますように。術語で論じる者の代わ

りに、信じる者としてくださいますように。今呼ばれている名の代わりに、キリスト者としてくださいますように。29:21:5 わたしたちが勧めるのも、このことです。『キリストに代って願う、神の和解を受けなさい』（第二コリント五・二〇）。『御霊を消してはいけない』（第一テサロニケ五・一九）。いえ、むしろ、キリストのほうがあなたがたと和解してくださいますように。御霊が、遅ればせながらでも、あなたがたのうちに輝き出てくださいますように。29:21:6 しかし、あなたがたがあくまで争いを好むとしても、わたしたちは、自分のために三位一体を守りたいものです。そして、三位一体によって守られますように。純真で責められるところのない者としてとどまり、慕っているものが、もっと完全に現される時まで、そうありますように。わたしたちの主キリストご自身のうちにあってです。このかたに、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

訳注

1 イザヤ五三・五の七十人訳の語。口語訳は『砕かれた』。

2 雅歌五・一六の七十人訳の語。口語訳は『彼はことごとく麗しい』。

第30講話（1〜5章）御子について

30:1:1 理屈から出てくるひねりやもつれは、御霊の力によって、あなたのためにもう十分に揺さぶって崩しました。聖書から持ち出される異論や反対論もあります。文字の神殿を荒らす者たちは、書かれたことの意味を盗み、これらを使って多くの人を自分の側に引き込みます。真理の道をかき乱しているのです。これらも、すでにまとめて解いておきました。分別のある人々には、ぼんやりとではなく解けたと、わたしは思っています。より高く、より神にふさわしい言葉は、神性に帰しました。より低く、より人らしい言葉は、わたしたちのための新しいアダムに帰しました。罪に打ち勝つために苦しみを受ける神です。ただ、一つ一つを細かく追うことはしませんでした。話が先を急いでいたからです。しかし、あなたはそれらについても、短い答えを求めています。もっともらしい議論に流されないためです。そこでわたしたちは、それらの答えも、番号を付けて分け、要点にまとめましょう。覚えやすくするためです。

30:2:1 第一に、彼らがとりわけ手近に持ち出す、あの句があります。『主は、そのわざのために、その道の初めとして、わたしを造られた』（箴言八・二二）[1]。これに、どう答えましょうか。ソロモンを責めましょうか。30:2:2 晩年の過ちのために、それより前に書いたものを退けましょうか。それとも、これは知恵そのものの言葉だと言いましょうか。知恵とは、いわば知識であり、作り手の理法であって、万物はそれに従って成り立った、と。30:2:3 聖書は、魂のないものにも、人のように語らせることがよくあるからです。たとえば、海がこれこれのことを言った、とあります（イザヤ二三・四）。『淵は言う、それはわたしのうちにない』ともあります（ヨブ二八・一四）。『もろもろの天は神の栄光をあらわし』ともあります（詩篇一九・一）。また、剣に何事かが命じられます（ゼカリヤ一三・七）。山と小山は、踊るわけを問われます（詩篇一一四・六）。30:2:4 わたしたちより前の人々のうちには、これらを強い論拠として立てた人もいます。しかし、わたしたちはそのどれも言いません。この言葉は、救い主ご自身、まことの知恵の言葉だとしておきましょう。そのうえで、少しいっしょに考えてみましょう。30:2:5 存在するもののうち、わけのないものは何でしょうか。神性です。神のわけを言える者は、だれもいないからです。もしいれば、そのわけが神より古いものになってしまうでしょう。では、神がわたしたちのために身にお受けになった人性には、どんなわけがあるでしょうか。30:2:6 それは、間違いなく、わたしたちが救われることです。ほかに何があるでしょうか。さて、ここには『わたしを造られた』も、『わたしをお生みになる』（箴言八・二五）も、はっきり見つかります。ですから、話は簡単です。わけとともに見つかるものは、人性に帰しましょう。単純で、わけのないものは、神性に数えましょう。30:2:7 では、『造られた』は、わけとともに言われているのではありませんか。『そのわざのために、その道の初めとして、わたしを造られた』とあるからです。そのわざとは、『そのみ手のわざは真実かつ公正であり』（詩篇一一一・七）と言われる、そのわざです。このかたは、そのわざのために、神性によって油注ぎを受けたのです。30:2:8 この油注ぎは、人性が受けたものだからです。一方、『わたしをお生みになる』には、わけが付いていません。そうでないと言うなら、この句に添えられたものを何か示してみなさい。それなら、次のことに、どんな理屈が反対できるでしょうか。知恵は、地上での出生によれば、造られたものと言われます。最初の、いっそうとらえられない出生によれば、生まれたものと言われるのです。

30:3:1 これに続くのが、多くの人によく仕える『僕』と呼ばれることです[2]。また、神の子と呼ばれることは、このかたにとって大きなことだ、ということです[3]。まことに、このかたはお仕えになりました。肉に、誕生に、わたしたちの苦しみにお仕えになったのです。わたしたちを自由にするためでした。また、罪にとらわれていたのをお救いになった、すべての人々にもお仕えになりました。30:3:2 しかし、人の低さにとって、これより大きなことがあるでしょうか。神と結び合わされ、混ざり合うことによって神となることです。上からの日の光に、こ

れほどまでに顧みられることです。そのため、生まれる聖なるものが、いと高き者の子ととなえられることです。そして、すべての名にまさる名を賜わることです。30:3:3 この名とは、神でなくて何でしょうか。さらに、すべてのひざがかがむことです。わたしたちのためにご自分をむなしくし、神のかたちと僕の姿とを混ぜ合わせてくださったかたの前にです。また、イスラエルの全家が、神がこのかたを主またキリストとしてお立てになったことを知ることです。これらのことは、生まれたかたのはたらきと、生むかたがよしとなさったことによって起こったのです。

30:4:1 第二に、彼らにとって最も大きく、打ち負かせない句は何でしょうか。このかたは、ある時まで支配なさらなければならない、という句です。また、万物更新の時まで天に受け入れられ、敵に打ち勝つまで右の座についておられなければならない、という句です。30:4:2 では、その後はどうなのでしょうか。支配をおやめになるのでしょうか。天から押し出されるのでしょうか。だれがやめさせるのでしょうか。どんなわけがあってでしょうか。あなたは、なんと大胆な解き明かし手でしょう。そして、なんと支配を受け入れない人でしょう。30:4:3 しかも、あなたは、このかたの支配に限りがないことを聞いています。それなのにそう考えてしまうのは、あなたが次のことを知らないからです。『まで』は、必ずしもその後に来るものを打ち消しはしません。そこまでのことを定めはしますが、それを越えることを拒みはしないのです。30:4:4 そうでなければ、ほかのことは言わないとしても、あの句をどう考えるのでしょうか。『わたしは世の終りまで、あなたがたと共にいる』（マタイ二八・二〇）。その後は、共にいないという意味でしょうか。それに、何のわけがあるでしょうか。30:4:5 それだけではありません。意味を分けないことも、そのもとです。『支配する』は、一つには、全能者として、望む者にも望まない者にも王であることを言います。もう一つには、わたしたちのうちに服従を生み出すことを言います。進んで支配を受ける者として、わたしたちをご自分の支配のもとに置いてくださるのです。前の意味の支配には、限りがないでしょう。30:4:6 では、後の意味の支配の限りは何でしょうか。救われる者として、わたしたちを手のうちにお受け取りになることです。すでに服従している者に、なぜ服従を生み出す必要があるでしょうか。その後、このかたは地をさばくために立ち上がられます。そして、救われるものと滅びるものとをお分けになります。その後、神は神々のなかに立たれます。神々とは、救われた者たちのことです。そして、一人一人がどんな誉れとすまいにふさわしいかを、見分けてお定めになります。

30:5:1 これに、服従のことも結びつけなさい。あなたが、子を父に服従させるという、その服従です。「なんだと。それでは、今は服従していないかのようではないか」と、あなたは言います。「そもそも、神であるのに、神に服従する必要があるのか。30:5:2 あなたは、強盗か、神に逆らう者について話すような言い方をしている」。しかし、こう考えなさい。わたしのために、わたしののろいを解くかたが、のろいと呼ばれました。世の罪を取り除くかたが、罪と呼ばれました。古いアダムに代わって、新しいアダムとなられました。それと同じように、わたしが服従しないことも、このかたはご自分のものとなさるのです。体全体のかしらとしてです。30:5:3 ですから、わたしが服従せず、逆らう者であるあいだは、わたしに関するかぎり、キリストも服従しない者と呼ばれます。わたしが服従しないのは、神を否むことと、情欲によってです。しかし、『万物が彼に服従する時』が来ます（第一コリント一五・二八）[4]。万物は、知ることによっても、造り変えられることによっても、服従するのです。そのとき、このかたご自身も、服従を満たしておられます。救われたわたしを、神のもとへ導いてくださるのです。30:5:4 わたしの言い方によれば、キリストの服従とは、父の意志を満たすことだからです。子は、わたしたちを父に服従させてくださいます。父も、わたしたちを子に服従させてくださいます。一方ははたらきをなさり、他方はよしとなさるのです。前にも言ったとおりです。30:5:5 こうして、服従させたかたが、服従したものを神の前に立たせてくださいます。わたしたちのものを、ご自分のものとなさるのです。次の句も、このようなことだと、わたしには思えます。『わが神、わが神、わたしを顧みてください。なにゆえわたしを捨てられるのですか』（詩篇二二・一）。30:5:6 このかたご自身が見捨てられたのではないからです。父に見捨てられたのでも、ご自分の神性に見捨てられたのでもありません。ある人々はそう考えます。神性が苦しみをお恐れになり、そのために、苦しみを受けるかたから身をお引きになった、というのです。30:5:7 だれが、このか

たに、そもそも地上でお生まれになることや、十字架にお上りになることを強いたでしょうか。そうではなく、前に言ったとおり、このかたはご自分のうちに、わたしたちのありさまを写し出しておられるのです。先に見捨てられ、顧みられなかったのは、わたしたちでした。そのわたしたちが、今は迎え入れられ、救われています。苦しみを受けないかたの苦しみによってです。同じように、このかたは、わたしたちの愚かさと過ちをご自分のものとして、詩篇の続きの言葉を語っておられます。第二十一篇の詩篇[5]が、明らかにキリストを指しているからです。

訳注

1 口語訳は『そのわざの初めとして』で、『ために』がない。
2 イザヤ五三・一一の七十人訳の句。口語訳は『多くの人を義とし』。
3 イザヤ四九・六の七十人訳の句。口語訳は『しもべ』で『いとも軽い事』。
4 口語訳は『万物が神に従う時には』。ここでは彼をキリストと取る。
5 口語訳では第二十二篇。愚かさと過ちの語は七十人訳の二～三節にある。

第30講話（6〜10章）従順を学ぶこと、より大きいこと、できないこと

30:6:1 同じ見方に属するのが、このかたが苦しみによって従順をお学びになった、ということです。叫びも、涙も、願い求めることも、聞きいれられることも、畏れ敬う心もそうです。これらは、わたしたちのために、驚くべきしかたで演じられ、織りなされているのです。30:6:2 ことばなるかたとしては、このかたは従順でも、不従順でもありませんでした。これらは、支配の下にある者、下に立つ者に属することだからです。従順は、より分別のある者のもの、不従順は、罰に値する者のものです。30:6:3 しかし、僕の姿としては、同じ僕である者たちのところへ、僕たちのところへ、降りておいでになります。そして、ご自分のものでない姿をおとりになります。わたしをまるごと、わたしのものとともに、ご自分のうちに担っておられるのです。それは、より悪いものを、ご自分のうちで消し尽くすためです。火が蝋を、太陽が地から立つ霧を消し尽くすようにです。そして、混ぜ合わされたことによって、わたしがこのかたのものにあずかるためです。30:6:4 そのため、このかたは、行いによって従順を尊いものとなさり、苦しみを受けることによって、従順を身をもってお知りになります。思いだけでは足りないからです。わたしたちにとっても、実際の行いにまで進まなければ、足りないのと同じです。30:6:5 行いは、思いの証しだからです。また、次のように受け取るのも、悪くはないでしょう。このかたは、わたしたちの従順をお確かめになり、すべてをご自分の苦しみによってお量りになる、ということです。人への愛から出た工夫によるのです。それは、ご自分のことによって、わたしたちのことを知ることがおできになるためです。こうしてわたしたちには、ある程度は求められ、ある程度は容赦されます。苦しみを受けることとともに、弱さも勘定に入れられるのです。30:6:6 光は、闇の中、つまりこの世の生の中に輝いていました。その光でさえ、肉という覆いのために、もう一つの闇に追われたのです。悪い者、誘惑する者のことです。そうであれば、闇であるわたしたちは、より弱いのですから、どれほど追われることでしょう。30:6:7 このかたがすっかりお逃れになったのに、わたしたちがいくらかとらえられたとしても、何の不思議があるでしょうか。正しく考える人々にとっては、このかたが追われたことの方が、わたしたちがとらえられることより大きなことだからです。30:6:8 さらに、これまで言ったことに、次のことを付け加えましょう。ある句を思い起こしたからです。『主ご自身、試錬を受けて苦しまれたからこそ、試錬の中にある者たちを助けることができるのである』（ヘブル二・一八）。この句は、明らかに同じ考えに向かっています。また、万物更新の時には、『神がすべての者にあって、すべてとなられる』でしょう（第一コリント一五・二八）。ここで言う神は、父のことではありません。子がすっかり父のうちへ解けておしまいになる、というのではないのです。大きな薪の火から、たいまつが一時引き離され、また合わせられるように、ということではありません。サベリオス派の人々も、この言葉によって損なわれてはならないからです。そうではなく、神の全体のことです。神の全体がすべてとなられるのは、わたしたちがもはや多くの者でなくなるときです。今のわたしたちは、意志の動きと情欲によって多くの者になっています。神を自分のうちにまったく担っていないか、わずかしか担っていません。しかしそのときには、まるごと神に似た者となり、神の全体を、そして神だけを受け入れる者となるのです。30:6:9 これこそが、わたしたちが急いで向かっている完成だからです。とりわけパウロ自身が、このことを証ししています。ここでは神について漠然と言っていることを、ほかの所では、はっきりとキリストに限って言っているのです。何と言っているでしょうか。30:6:10 『そこには、もはやギリシヤ人とユダヤ人、割礼と無割礼、未開の人、スクテヤ人、奴隷、自由人の差別はない。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにいますのである』（コロサイ三・一一）。

30:7:1 第三に、『より大きい』を数えなさい。第四に、『わたしの神またあなたがたの神』を数えなさい。もし『より大きい』とだけ言われ、『等しい』と言われ

ていないなら、彼らにも何かの足場があったかもしれません。しかし、わたしたちは両方をはっきり見いだしています。それなら、このご立派な人たちは何と言うでしょうか。30:7:2 彼らの強みは何でしょうか。どうやって、相いれないものを相いれさせるのでしょうか。同じものが、同じものより、同じ意味で大きくもあり、等しくもあるというのは、不可能なことの一つだからです。それとも、明らかに、『より大きい』は原因に関わり、『等しい』は本性に関わるのではないでしょうか。30:7:3 わたしたち自身は、十分な分別をもって、このことを認めます。しかし、ほかのだれかが、わたしたちの言葉に異を唱えて、こう言うかもしれません。このような原因から出ておられることは、原因のないかたより劣ることではない、と。30:7:4 子は、始まりのないかたから出ておられるので、始まりのないかたの栄光にあずかっておられるでしょう。そのうえ、出生ということが加わります。少なくとも知性のある人々にとっては、これはそれほど大きく、敬うべきことなのです。30:7:5 それに、父は人として考えられるかたより大きい、と言うのは、正しいことではあっても、大したことではありません。神が人より大きいとして、何の不思議があるでしょうか。『より大きい』を振りかざす人々には、これだけ言っておきましょう。

30:8:1 また、父は、ことばなるかたの神とではなく、見えるかたの神と呼ばれるのでしょう。本来の意味で神であるかたに、どうして神がありうるでしょうか。父と呼ばれるのも同じで、見えるかたの父ではなく、ことばなるかたの父です。30:8:2 キリストは、二重のかたであられたからです。そのため、二つの本性のどちらについても、一方の呼び名は本来の意味で、もう一方は本来の意味でなく用いられます。わたしたちの場合とは逆です。神は、本来の意味でわたしたちの神ですが、本来の意味でわたしたちの父なのではありません。30:8:3 異端者たちを迷わせているのは、このこと、つまり呼び名を結び合わせることです。二つが混ぜ合わされているために、呼び名が入れ替わるのです。その証拠に、本性が分けて言われるときには、呼び名も、見方に合わせて、ともに分かれます。30:8:4 パウロがこう言うのを聞きなさい。『わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の父』（エペソ一・一七）。キリストに対しては神、栄光に対しては父なのです。両方が合わさって一つであっても、それは本性によるのではなく、二つが一つに会うことによるのです。これより分かりやすいことがあるでしょうか。

30:9:1 第五に数えるのは、このかたが、いのちやさばきをお受けになることです。もろもろの国の嗣業、すべての肉を支配する権威、栄光、弟子たち、そのほか言われているものも同じです。これも、人性に属します。30:9:2 しかし、それを神性に与えたとしても、おかしくはありません。後から身につけたものとして与えるのではないからです。初めからともにあったものとして、本性の理によって与えるのであって、恵みによってではないのです。

30:10:1 第六に置くのは、子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることができない、ということです。これについては、こう言えます。『できる』『できない』は、一つの意味でしか言われない語ではありません。多くの意味をもつ語なのです。30:10:2 ある場合には、力が欠けていることを言います。それも、ある時に限って、ある相手に限って言うことがあります。たとえば、幼い子が競技をすることができない、子犬が見ることができない、この人と競い合うことができない、と言う場合です。30:10:3 幼い子も、いつかは競技をするでしょう。子犬も目が見えるようになるでしょう。ほかの者にはかなわなくても、この人とは競い合えるようになるでしょう。また、ある場合には、たいていそうだ、ということを言います。たとえば、『山の上にある町は隠れることができない』（マタイ五・一四）です。30:10:4 もっと大きなものがさえぎれば、隠れることもあるでしょう。また、ある場合には、もっともでない、ということを言います。『婚礼の客は、花婿が一緒にいる間は、断食はできない』（マルコ二・一九）。花婿を、体で見えるかたとして見ても、そうです。このかたが一緒におられる時は、苦しみを忍ぶ時ではなく、喜びの時だからです。花婿を、ことばとして考えられるかたとして見ても、そうです。30:10:5 ことばによって清められている人々が、どうして体で断食しなければならないでしょうか。また、ある場合には、意志しない、ということを言います。たとえば、いやしを受ける人々の不信仰のゆえに、そこでは力あるわざをすることがおできにならなかった、という場合です。30:10:6 いやしには、両方が必要だったからです。いやされる人々の信仰と、いやすかたの力です。片方が欠ければ、もう片方だけでは、いやしは成り立

ちませんでした。30:10:7 これも、もっともでないことの類に加えるべきかもしれません。不信仰のために害を受けることになる人々にとって、いやしはもっともなことではないからです。意志しないことの類に属するのが、「世はあなたがたを憎まずにはいられない」という言葉です。また、『あなたがたは悪い者であるのに、どうして良いことを語ることができようか』（マタイ一二・三四）もそうです。30:10:8 これらのどれも、意志しないという意味でなければ、どうしてできないと言えるでしょうか。語られることの中には、次のような類もあります。本性にはできないが、神が意志なされば、神にはできる、というものです。たとえば、同じ人がもう一度生まれることはできない、ということです。また、針の穴がらくだを通さない、ということです。神が意志なされば、これらのことが起こるのを、何が妨げるでしょうか。

第30講話（11〜13章）父のなさることを見ること、遣わしたかたの意志、唯一のまことの神

30:11:1 これらすべてのほかに、まったく不可能で、受け入れる余地のない、という意味があります。いま調べている句がそうです。たとえば、神が悪であることはできない、神が存在しないことはできない、とわたしたちは言います。そうできることは、神の力ではなく、むしろ力のなさを示すことになるからです。また、存在しないものが存在することはできない、二の二倍が四でもあり十でもあることはできない、とも言います。それと同じように、父のなさらないことを子が何かなさる、ということは、不可能で、ありえないのです。30:11:2 父がお持ちになっているものはみな、子のものだからです。逆に、子のものも父のものです。ですから、どちらかに固有のものは何もありません。共通だからです。存在そのものも、共通で、誉れの等しいものだからです。たとえ子にとっては、それが父から来るものであってもです。30:11:3 このことに従って、『わたしは父によって生きている』（ヨハネ六・五七）という句も言われています。子のいのちと存在が、父によって保たれている、というのではありません。そうではなく、子が、時によらず、ほかの原因を介さずに、父から存在しておられる、ということです。30:11:4 では、子が父のなさるのをご覧になって、そのとおりになさる、というのは、どういう意味でしょうか。姿を描く人々や文字を写す人々のように、でしょうか。そういう人々は、原型を見て、そこから手を取って導かれるのでなければ、本物どおりに写すことができません。30:11:5 では、知恵が、教える者を必要となさるでしょうか。教えられなければ、何もなさらないのでしょうか。また、父はどのようになさるのでしょうか。あるいは、どのようになさったのでしょうか。父は、今の世界に対応する別の世界を、前もって成り立たせておかれたのでしょうか。来るべき世界に対応する世界も、これからそうなさるのでしょうか。そして子は、それらをご覧になって、一方をすでに成り立たせ、もう一方をこれからそうなさる、というのでしょうか。30:11:6 それなら、この理屈によれば、世界は四つあることになります。二つは父の作品、二つは子の作品です。なんという理屈のなさでしょう。また、子は、らい病を清め、悪霊と病から解き放ち、死人を生かし、海の上を歩かれます。そのほか、なさったことをすべてなさいます。父がこれらのことを先になさったのは、どんな機会に、またいつのことだったのでしょうか。30:11:7 それとも、明らかに、こういうことではないでしょうか。同じ事柄の型を父がおしるしになり、ことばなるかたがそれを仕上げておいでになるのです。僕のようにでも、知らずにでもなく、知識をもち、主人として仕上げておいでになるのです。もっとふさわしく言えば、父のようにです。30:11:8 わたしは、父によってなされることを子も同じようになさる、という句を、このように受け取るからです。なされるものが同じようである、という意味ではありません。権威の誉れが等しい、という意味です。30:11:9 父も今に至るまで働いておられ、子も働いておられる、というのも、このことを言うのでしょう。それだけではありません。お二人がお作りになったものを治め、保つことにおいても、子は同じようになさるのです。そのことは、神が御使たちを霊とし、地をその基の上にお据えになる、という句が示しています[1]。地は一度かぎり据えられたもの、御使たちは一度かぎり生じたものなのにです。また、雷を固め、風を創造なさる、という句も示しています[2]。これらのものの理法は一度かぎり成り立ちましたが、そのはたらきは今も絶えず続いているのです。

30:12:1 第七に、次のことを挙げましょう。子が天から下ってきたのは、自分の意志を行うためではなく、遣わしたかたの意志を行うためだ、ということです。もしこれが、降っておいでになったかたご自身によって言われたのでなければ、わたしたちはこう言ったでしょう。この言葉は、人から出たものとして形づくられている、と。ただし、救い主のうちに考えられる人ではありません。その人の意志は、まるごと神とされていて、神に少しも逆らわないからです。そうではなく、わたしたちと同じ人です。人の意志は、必ずしも神の意志に従わず、たいていは逆らい、抗うものだからです。30:12:2 実際、わたしたちは、あの句もこのよ

うに理解しました。「父よ、もしできることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが意志することではなく、あなたの意志が力をもちますように」（マタイ二六・三九、ルカ二二・四二）。30:12:3 救い主のうちに考えられる人が、できるかできないかをご存じないとは考えにくいからです。また、意志に意志を対抗させておられるとも考えにくいのです。しかし、天から下ってきたという言葉は、人の本性をお取りになったかたの言葉として言われています。降っておいでになったのは、このかただからです。取られたものの言葉ではありません。そこで、わたしたちはこう答えましょう。30:12:4 この言葉は、子に父の意志と別の自分の意志がある、という意味で言われているのではありません。ない、という意味で言われているのです。そうすると、引き出される意味は次のようになります。「わたしが下ってきたのは、わたしの意志を行うためではない。わたしの意志は、あなたの意志から切り離されていないからだ。わたしとあなたに共通の意志を行うためである。わたしたちには一つの神性があるように、意志も一つなのだ」。30:12:5 このように言われることの多くは、一般の言い方として、肯定する意味ではなく、否定する意味で言われるからです。たとえば、『神は聖霊を、量って賜うのではない』（ヨハネ三・三四）[3]という句です。神は聖霊を賜うのでもなく、聖霊が量られたものでもありません。神は、神によって量られないからです。また、『わたしの罪のためでも、わたしのとがのためでもない』（詩篇五九・三）[4]という句もそうです。罪があるという意味でこの言葉が言われているのではなく、ないという意味だからです。さらに、『わたしたちの行った義のわざによってではなく』（テトス三・五）という句もそうです。わたしたちは、義のわざを行っていないからです。30:12:6 このことは、続く言葉からも明らかです。このかたはこうおっしゃいます。「父の意志とは何か。子を信じる者がみな救われ、最後の復活、すなわち回復にあずかることだ」（ヨハネ六・四〇）。30:12:7 それでは、これは父の意志であって、子の意志ではまったくないのでしょうか。それとも子は、意に反して福音をお告げになり、意に反して人々から信じられているのでしょうか。そんなことを、だれが信じるでしょうか。人々の聞いている言葉は子のものではなく、父のものだ、という句も、同じ意味をもっています。30:12:8 共通のものが、どうしてだれか一人に固有のもの、一人だけのものでありうるのでしょうか。わたしはいろいろ考えても、それを見て取ることができません。ほかのだれにもできないと思います。意志することについて、このように考えるなら、あなたは正しく、まことに敬虔に考えることになるでしょう。わたしの考えでは、そして分別のある人ならだれの考えでも、そうです。

30:13:1 第八に、彼らには次の句があります。『唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ること』（ヨハネ一七・三）。また、『神ひとりのほかによい者はいない』（マルコ一〇・一八、ルカ一八・一九）。30:13:2 しかし、これはまったくたやすく解ける、とわたしには思えます。もし『唯一の、まことの』を父に当てはめるなら、真理そのものをどこに置くのでしょうか。また、次の句を、そのように理解するとしましょう。『唯一の知恵深き神に』（ローマ一六・二七）。あるいは『ただひとり不死を保ち、近づきがたい光の中に住む』かたに（第一テモテ六・一六）。あるいは『世々の王、不朽にして見えざる、唯一の知恵深き神に』（第一テモテ一・一七）[5]。そうすれば、子はあなたによって死に定められ、消え去っておしまいになるでしょう。あるいは闇に定められ、知恵ある者でも、王でも、見えない者でもなく、そもそも神でもない者とされるでしょう。この最後のものが、挙げたことすべてのかなめです。30:13:3 また、子は、ほかのものとともに、善も失うことにならないでしょうか。善こそ、とりわけ神だけのものなのにです。わたしはこう思います。『唯一の、まことの神でいますあなたを知る』という句が言われたのは、退けるためです。神々ではないのに、神々と呼ばれているものをです。30:13:4 もし『唯一の、まことの』が、キリストと区別して言われていたとしましょう。それなら、『あなたがつかわされたイエス・キリスト』という句は付け加えられなかったでしょう。そうではなく、この言葉は、一般に、神性について言われたものだったのです。30:13:5 また、『よい者はいない』という句は、イエスを試みた律法学者への答えです。この人は、相手を人と思って、その善を証ししたのです。このかたは、こう言っておられるのです。「この上なくよいものは、神だけのものだ。たとえ人がよいと呼ばれることがあっても」。たとえば、『善人はよい倉から良い物を取り出し』（マタイ一二・三五）という句がそうです。また、神

がサウルに、ダビデについてこうおっしゃったこともそうです。「わたしは、あなたよりもよい者に王国を与える」（第一サムエル一五・二八）。さらに、『主よ、善良な人に、さいわいを施してください』（詩篇一二五・四）という句もそうです。そのほか、わたしたちのうちでほめられる人々について言われる、同じような言葉もみなそうです。最初の美しいものから流れ出たものが、第二の意味ででも、その人々に届いているのです。30:13:6 このことに納得していただけるなら、それがいちばんです。そうでないなら、ほかの所で子だけが神と言われている、と言う人々に、あなたは何と答えるのでしょうか。あなたの前提に従えば、そうなるのです。30:13:7 どの言葉においてでしょうか。次の言葉です。『これがあなたの神である。ほかのだれも、このかたと並べて数えられることはない』（バルク三・三六）。また、少しあとで、『その後、このかたは地上にお現れになり、人々とともにお過ごしになった』（バルク三・三八）。30:13:8 これが父ではなく子について言われていることは、付け加えられた句がはっきり示しています。体をもってわたしたちと交わり、下にいる者たちとともにおられたのは、このかただからです。30:13:9 もし、これが神々と思われているものに対してではなく、父に対抗して言われている、という説が勝つとしましょう。そうなれば、わたしたちは、子に対して力を尽くしたその同じ手立てによって、父を失うという敗北を喫することになります。この勝利ほどみじめで、損の大きいものがあるでしょうか。

訳注

1 詩篇一〇四・四～五。口語訳は『風をおのれの使者とし』、五節は過去形。
2 アモス四・一三の七十人訳の句。口語訳は『山を造り、風を創造し』。
3 口語訳は『神は聖霊を限りなく賜う』。
4 口語訳は『主よ、わたしにとがも罪もなく』。
5 口語訳は『世々の支配者、不朽にして見えざる唯一の神に』。

第30講話（14〜18章）　とりなすこと、その日を知らないこと、神の呼び名

30:14:1 第九に、彼らは次の句を持ち出すでしょう。『いつも生きていて、わたしたちのためにとりなしておられる』（ヘブル七・二五）。まことにそのとおりです。たいへん奥義に満ちた、人を愛する言葉です。とりなすといっても、多くの人の言い方のように、仕返しを求めることを含むのではありません。そこには、どこか低さが伴うからです。そうではなく、仲保者であるという理由で、わたしたちのために使者として願うことです。御霊も、わたしたちのためにとりなしてくださる、と言われているのと同じです。30:14:2 『神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである』（第一テモテ二・五）。このかたは、人として、わたしの救いのために、今もなお使者として願っておられるからです。お取りになった体とともにおられるからです。人となられたことの力によって、わたしを神となさる時に至るまでもです。たとえ、もはや肉によって知られることはないとしてもです。肉の苦しみのことを言っているのです。罪のほかは、わたしたちと同じ苦しみです。30:14:3 同じように、わたしたちには『助け主』イエスがおられます（第一ヨハネ二・一）。しかしそれは、このかたがわたしたちのために父の前にひれ伏し、奴隷のように平伏しておられる、という意味ではありません。そのような、まことに奴隷じみた考えは捨て去りなさい。御霊にふさわしくない考えです。30:14:4 父がそれをお求めになることも、子がそれをお受けになることも、ふさわしくありません。神について、そのように考えることも、正しくありません。そうではなく、このかたは、人としてお受けになった苦しみによって、わたしたちに忍耐するよう説き伏せておられるのです。ことばなるかたとして、また勧める者としてです。わたしは、助け主の助けとは、このことだと考えます。

30:15:1 第十に、彼らには「知らないこと」があります。終わりの日、その時は、だれも知らない、子自身も知らない、ただ父だけが知っておられる、ということです。しかし、知恵がどうして、存在するものの何かを知らないことがあるでしょうか。世々をお造りになったかた、完成させ、造り変えるかた、生じたものの終わりであるかたがです。30:15:2 このかたは、神のことを知っておられます。人の霊が、自分のうちにあることを知っているのと同じようにです。この知識より完全なものがあるでしょうか。その時より前のことは、正確に知っておられます。いわば終わりにすれすれのことまでも知っておられます。それなのに、どうしてその時そのものはご存じないのでしょうか。30:15:3 それは、謎のような話です。ある人が、城壁の手前のことは正確に知っていると言いながら、城壁そのものは知らないと言うようなものです。あるいは、昼の終わりはよく知っているのに、夜の始まりは知らないと言うようなものです。こういう場合には、一方を知ることが、どうしても、もう一方を知ることを伴うのです。30:15:4 それとも、だれの目にも明らかではないでしょうか。このかたは、神としては知っておられ、人としては知らないとおっしゃるのです。見えるものを、知性で知られるものから分けるならです。『子』という呼び名が、それだけで立ち、関係を言う語を伴っていないからです。だれの子かが、子に添えられていないのです。そのことが、わたしたちにこう考えさせます。知らないことを、より敬虔な意味に受け取り、神としての面ではなく、人としての面に帰すべきだ、と。

30:16:1 さて、この説明で十分であれば、ここで止まりましょう。それ以上は何も求めないことにしましょう。そうでなければ、第二の説明があります。ほかのものの一つ一つと同じように、最も大いなることがらの知識も、原因であるかたに帰すことにしましょう。生むかたを敬うためです。30:16:2 わたしには、こう思えます。わたしたちの学識ある人の一人が読んだようには読まない人でも、少し考えれば、次のことに気づくでしょう。子がその日、その時を知っておられるのも、父が知っておられるから、というほかではない、ということです。30:16:3 そこから引き出される意味は、どのようなものでしょうか。父が知っておられるので、そのために子も知っておられる、ということです。最初の本性のほかには、

だれにも、これは知られず、理解されないことが明らかだからです。30:16:4 なお、論じることが残っていたでしょう。命令を受けたこと、命令を守ったこと、いつも父のみこころにかなうことをしてきたことです。さらに、全うされること、高く上げられること、苦しみによって従順を学んだことも残っていたでしょう。大祭司の務めとささげ物、引き渡しも残っていたでしょう。ご自分を死から救う力のあるかたへの願いも残っていたでしょう。苦しみもだえること、血のしたたり、祈り、そのほかこのようなことも残っていたでしょう。もし、だれの目にも次のことが明らかでなかったならです。こうした名は、苦しみを受けるもののことを言う、ということです。苦しみを受けることより高い、変わることのない本性のことを言うのではありません。30:16:5 反対論についての話は、これだけにします。もっと詳しく調べようとする人々にとって、より完全な仕上げのための根となり、覚え書きとなる程度のものです。しかし、子の呼び名も、考えずに素通りしないのがふさわしいでしょう。それは、これまで述べたことにも続くことです。呼び名は多く、このかたについて考えられる多くのことに当てはめられています。その一つ一つが何を言おうとしているのかを述べ、名の奥義を明らかにするのがふさわしいでしょう。

30:17:1 ここから始めなければなりません。神は名づけることのできないかたです。このことを示しているのは、推論だけではありません。ヘブル人の中で最も知恵があり、最も古い人々も、推し量れるかぎりで示しています。彼らは、神を固有の文字で敬いました。神より後のもののどれかが、神と同じ文字で書かれることにも、耐えられませんでした。神は、そこまでも、わたしたちのものと共通するところがあってはならない、と考えたのです。その人々が、消えていく声で、消えることのない、ほかと分かち合わない本性を表すことを、どうして受け入れるでしょうか。30:17:2 だれも、空気のすべてを吸いこんだことはありません。それと同じように、神の本質を、知性がすっかり受け入れたことも、声が抱え込んだこともありません。わたしたちは、このかたのまわりのことから、このかたそのものを影絵のように描きます。そうして、おぼろで弱い想像を、あちらから一つ、こちらから一つと寄せ集めるのです。30:17:3 わたしたちにとって最もすぐれた、神について語る者とは、すべてを見いだした人ではありません。魂を体につなぐこの絆は、すべてを受け入れないからです。そうではなく、ほかの人より多くを想像する人です。真理の写し、あるいは影、あるいは何と呼ぶにせよ、それを自分のうちに、より多く集める人です。

30:18:1 さて、わたしたちに届くかぎりで言えば、『有る者』と『神』とが、どちらかといえば本質の名です。そのうちでも、『有る者』のほうがそうです。このかたは、山の上でモーセにお答えになりました。モーセがその呼び名を尋ねたとき、ご自分をそうお呼びになったのです。民にこう言え、とお命じになったのです。『有る者が、わたしをつかわされました』（出エジプト三・一四）[1]。しかし、そのためだけではありません。この名のほうが、より本来の意味で神にふさわしい、とわたしたちは見いだすからです。30:18:2 『神（テオス）』という呼び名は、こうしたことに巧みな人々によって、『走る（テエイン）』や『燃やす（アイテイン）』から来ていると語源を説かれています。いつも動いていて、悪い性向を消し尽くすからだ、というのです。実際、『焼きつくす火』（ヘブル一二・二九、申命記四・二四）という神の呼び名も、ここから来ています。しかし、たとえそうでも、この呼び名は関係で言われる語であって、それだけで立つ語ではありません。『主』という語も同じです。これも神の名であると言われています。神はこうおっしゃいます。『わたしはあなたの神、主である。これがわたしの名である』（出エジプト二〇・二、イザヤ四二・八）。30:18:3 また、『その名は主』（出エジプト一五・三）とも言われています。しかし、わたしたちが探しているのは本性です。存在がそれ自体としてあり、ほかのものに結びつけられていない本性です。そして『有る』ということこそ、まことに神に固有のものであり、まるごと神のものです。前のものによっても、後のものによっても、限られたり、区切られたりしません。そのようなものは、かつてあったこともなく、これからあることもないからです。

訳注

1 七十人訳による。口語訳は『「わたしは有る」というかたが』。

第30講話（19〜21章）　子の呼び名

30:19:1 ほかの呼び名のうち、あるものは、はっきりと権威を表すものです。あるものは救いのわざを表すもので、これには二つあります。体を超えた救いのわざと、体における救いのわざです。権威を表すのは、たとえば『全能者』です。また『王』です。『栄光の王』、あるいは『世々の王』、あるいは『愛する者の、もろもろの力の王』[1]、あるいは『もろもろの王の王』です。また『主』です。『サバオトの主』です。サバオトとは『軍勢の』という意味です。あるいは『もろもろの力の主』、あるいは『もろもろの主の主』です。30:19:2 これらは、明らかに権威を表す呼び名です。一方、『神』です。『救いの神』、あるいは『報復の神』、あるいは『平和の神』、あるいは『義の神』です。あるいは『アブラハム、イサク、ヤコブの神』です。また、霊のイスラエル、神を見るイスラエルの全体の神です。これらは救いのわざを表す呼び名です。30:19:3 わたしたちは、三つのものによって治められているからです。罰への恐れと、救いへの、さらには栄光への望みと、これらに至らせる徳の修練です。『報復の神』という名は、恐れをつかさどります。『救いの神』という名は望みを、徳にかかわる名は修練をつかさどります。それは、これらのどれかを成し遂げた人が、神を自分のうちに宿す者として、いっそう完全さへと急ぐためです。徳から生まれる、神との親しさへと急ぐためです。30:19:4 ここまでの名は、まだ神性に共通のものです。始まりのないかたに固有の名は『父』です。始まりなくお生まれになったかたに固有の名は『子』です。生まれることなく進み出なさった、あるいは進み出ておられるかたに固有の名は『聖霊』です。30:19:5 しかし、子の呼び名へ進みましょう。この話は、もともとそれを語ろうとして始まったのです。

30:20:1 わたしには、こう思えます。このかたが『子』と呼ばれるのは、本質において父と同じだからです。それだけでなく、父から出ておられるからでもあります。『ひとり子』と呼ばれるのは、ただひとりのかたから、ただひとりで、ただ子としてお生まれになったからだけではありません。ただ一つの仕方でお生まれになったからでもあります。体のようにではないのです。30:20:2 『ことば（ロゴス）』と呼ばれるのは、このかたの父に対する関係が、知性に対することばの関係と同じだからです。それは、出生が苦しみを伴わないからだけではありません。結びついて離れないからでもあり、父を言い表すからでもあります。30:20:3 あるいは、定義と定義されるものとの関係と同じだ、と言う人もいるかもしれません。定義も『ロゴス』と呼ばれるからです。実際、このかたは「子を知った者は、父を知ったのである」（ヨハネ一四・九）とおっしゃいます。ここで『知った』と言うのは、『見た』ということです。子は、父の本性を手短に、たやすく示すものなのです。30:20:4 生まれたものはみな、生んだものの、声に出さない定義だからです。また、このかたが存在するもののうちにおられるからだ、と言う人がいても、ロゴスという名の意味を外れてはいないでしょう。理法によって成り立っていないものが、何かあるでしょうか。30:20:5 『知恵』と呼ばれるのは、神と人の事柄の知識だからです。お造りになったかたが、ご自分のお造りになったものの理法をご存じない、ということがどうしてありえるでしょうか。『力』と呼ばれるのは、生じたものを保つかただからです。それらが一つに結ばれているための力を与えるかただからです。30:20:6 『真理』と呼ばれるのは、本性において一つであって、多くはないからです。真理は一つですが、偽りはいくつにも分かれます。また、父の清い『証印』であり、このうえなく偽りのない『真の姿』だからです。30:20:7 『かたち』と呼ばれるのは、本質を同じくするからです。また、子が父から出ておられるのであって、父が子から出ておられるのではないからです。かたちの本性とは、原型をまねたもの、そのかたちだと言われるものをまねたものであることだからです。ただし、ここにはそれ以上のものがあります。30:20:8 絵や像の場合には、動くもののかたちが動きません。ここでは、生きておられるかたの、生きているかたちです。しかも、違いのなさでは、アダムに対するセツよりも、また、生むものすべてに対する生まれるものよりも、ま

さっています。30:20:9 単純なものの本性とは、そういうものだからです。ある点では似ていて、ある点では似ていない、というのではありません。全体が全体の型であり、似姿というより、むしろ同じものなのです。『光』と呼ばれるのは、理性と生活によって清められる魂の輝きだからです。30:20:10 無知と罪が闇であるなら、知識と、神に満ちた生活が光でしょう。『いのち』と呼ばれるのは、光だからです。また、すべての理性ある本性を成り立たせ、それに存在を与えるかただからです。30:20:11 『われわれは彼のうちに生き、動き、存在している』からです（使徒一七・二八）[2]。息を吹きいれることの二つの力に応じてです。わたしたちはみな、このかたからいのちの息を吹きいれられました。受け入れることのできる者はみな、聖霊を吹きいれられました。それも、わたしたちが思いの口を広くあけるだけの量をです。30:20:12 『義』と呼ばれるのは、ふさわしさに応じて分け与えるかただからです。律法の下にある者と恵みの下にある者とのあいだを、また魂と体とのあいだを、正しく裁くかただからです。こうして、一方が治め、他方が治められます。すぐれたものが劣ったものを導き、劣ったものがよりよいものに逆らって立つことはありません。30:20:13 『聖』と呼ばれるのは、清さだからです。清いものが、清さによって受け入れられるためです。『あがない』と呼ばれるのは、罪に捕らえられているわたしたちを自由にしてくださるからです。わたしたちのために、ご自分をあがないとしてささげてくださるからです。世を清めるささげものとしてです。30:20:14 『よみがえり』と呼ばれるのは、わたしたちをこの世から立ち上がらせてくださるからです。罪によって死んでいたわたしたちを、いのちへ連れ戻してくださるからです。

30:21:1 ここまでは、わたしたちを超えた面と、わたしたちのための面とに、まだ共通の呼び名です。次に挙げるのは、わたしたちに固有のもの、わたしたちから人性をお取りになったことに属する呼び名です。『人』と呼ばれるのは、体をもつ者たちが、体を通してこのかたを受け入れられるようにするためだけではありません。そうでなければ、その本性がとらえられないので、受け入れることはできなかったでしょう。そうではなく、ご自分を通して人を聖となさるためでもあります。粉のかたまり全体に対するパン種となってです。罪の宣告を受けたものの全体をご自分に結び合わせ、その宣告から解き放ってくださるためです。すべての人のために、わたしたちであるものすべてとなられたのです。罪のほかは、です。体と魂と知性、つまり死が及ぶもののすべてとなられました。これらを合わせたものが『人』です。知性で知られるもののゆえに、目に見える神なのです。30:21:2 『人の子』と呼ばれるのは、アダムのゆえでもあり、おとめのゆえでもあります。この二人からお生まれになったからです。アダムからは先祖として、おとめからは母としてです。出生の法によって、また出生の法によらずに、です。30:21:3 『キリスト（油注がれた者）』と呼ばれるのは、神性のゆえです。神性こそが、人性の油注ぎだからです。ほかの油注がれた者たちの場合のように、はたらきによって聖とするのではありません。油を注ぐものが、まるごとそこにあることによって聖とするのです。この油注ぎがもたらすのは、油を注ぐものが『人』と呼ばれ、油を注がれるものが神とされることです。30:21:4 『道』と呼ばれるのは、ご自分を通して、わたしたちを連れて行ってくださるからです。『門』と呼ばれるのは、導き入れるかただからです。『羊飼』と呼ばれるのは、緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわで養ってくださるからです。ここから導き、獣と戦って守ってくださるからです。迷い出たものを引き返し、うせたものを連れ戻し、傷ついたものを包み、強いものを守ってくださるからです。羊飼の知恵の言葉によって、かなたの囲いへと集めてくださるからです。30:21:5 『羊』と呼ばれるのは、ほふられるものだからです。『小羊』と呼ばれるのは、傷のないものだからです。『大祭司』と呼ばれるのは、神に近づけてくださるかただからです。『メルキゼデク』と呼ばれるのは、わたしたちを超えた面では母がなく、わたしたちと同じ面では父がないからです。また、上の面では系図がないからです。『だれが、彼の生まれを語ることができようか』とあるからです（イザヤ五三・八）[3]。30:21:6 また、サレムの王だからです。サレムとは平和のことです。また、義の王だからです。また、悪しき力に打ち勝つ族長たちから、十分の一をお受けになるからです。これで、あなたは子の呼び名を手にしました。30:21:7 その呼び名を通って歩みなさい。高い呼び名は、神にふさわしく。体にかかわる呼び名は、思いやりをもって。いや、むしろ、すべてを神にふさわしく歩みなさい。それは、あなたが下から上って、神となるためです。わたしたちのために上から降りておいでになったかたのゆえにです。30:21:8 すべてに加えて、何よりも

先に、次の言葉を守りなさい。そうすれば、より高い名についても、より低い名についても、誤ることはないでしょう。「きのうもきょうも体においておられたイエス・キリストは、霊においては同じかたであり、とこしえにそうである」。アーメン。

訳注

1 詩篇六八・一二の七十人訳の句。口語訳は『もろもろの軍勢の王たちは逃げ去り』。
2 口語訳は『神のうちに』。ここでは彼を御子と取る。
3 口語訳は『その代の人のうち、だれが思ったであろうか』。

第31講話（1〜6章）聖霊について

31:1:1 御子についてのことばは、以上のようなものです。こうして、ことばは石で打とうとする者たちを逃れ、彼らのまん中を通り抜けて行きました。ことばは石で打たれることがないからです。かえって、望むときには石を投げ、獣を石投げで打ちます。山に悪しく近づく言葉という獣をです。31:1:2「では、聖霊については何と言うのか」と彼らは言います。「聖書に書かれていない見知らぬ神を、どこからわたしたちのもとに持ち込むのか」。御子については穏当な考えをもつ人々までが、すでにこう言っています。31:1:3 道や川に見られることが、ここでも起こっているからです。道や川は、互いに分かれ、また互いに合流します。それと同じように、不敬虔があまりに豊かなために、ほかの点では隔たっている者たちが、別の点では一致しているのです。そのため、どこで一致し、どこで争っているのかを、はっきり見分けることさえできません。

31:2:1 たしかに、聖霊についての話には、難しいところもあります。それは、この人たちが御子についての議論で力尽き、かえっていっそう激しく聖霊に組みついてくるからだけではありません。彼らは、どうしても何か不敬虔なことをしなければならないのです。そうでなければ、生きている甲斐がないのです。そればかりでなく、わたしたちもまた、あまりに多くの問いにうんざりさせられているからです。わたしたちは、食の細い人と同じ目にあっています。そういう人は、食べ物のどれか一つに嫌気がさすと、食べ物のすべてを受けつけなくなります。わたしたちも同じように、どんな話にも気が進まないのです。31:2:2 それでも、聖霊が与えてくださいますように。そうすれば、話は走り、神は栄光をお受けになるでしょう。さて、『霊』と『聖』は、聖書でそれぞれ何通りの意味に理解され、言われているでしょうか。それを、この観想に役立つ聖句の証しを添えて念入りに調べ、区別することは、ほかの人々に任せましょう。また、それとは別に、二つを合わせたもの、つまり『聖霊』が、独自の仕方で何を意味するのかも、そうです。その人々は、自分のためにも、わたしたちのためにも、それを論じてきました。わたしたちもまた、彼らのために、こちらのことをしているからです。わたしたち自身は、話の続きへ向かいます。

31:3:1 さて、ある人たちは不快に思っています。わたしたちが聖霊を、見知らぬ神、名簿に紛れ込ませた神として持ち込んでいる、と言うのです。そして、文字を守ろうと激しく戦っています。この人たちは知るべきです。自分たちが、恐るべきことのないところで恐れているのだということを。また、はっきり知るべきです。文字への愛着が、彼らにとっては不敬虔を隠す衣になっているのだということを。そのことは、少し後で示されるでしょう。わたしたちが力の限り、彼らの反論を論破するときにです。31:3:2 しかし、わたしたちは、自分たちがあがめる聖霊の神性に、それほどまでに信頼を寄せています。そこで、神について語ることも、ここから始めます。三位一体に同じ言葉を当てはめてです。ある人々には、大胆すぎると思われるとしてもです。31:3:3『世に来るすべての人を照すまことの光があった』（ヨハネ一・九）[1]。それは父です。『世に来るすべての人を照すまことの光があった』。それは子です。31:3:4『世に来るすべての人を照すまことの光があった』。それは別の助け主です。あった、そしてあった、そしてあった。しかし、あったのは一つです。光、そして光、そして光。しかし、一つの光、一つの神です。31:3:5 これこそ、ダビデが先にかいま見て、こう言ったことです。『われらはあなたの光によって光を見るであろう』（詩篇三六・九）[2]。そして今、わたしたちはそれを見ました。そして宣べ伝えています。父である光から、子である光を、聖霊である光によってとらえるのです。これが、三位一体について語る、手短で飾りのない言葉です。31:3:6 退ける者は退けるがよい。不法を行う者は不法を行うがよい。わたしたちは、悟ったことを宣べ伝えます。高い山に登って、叫びます。下からでは聞いてもらえないならです。聖霊を高くあげます。恐れはしません。もし恐れるとすれば、黙っていることを恐れるのであって、宣べ伝えることを恐れるのではありません。

31:4:1 父がおられなかったときがあったなら、子がおられなかったときもあったことになります。子がおられなかったときがあったなら、聖霊がおられなかったときもあったことになります。31:4:2 一つが初めからおられたなら、三つともそうです。一つを下へ落とすなら、あえて言いますが、二つも上に置かないことです。不完全な神性に、何の益があるでしょうか。31:4:3 いや、むしろ、完全でないなら、それがどんな神性でしょうか。完全になるのに何かが欠けているなら、どうして完全でしょうか。聖なるものをもっていないなら、何かが欠けています。そして、このかた、つまり聖霊をもたずに、どうして聖なるものをもつことができるでしょうか。31:4:4 聖さが、このかたとは別の何かだというのでしょうか。それなら、それが何だと考えられているのか、だれか言ってほしいものです。それとも同じものだというなら、どうして初めからではないのでしょうか。31:4:5 まるで、神にとって、いつか不完全で、聖霊なしでいたほうがよいかのようです。聖霊が初めからおられなかったのなら、わたしと同じ列に並んでおられることになります。わたしより少し前だとしてもです。わたしたちは、時によって神から切り離されているからです。31:4:6 わたしと同じ列に並んでおられるのなら、どうしてわたしを神となさるのでしょうか。どうして神性に結びつけてくださるのでしょうか。

31:5:1 いや、むしろ、聖霊について、少しさかのぼって、あなたに論じることにします。三位一体については、前にも論じてきたからです。サドカイ人は、聖霊がおられることさえ、まったく認めませんでした。天使も復活も認めなかったからです。旧約にある聖霊についてのこれほど多くの証しを、どういうわけで唾を吐いて退けたのか、わたしには分かりません。31:5:2 ギリシア人のうちには、神についてよりよく語り、わたしたちにいっそう近づいた人々がいます。わたしの見るところ、彼らは聖霊をかいま見はしました。しかし、その呼び名については意見が分かれ、『万物の知性』とか、『外から来る知性』とか、そのような名で呼びました。31:5:3 わたしたちの側の賢い人々のうち、ある者はこれをはたらきと考え、ある者は造られたもの、ある者は神と考えました。またある者は、そのどれなのか分かりませんでした。彼らの言うところでは、聖書への畏れからです。聖書がそのどれともはっきり示していないから、というのです。31:5:4 そのため、彼らは聖霊を敬いもせず、侮りもしません。どっちつかずの態度でいるのです。いや、むしろ、ひどくみじめな態度です。また、聖霊を神と考える人々のうち、ある者は思いの中でだけ敬虔です。ある者は、唇でも敬虔であろうとする勇気をもっています。31:5:5 また、神性を量る、もっと賢い人々のことも聞きました。彼らは、わたしたちと同じく、知性で知られるものが三つあることを認めています。しかし、その三つを互いにひどく隔てています。一つ目は、本質においても力においても限りのないものとします。二つ目は、力においては限りがないが、本質においてはそうでないものとします。三つ目は、両方において限られているものとするのです。こうして彼らは、別の形で、次の人々をまねています。三つを、造る者、ともに働く者、仕える者と呼び、名に表れる位と威厳とが、そのまま実在の順序だと考える人々です。

31:6:1 しかし、聖霊がおられることさえ認めない人々には、わたしたちは何も言うことがありません。ギリシア人のうちでたわごとを言う人々にもです。悪しき者の油で、この話を肥やしたくはないからです。ほかの人々とは、次のように論じることにします。31:6:2 聖霊は、どちらかに数えなければなりません。それ自体で存立するもののうちにか、ほかのもののうちに見られるもののうちにかです。こうしたことにくわしい人々は、前者を本質と呼び、後者を付帯するものと呼んでいます。31:6:3 では、付帯するものだとすれば、それは神のはたらきでしょう。ほかに何でありえ、ほかのだれのものでありえるでしょうか。そう考えれば、神が合わさったものだということを、いくらかでも避けられるからです。そして、はたらきだとすれば、明らかに、だれかが及ぼすものであって、自分からはたらくものではないでしょう。及ぼされると同時に、終わってしまうでしょう。31:6:4 はたらきとは、そういうものだからです。では、どうして聖霊はおはたらきになり、こうお告げになり、聖別なさり、悲しまれ、憤られるのでしょうか。そのほか、動きではなく、動いているものにはっきり属することを、どうしてなさるのでしょうか。また、本質であって、本質のまわりのものでないとしましょう。それなら、わたしたちは、聖霊を造られたものか神か、どちらかと考えることになります。31:6:5 その中間のもの、つまりどちらにもあずからないものや、両方から合わさったものは、思いつくこともできません。山羊と鹿を継ぎ合

わせた獣をこしらえる者たちでさえ、そうでしょう。しかし、造られたものだとすれば、どうしてわたしたちはそれに信を置き、そのうちで完全にされるのでしょうか。31:6:6 何かに信を置くことと、それについて信じることとは、同じではないからです。前者は神性に属し、後者はどんな事柄にもあてはまります。しかし、神であって、造られたものでないなら、作られたものでも、僕仲間でもなく、低い名のどれでもありません。

訳注

1 口語訳は『すべての人を照すまことの光があって、世にきた』。
2 口語訳は『見る』。ギリシア語訳は未来の形で言う。

第31講話（7〜10章） 生まれないことと出生のあいだの発出

31:7:1 ここからは、あなたの話す番です。石投げを放ちなさい。三段論法を編みなさい。「聖霊は、生まれることのないものか、生まれたものか、どちらかに決まっている。生まれることのないものなら、始まりのないものが二つになる。生まれたものなら、もう一度分けてみよ。それは父から出たのか、子から出たのか。31:7:2 父から出たのなら、子が二人いて、兄弟だということになる」。お望みなら、双子に仕立ててもかまいません。兄と弟に仕立ててもよいでしょう。あなたは、ひどく体にこだわる人なのですから。31:7:3 「子から出たのなら、孫の神まで、わたしたちに現れたことになる。これほど奇妙なことがあるだろうか」と彼は言います。こう言うのは、悪を行うのにさとく、善いことは書こうとしない人々です。31:7:4 わたしは、その区分がどうしても避けられないと見たなら、その事柄を受け入れたでしょう。名を恐れはしなかったでしょう。子は、ある高い関係によって子です。その高さは、わたしたちの理解の及ばないものです。そして、神から出ていて、本質を同じくすることを、わたしたちはこの呼び名でしか示せませんでした。しかし、だからといって、下の呼び名をすべて神にまで移さなければならない、と考えるべきではありません。わたしたちの親族関係の呼び名のことです。31:7:5 それとも、あなたはこの理屈で、神を男だと考えるのでしょうか。『神』『父』という呼び名が、男性の語だからです。また、神性を女だと考えるのでしょうか。呼び名のうえでは、『神性』が女性の語だからです。31:7:6 そして、聖霊を中性、つまり男でも女でもないものと考えるのでしょうか。生むものではないからです。さらに、あなたが戯れにこうまで言うとしましょう。古いたわごとや作り話にあるように、神はご自分の意志とお交わりになって、子をお生みになったのだ、と。そうなれば、マルキオンとウァレンティノスの男女両性の神が、わたしたちのもとに持ち込まれたことになります。ウァレンティノスとは、あの目新しいアイオーンを形にした者です。

31:8:1 しかし、わたしたちは、あなたの最初の区分を受け入れません。生まれることのないものと生まれたもののあいだに、何もないとする区分です。そうであれば、兄弟も孫も、あなたのご立派な区分とともに、たちまち消え去ってしまいます。入り組んだ結び目は、最初の端がほどけると、全部がいっしょにほどけてしまいます。それと同じように、彼らもほどけて、あなたが神について語ることから退いてしまうのです。31:8:2 言ってみなさい。発出するものを、あなたはどこに置くのでしょうか。それは、あなたの区分のあいだにお現れになったものです。あなたよりすぐれた、神について語る者、わたしたちの救い主がお説きになったものです。もっとも、あなたが自分の福音書からあの言葉を削り取ったのなら、話は別です。旧約と新約に続く、あなたの第三の契約に合わせて削ったのなら、です。その言葉とは、『父のみもとから発出する聖霊』です（ヨハネ一五・二六）[1]。この聖霊は、そこから発出なさるかぎりでは、造られたものではありません。生まれたものでないかぎりでは、子ではありません。生まれることのないものと生まれたもののあいだにおられるかぎりでは、神です。31:8:3 こうして、発出するものは、あなたの三段論法の網を逃れ、神としてお現れになりました。あなたの区分よりも強いかたです。「では、発出とは何か」。あなたが、父の生まれないことを説明しなさい。そうすれば、わたしも、子の出生と聖霊の発出の自然誌を語ってあげましょう。そして、神の奥義をのぞき込んだために、二人そろって気が狂うとしましょう。しかも、それをするわたしたちは、何者でしょうか。31:8:4 足もとのことさえ知ることができない者です。海の砂も、雨のしずくも、とこしえの日々も、数えることができない者です。まして、神の深みに踏み込むことなど、できるはずがありません。これほど言い表しがたく、説明を超えた本性について、説明することも、なおさらできません。

31:9:1 「では、聖霊が子であるには、何が欠けているのか。何かが欠けていなかったのなら、子であったはずだ」と彼は言います。わたしたちは、欠けている

とは言いません。神には欠けがないからです。しかし、こう言ってよければ、出で方の違い、あるいは互いの関係の違いが、呼び名をも違うものにしたのです。31:9:2 子にも、父であるには何かが欠けている、というわけではありません。子であることは、欠けではないからです。しかし、だからといって、子が父であるわけではありません。そうでなければ、父にも、子であるには何かが欠けていることになります。父は子ではないからです。31:9:3 しかし、こうしたことは、欠けから来るのでも、本質の劣りから来るのでもありません。呼び名を与えたのは、まさに、お生まれにならなかったこと、お生まれになったこと、発出なさることです。それが、一方を父、一方を子、そしてもう一方を、聖霊というこの名で呼び表したのです。三つの位格が、神性の一つの本性と品位のうちで、混ざり合わずに保たれるためです。31:9:4 子は父ではありません。父はひとりだからです。しかし、父が何であられるか、そのとおりのものです。聖霊は、神から出ておられても、子ではありません。ひとり子はひとりだからです。しかし、子が何であられるか、そのとおりのものです。三つは神性において一つであり、一つは固有性において三つです。それは、一つがサベリオスの説の一とならず、三つがいまはやりの邪悪な分割のものとならないためです。

31:10:1 「では、聖霊は神なのか」。まったくそのとおりです。「では、本質を同じくするのか」。神であるなら、そうです。「それなら、同じものから、一方は子、一方は子でないものが出て、しかも両方が本質を同じくすることを、示してみよ。そうすれば、神と神とを認めよう」と彼は言います。31:10:2 あなたも、別の神と、その別の神の本性を示してみなさい。そうすれば、わたしも、同じ三位一体を、同じ名と同じ事柄とともに、あなたに示しましょう。しかし、神が一つで、最高の本性もただ一つなら、そのたとえを、どこから取ってきてあなたに見せればよいのでしょうか。31:10:3 それとも、あなたはまた、下のもの、自分のまわりのものから、それを求めるのでしょうか。下のものから上のものを推し量り、流れ去る本性から動かないものを推し量るのは、ひどく恥ずかしいことです。恥ずかしいだけでなく、まったくむなしいことです。イザヤの言うように、死んだもののうちに生けるものを求めることです（イザヤ八・一九）。それでも、あなたのために、ここからも、この議論にいくらかの助けを与えてみることにします。31:10:4 ほかのことは省こうと思います。生きものについての記録からなら、多くのことを語れるのですが。自然が、生きものの誕生をめぐって技を凝らしたことです。わたしたちのよく知っていることもあれば、わずかな人しか知らないこともあります。31:10:5 というのも、同じものから同じものが生まれ、違うものから違うものが生まれるだけではないと言われています。違うものから同じものが生まれ、同じものから違うものが生まれることもあるそうです。31:10:6 また、ある言い伝えを信じる人がいるなら、別の生まれ方もあります。あるものが、自分によって消し尽くされ、また生み出されるのです。いわば自分の外へ出て、ある生きものから別の生きものへと移り変わり、作り変えられるものもあります。自然がすぐれようとする熱心によるのです。さらに、同じ一つのものから、一方は生まれたものでなく、一方は生まれたものでありながら、本質を同じくするものも出ます。これは、いま論じていることに、ほかの例よりもいくらかよく似ています。31:10:7 わたしたち人間のことから、だれもが知っている例を一つだけ挙げて、次の話に移ることにします。

訳注

1 口語訳は『父のみもとから来る真理の御霊』。

第31講話（11〜15章）聖霊への礼拝と、神が一つであること

31:11:1 アダムは何だったのでしょうか。神に形づくられたものです。では、エバは何でしょうか。形づくられたものから切り取られたものです。では、セツは何でしょうか。二人から生まれたものです。それでは、形づくられたもの、切り取られたもの、生まれたものは、あなたには同じものに見えるでしょうか。31:11:2 「もちろんだ」。では、これらは本質を同じくするものでしょうか。それとも、違うのでしょうか。「もちろん、同じだ」。こうして、違う仕方で存在するに至ったものも、同じ本質のものでありうることが、認められました。わたしがこう言うのは、形づくることや、切り取ることや、体に属することのどれかを、神性に持ち込むためではありません。言葉の争いを好む人が、また、わたしに食らいついてこないでほしいものです。そうではなく、わたしは、これらのものの上に、舞台の上で見るように、知性で知られるものを見ているのです。31:11:3 たとえに取るものはどれも、真理の全体に、混じりけなく届くことはできないからです。「それが何だというのか。同じ一つのものから、一方は生まれたものとして、もう一方は別の何かとして出たわけではないではないか」と彼らは言います。31:11:4 では、どうでしょうか。エバとセツは、同じアダムから出たのではありませんか。「ほかのだれから出たというのか」。それとも、二人とも生まれたものでしょうか。「とんでもない」。では、何でしょうか。一方は切り取られたもの、一方は生まれたものです。31:11:5 しかも、二人は互いに同じものです。どちらも人だからです。これに反対する人はいないでしょう。それなら、あなたはもう、聖霊に逆らって争うのをやめるでしょうか。聖霊は必ず生まれたものであるか、さもなければ本質を同じくするものでも神でもない、と言い張って争うことをです。人のことからさえ、わたしたちの考えがありうることを見て取ったのですから。31:11:6 わたしは、あなたがやめたほうがよいと思います。どこまでも言い争い、明らかなことに逆らって戦おうと、心に決めているのでなければ、ですが。

31:12:1 「しかし、だれが聖霊を礼拝したのか」と彼は言います。「昔の人のうちにも、今の人のうちにも、だれがいたのか。だれが聖霊に祈ったのか。礼拝しなければならない、あるいは祈らなければならないと、どこに書いてあるのか。31:12:2 あなたは、それをどこから取ってきたのか」。もっと完全な理由は、後で述べることにします。聖書に書かれていないことについて論じるときです。いまは、これだけを言えば十分でしょう。わたしたちが礼拝するのは聖霊においてであり、祈るのは聖霊によってです。31:12:3 聖書はこう言います。『神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである』（ヨハネ四・二四）。また、こうもあります。『わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、聖霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さる』（ローマ八・二六）。31:12:4 さらに、『わたしは霊で祈ると共に、知性でも祈ろう』ともあります（第一コリント一四・一五）。つまり、知性においても霊においても祈る、ということです。ですから、聖霊で礼拝すること、あるいは聖霊で祈ることは、わたしにはこう思えます。聖霊ご自身が、ご自分に祈りと礼拝をおささげになることにほかなりません。31:12:5 これをほめない人が、神に満たされた人々のうちにいるでしょうか。一つへの礼拝は三つへの礼拝である、とよく知っている人々のうちにいるでしょうか。三つのうちで、品位と神性の誉れが等しいからです。31:12:6 また、すべてのものは子によってできた、と言われています。それで聖霊もそのすべてのものの一つになる、と言われても、わたしはその言葉を恐れません。言われているのは、できたものすべてであって、無条件にすべてのもの、ということではないからです（ヨハネ一・三）。父もそこには入りませんし、できたのでないものも入りません。31:12:7 ですから、聖霊ができたものであることを示しなさい。そのうえで、聖霊を子に帰し、造られたものの数に入れなさい。それを示さないかぎり、『すべて』という包括的な言い方は、あなたの不敬虔の助けには少しもなりません。聖霊ができた

ものであるなら、もちろんキリストによってできたものです。そのことは、わたしも否定しません。31:12:8 しかし、できたものでないなら、どうしてすべてのものの一つなのでしょうか。どうしてキリストによるものなのでしょうか。ですから、ひとり子をおとしめて父を敬うのは、やめなさい。それは悪い敬い方です。父には造られたものを差し出し、もっと尊いもの、つまり子を、父から奪うことだからです。聖霊をおとしめて子を敬うのも、やめなさい。31:12:9 子は、僕仲間の造り主ではありません。誉れの等しいかたとともに、栄光をお受けになるかたです。三位一体のどれも、あなた自身と同じ列に置いてはなりません。三位一体から落ちてしまわないためです。一つの本性、等しく敬うべき本性を、どんな点でも切り詰めてはなりません。三つのどれを引き下ろしても、全体を引き下ろしたことになるからです。いや、むしろ、全体から落ちたことになるのです。一つであることを、わずかにでもかいま見るほうが、まったくの不敬虔をあえてするよりよいのです。

31:13:1 ここで、わたしたちの話は、根本の問いそのものに来ました。わたしは嘆いています。とうに死んで、信仰に席を譲った問いが、いまになってまた新しくされているからです。それでも、このおしゃべりな論客たちに立ち向かわなければなりません。欠席裁判で負けるわけにはいきません。わたしたちには、ことばがあり、聖霊の弁護に立っているのですから。31:13:2 「神であり、また神であり、また神であるなら、どうして三つの神ではないのか。どうして、あなたがたがあがめているのは、多くの者の支配ではないのか」と彼は言います。こう言うのは、だれでしょうか。不敬虔において、より徹底した人々でしょうか。それとも、第二の群れの人々でしょうか。子については、いくらか分別のある人々のことです。31:13:3 というのも、両方の人々に向けた共通の言葉と、この人たちだけに向けた言葉が、わたしにはあるからです。この人たちに向けた言葉は、こうです。あなたがたは子を敬っています。たとえ聖霊からは離れてしまっていても、です。そのあなたがたは、自分たちが『三神論者』と呼ぶわたしたちに、何と言うのでしょうか。31:13:4 あなたがたこそ、『二神論者』ではありませんか。もし、ひとり子への礼拝をも否むのなら、あなたがたは、はっきりと敵の側に並んだことになります。それなら、どうしてわたしたちは、まだすっかり死んではいない者として、あなたがたに情けをかけるのでしょうか。31:13:5 しかし、もし子を敬い、そこまでは救いにかなう考えをもっているのなら、あなたがたに尋ねましょう。二神論だと訴えられたら、あなたがたは、どんな弁明をするのでしょうか。悟りの言葉があるのなら、答えなさい。わたしたちにも、答える道を与えなさい。31:13:6 あなたがたがどんな言葉で二神論を退けても、その同じ言葉が、三神論に対するわたしたちの弁明にも十分に役立つでしょう。こうして、わたしたちは勝つのです。訴える者であるあなたがたを、わたしたちの弁護人として用いることによってです。これほど見事な勝ち方があるでしょうか。

31:14:1 では、両方の人々に対して、わたしたちに共通の戦いと言葉は、どのようなものでしょうか。わたしたちには、神は一つです。神性が一つだからです。そして、一なるものから出たものは、一なるものへと帰されます。三つと信じられているとしてもです。31:14:2 一方がより多く神で、一方がより少なく神だ、ということはありません。一方が先で、一方が後だ、ということもありません。神性は、意志によって切り分けられることも、力によって分かたれることもありません。分かたれうるものにあることは、何ひとつ、ここには見いだせません。手短に言わなければならないなら、神性は、分かたれたもののうちに、分かたれずにあるのです。それは、互いにつながった三つの太陽のうちで、光が一つに溶け合っているようなものです。31:14:3 ですから、神性と、第一の原因と、ひとりの支配に目を向けるとき、わたしたちがかいま見るものは一つです。しかし、神性がそのうちにあるものに目を向けるときもあります。第一の原因から出て、時によらずにそこから存在し、等しい栄光をもつものです。そのとき、わたしたちが礼拝するものは三つです。

31:15:1 こう言う人があるかもしれません。「では、ギリシア人のもとでも、神性は一つではないか。彼らのうちで、より進んだことを論じる人々の言うとおりだ。わたしたちのもとでも、人性は一つ、つまり人類全体が一つではないか。31:15:2 それでも、神々は多く、一つではない。人間もそうであるのと同じだ」。しかし、そこでは、共通のものは、考えの上でだけ見て取れる一つを持っているにすぎません。個々のものは、時においても、気性においても、力においても、互いにひどく分かれているのです。31:15:3 わたしたちは、合わさっているだけでは

ありません。対立してもいます。互いに対立し、自分自身とも対立しています。一日のうちでさえ、混じりけなく同じままではいません。一生のことは言うまでもありません。体においても魂においても、いつも流れ去り、移り変わっているのです。31:15:4 天使たちも、三位一体に次ぐ上の本性もすべて、やはりそうなのではないかと、わたしは思います。たとえ、それらがいくらか単純で、最高の美しいものに近いために、美しいものに向かってより堅く据えられているとしても、です。

第31講話（16〜20章）　ギリシアの神々と、一緒に数えることの理屈

31:16:1 ギリシア人のもとで敬われている神々や霊は、そう呼ぶのは彼ら自身ですが、わたしたちが訴える者になるまでもありません。彼ら自身の、神について語る者たちによって、有罪とされているからです。その罪状は、情に動かされること、争いを好むことです。どれほど多くの悪と移り変わりに満ちていることでしょうか。彼らは互いに対立するだけでなく、最初の原因とも対立しています。その原因を、ギリシア人はオケアノスだの、テテュスだの、パネスだの、そのほか何だか知らない名で呼びます。そして最後に、ある神を挙げます。支配を好むあまり子を憎み、飽くことを知らずに、ほかの神々をみな呑み込む神です。不運にも食べられては吐き出される、すべての人々と神々の父となるためです。31:16:2 これらは作り話であり、何かの寓意なのだ、と彼らは言います。話の恥ずかしさから逃れようとしてです。それなら、「すべては三つに分けられた」という句に、彼らは何と言うのでしょうか。存在するもののうち、別々のものを別々の神が治める、ということにも、何と言うのでしょうか。神々は、領分においても位においても、分かれているのです。31:16:3 しかし、わたしたちのものは、そのようなものではありません。わたしの、神について語る者は、『ヤコブの分である彼はこのようなものではない』と言います（エレミヤ一〇・一六）。そうではなく、三つのそれぞれは、自分自身と一つであるのに劣らず、自分と結び合っているものとも一つです。本質と力が同じだからです。31:16:4 これが、わたしたちがとらえたかぎりでの、一つであることの説明です。この説明に力があるなら、この考えについて神に感謝します。そうでないなら、もっと力のある説明を探しましょう。

31:17:1 あなたの言葉を、戯れに言ったものと言えばよいのか、本気で言ったものと言えばよいのか、わたしには分かりません。その言葉で、あなたは、わたしたちの説く、一つであることを打ち消すのです。では、その理屈とは何でしょうか。「本質を同じくするものは、一緒に数えられる」と彼は言います。『一緒に数える』とは、一つの数にまとめることを言っているのです。「本質を同じくしないものは、一緒に数えられない。だから、この理屈では、あなたがたは、三つの神と言うことを免れない。だが、わたしたちには、危険は一つもない。本質を同じくするとは言わないのだから」。31:17:2 こうして、あなたは、ひと言で面倒から逃れました。悪い勝ち方で勝ったのです。死を恐れて首をくくる人と、似たようなことをしたのです。ひとりの支配を守る苦労をしないために、あなたは神性を否みました。そして、守ろうとしていたものそのものを、敵に明け渡してしまったのです。31:17:3 しかし、わたしは、たとえ苦労しなければならないとしても、礼拝するものを手放しはしません。それに、ここでは、何の苦労があるのか、わたしには見えもしません。

31:18:1 「本質を同じくするものは一緒に数えられる。そうでないものは、一つずつしか示されない」とあなたは言います。それを、あなたはどこから得たのでしょうか。作り話を掟に仕立てる、どんな人々から得たのでしょうか。それとも、あなたは知らないのでしょうか。どんな数も、数えられるものの量を示すのであって、事柄の本性を示すのではないことを。31:18:2 わたしは、ひどく昔かたぎです。いや、むしろ無学です。それで、それだけの数のものは、本性が隔たっていても、『三つ』と呼びます。また、それだけの数の一つ一つを、本質で結ばれていても、気ままに『一つ、また一つ、また一つ』と呼びます。数えられる事柄そのものより、その事柄がいくつあるかに目を向けるからです。31:18:3 あなたは、聖書の文字にひどくこだわります。もっとも、その文字と戦っているのですが。それなら、そこから証明を取り出してみなさい。箴言には、堂々と歩くものが三つあります。しし、雄やぎ、おんどりです。そして四つ目は、民の中で弁じる王です（箴言三〇・二九〜三一）。そこに数えられている、ほかの四つの組のことは言わないでおきます。数えられてはいても、本性は分かれている組です。31:18:4 また、モーセの書には、二つのケルビムが一つずつ数えられているのを、

わたしは見いだします（出エジプト二五・一八〜一九）。それでは、あなたの術語に従うと、どうして、あちらは『三つ』なのでしょうか。あれほど互いに本性が断ち切られているのにです。また、どうして、こちらは一つずつなのでしょうか。あれほど互いに本性を同じくし、結び合っているのにです。31:18:5 もし、わたしが、神と富を、一つの数にまとめられるふたりの主人だと言ったら、どうでしょうか。互いにあれほど遠く離れているのにです。わたしは、そういう一緒に数えるやり方のせいで、なおさら笑われるかもしれません。

31:19:1 「しかし、わたしに言わせれば、一緒に数えられるもの、同じ本質のものとは、こういうものだ」と彼は言います。「数と一緒に、名も、それに見合う形で口にされるものだ。たとえば、名に合わせた男性の『三』で、『三人の人』『三つの神』と言う。中性で、『これとこれの三つ』とは言わない」。31:19:2 では、そのお返しに、わたしは何をいただきましょうか。それは、名に掟を定めることであって、真実を語ることではありません。その理屈なら、わたしにとっても、ペテロとパウロとヨハネは、三人ではなく、本質を同じくするのでもありません。『三人のパウロ』『三人のペテロ』、同じ数のヨハネ、と言われるのでないかぎりは、です。31:19:3 あなたは、類を言う名について、このことを守ってきました。それなら、わたしたちも、種を言う名について、同じことを求めましょう。あなたのこしらえた理屈に従ってです。それとも、あなたは、自分が受け取ったものを与えずに、不正をするつもりでしょうか。31:19:4 ヨハネはどうでしょうか。公同書簡の中で、あかしをするものが三つあると言い、聖霊と水と血を挙げています（第一ヨハネ五・七〜八）。あなたには、ヨハネがたわごとを言っているように見えるでしょうか。第一に、本質を同じくしないものを、あえて一緒に数えたからです。あなたが、本質を同じくするものにだけ認めることです。だれが、これらを一つの本質のものだと言うでしょうか。31:19:5 第二に、語の形を一致させずに書いたからです。男性の『三』を先に置きながら、三つのものを中性の語（聖霊、水、血）で続けたのです。あなたの定め、あなたの文法の定めと規則に反してです。31:19:6 けれども、次の二つに何の違いがあるでしょうか。一つは、男性の『三』を先に言ってから、中性で『一と一と一』と続けることです。もう一つは、男性で『一と一と一』と言いながら、男性の『三』でなく、中性の『三』と呼ぶことです。31:19:7 その呼び方を、あなた自身は、神性については退けるのです。蟹は、あなたにとってどうでしょうか。生きものの蟹、道具の蟹（やっとこ）、星の蟹（蟹座）です。犬はどうでしょうか。陸の犬、海の犬、天の犬（星）です。31:19:8 あなたには、これらが名に合わせた男性の『三』で、『三つの蟹』『三つの犬』と言われるように思えないでしょうか。「もちろんだ」。それなら、そのために、本質を同じくしてもいるのでしょうか。知性のある人のだれが、そう言うでしょうか。分かるでしょうか。一緒に数えることについてのあなたの理屈は、これほど多くの反証を受けて、崩れ落ちてしまったのです。31:19:9 本質を同じくするものが、必ず一緒に数えられるわけではありません。本質を同じくしないものも、一緒に数えられます。数と一緒に名を口にすることも、両方の場合にあります。それなら、あなたが掟として定めたことから、何の得があるでしょうか。

31:20:1 わたしは、次のことも考えてみます。おそらく、筋の外れたことではないでしょう。一つと一つは、合わさって二つになるのではありませんか。二つは、分かれて一つと一つになるのではありませんか。31:20:2 明らかにそうです。では、あなたの理屈では、合わさるものは本質を同じくし、分けられるものは本質を異にします。そうなると、どうなるでしょうか。同じものが、本質を同じくし、また本質を異にすることになります。31:20:3 わたしは、あなたの『先に数えること』や『後に数えること』も笑います。あなたはそれを大いに誇っています。まるで、事柄そのものが、名の並ぶ順に拠っているかのようにです。もしそうなら、同じ理屈で、同じものが自分自身より誉れ高く、また誉れ低いことになるのを、何が妨げるでしょうか。聖書では、本性の誉れが等しいために、同じものが先にも数えられ、後にも数えられているのですから。31:20:4 わたしは、『神』と『主』という語についても、同じことを言います。さらに、『そのかたから』『そのかたによって』『そのかたにおいて』という前置詞についてもです。あなたは、これらで神を術語で切り分けます。一つを父に、一つを子に、一つを聖霊に与えるのです。31:20:5 もし、これらの一つ一つが、それぞれに固く割り当てられていたなら、あなたは何をしたことでしょうか。実際には、骨を惜しまず調べる人には明らかなように、すべてがすべてに当てはめられています。それなの

に、あなたは、これらによって、位においても本性においても、これほど等しくないことを持ち込むのです。31:20:6 ひどく分別のない人でなければ、これだけでも十分です。しかし、あなたは、一度聖霊に襲いかかったら、その勢いを止めるのが難しい人です。猪のうちの向こう見ずなもののように、最後まで言い争うでしょう。剣に向かって押し進み、傷をすっかり身に受けるまでやめないでしょう。さあ、あなたにまだどんな理屈が残っているか、考えてみましょう。

第31講話（21〜24章）聖書に書かれていないこと

31:21:1 あなたは、またしても、何度も繰り返して、『聖書に書かれていない』ということを、わたしたちに持ち出します。このかたが、見知らぬかたでも、こっそり持ち込まれたかたでもないことは、すでに示されています。このかたは、昔の人々にも今の人々にも知られ、明かされてきたのです。それを示したのは、このかたについて論じてきた多くの人々です。彼らは、聖書を怠けて読んだのでも、ついでに読んだのでもありません。文字の向こうへ分け入り、内をのぞき込んで、しまわれていた美しさを見ることを許されたのです。そして、知識の光に照らされたのです。31:21:2 わたしたちも、できるかぎり、手短に示すことにします。余計なことをする者だと思われないためです。他人の土台の上に建てて、必要以上に名誉を求める者だと思われないためです。聖霊は、名指しで『神』と、あまりはっきりとも、何度もとも書かれてはいません。父が先の時代に、子が後の時代に、そう書かれているようにはです。このことが、あなたにとって冒瀆のもとになっているとします。この余計なおしゃべりと不敬虔のもとになっているとします。それなら、その損を、わたしたちが取り除いてあげます。事柄と名について、とりわけ聖書のいつもの言い方について、少し論じてです。

31:22:1 事柄のうち、あるものは、実際にはないのに、言われます。あるものは、実際にあるのに、言われません。あるものは、実際にもなく、言われもしません。あるものは、その両方で、実際にもあり、言われもします。31:22:2 これらの証明を、あなたはわたしに求めるのですか。差し出す用意はできています。聖書では、神について、『眠る』と言われ、『目をさます』『怒る』『歩む』とも言われます。『ケルビムを王座とする』とも言われます。けれども、神が、いつ情に動かされるかたになられたでしょうか。31:22:3 また、神が体であると、あなたはいつ聞いたことがあるでしょうか。これは、実際にはないものが、こしらえられたのです。わたしたちは、自分に届くかぎり、わたしたちのものから、神のことを名づけたのです。神は、ご自分だけがご存じのわけで、わたしたちを放っておきになり、いわば、かまわずにおおきになります。それを、わたしたちは『眠る』と名づけました。31:22:4 わたしたちの眠りとは、そういうもので、はたらきもせず、何もしないことだからです。また、神が様子を変えて、突然よくしてくださることを、『目をさます』と名づけました。目をさますとは、眠りが解けることです。背を向けていたのが解けて、顧みとなるのと同じです。また、罰することを、わたしたちは『怒る』としました。わたしたちの場合、罰は怒りから出るからです。31:22:5 また、あるときはこちらで、あるときはあちらでおはたらきになることを、『歩む』と名づけました。ある所から別の所へ移ることが、歩みだからです。また、神は、聖なる力ある者たち（ケルビム）のうちにお憩いになり、いわば、そこを好んでとどまっておられます。それを、『座する』『王座に着く』と名づけました。31:22:6 これも、わたしたちのものから取った言い方です。『憩う』と言うのは、神が、聖なる者たちのうちでほどお憩いになるところは、ほかにないからです。また、すばやく動くことを『飛ぶ』とし、顧みを『顔』とし、与えることと迎え入れることを『手』としました。要するに、神の力やはたらきの一つ一つが、体のものの何か一つを、わたしたちに描き出したのです。

31:23:1 また、あなたは、『生まれることのない』や『始まりのない』という語を、どこから取ってきて持っているのでしょうか。それが、あなたの砦なのですが。あるいは、わたしたちは『不死の』という語を、どこから取ってきたのでしょうか。これらを、名指しで示しなさい。さもなければ、わたしたちはそれを名簿から消します。そして、あなたは、自分の立てた原則によって、もう死んでいます。名も、あなたが頼みとしていた逃れ場の城壁も、撃ちくずされたからです。31:23:2 それとも、明らかではありませんか。これらの語は、それを結論として引き出させる箇所から来たのです。たとえ、これらの語そのものは言われていなくてもです。どの箇所でしょうか。『わたしは初めであり、わたしは終りである』という箇所です（イザヤ四四・六）。また、『わたしより前に、ほかの神はな

く、わたしより後にもない』という箇所です（イザヤ四三・一〇）。31:23:3 神は、こうおっしゃっているのです。「『ある』ということは、すべてわたしのものだ。始まったこともなく、やむこともない」。あなたは、これらを受け取りました。神より前には何もなく、神はより古い原因をもっておられません。そのことを、『始まりのない』『生まれることのない』と呼んだのです。また、神があることをおやめにならないことを、『不死の』『滅びることのない』と呼んだのです。31:23:4 初めの二つの組み合わせは、このようなもので、このとおりです。では、実際にもなく、言われもしないものは何でしょうか。『神は悪い』『球は四角い』『過去が現在である』『人は合わさってできたものではない』です。31:23:5 このようなことを、あえて考えるほど、少なくとも口に出して言い切るほど、愚かになった人がいたでしょうか。あなたは、そういう人を知っているでしょうか。残るのは、実際にもあり、言われもするものを示すことです。神、人、天使、さばきです。そして、『このような推論はむだごとであり、信仰をくつがえし、奥義をむなしくする』ということです。

31:24:1 このように、名と事柄のあいだには、これほどの違いがあります。それなのに、どうして、あなたは、それほどまでに文字の奴隷になるのでしょうか。どうして、ユダヤ人の知恵の側につき、事柄を捨てて、音節を追いかけるのでしょうか。31:24:2 あなたが『五の二倍』とか、『七の二倍』とか言ったとします。わたしが、その言ったことから、『十』とか、『十四』とかいう結論を引き出したとします。あるいは、『理性ある、死ぬべき生きもの』から、『人』という結論を引き出したとします。そのとき、わたしは、あなたに、たわごとを言っていると思われるでしょうか。31:24:3 あなたの言ったことを言っているのに、どうしてそう思われるでしょうか。言葉は、それを口にする者のものであるのと同じく、口にするよう強いた者のものでもあるからです。ですから、この場合、わたしは、言われていることよりも、意味されていることに目を向けるでしょう。それと同じく、言われていないこと、あるいははっきりとは言われていないことがあるとします。そうしたことのうちに、聖書から読み取れる何かほかのことを見いだしたとします。そのとき、わたしは、それを口に出すのを避けはしないでしょう。名をあげつらって訴えるあなたを恐れて、避けたりはしないのです。31:24:4 半分だけ分別のある人々には、わたしたちは、このようにして立ち向かいます。あなたには、この論を向けることさえできないからです。子の呼び名は、これほどはっきりしていて、これほど多いのです。それを否むあなたが、聖霊の呼び名も敬いはしなかったであろうことは、明らかです。たとえ、それがはるかにはっきりしていて、もっと多いと知っていたとしてもです。31:24:5 では、話を少しさかのぼって、聖書が聖霊について、これほど覆い隠していることの、そのわけも明らかにすることにします。もっとも、あなたがたは賢いのですが。

第31講話（25〜28章）聖霊が少しずつ明らかになったこと

31:25:1 あらゆる時代を通じて、生き方の際立った移り変わりが二つありました。これは『二つの契約』とも呼ばれます。また、その出来事が広く知れわたったので、『地の震え』とも呼ばれます。一つは偶像から律法への移り変わり、もう一つは律法から福音への移り変わりです。31:25:2 そして、第三の地の震えが、福音として告げられています。この世から、かの世へ移ることです。もはや動かされることも、震われることもないものへ移ることです。二つの契約は、同じことを経てきました。それは何でしょうか。どちらも一度に移し替えられたのではなく、企ての最初の動きと同時に移し替えられたのでもない、ということです。31:25:3 なぜでしょうか。それを知っておかなければなりません。わたしたちが強いられるのではなく、説き伏せられるためです。望まずに受けたものは、長続きもしません。流れや木を無理強いで押さえつけておくようなものです。自分から望んで受けたものは、もっと長続きし、もっと確かです。31:25:4 また、望まずに受けたものは強いた者のものであり、自分から望んで受けたものはわたしたちのものです。そして、自分から望ませるのは神の寛容であり、無理に受けさせるのは力ずくの権力のすることです。ですから神は、人が望まないのに善を施すべきだとはお考えになりませんでした。人が自分から望んで恵みを受けるようにすべきだとお考えになったのです。31:25:5 そのため神は、養育係のように、また医者のようにお振る舞いになります。父祖伝来のもののうち、あるものはお取り除きになり、あるものについてはお譲りになります。喜ぶものを少しばかりお与えになるのです。医者が病人にするのと同じです。薬が、もっと口当たりのよいもので味つけされ、医者の技によって受け入れられるようにするのです。31:25:6 習わしとなり、長いあいだ重んじられてきたものの移り変わりは、たやすいことではないからです。わたしの言うのは、こういうことです。第一の移り変わりは、偶像を切り捨てましたが、犠牲については譲りました。第二の移り変わりは、犠牲を取り去りましたが、割礼は禁じませんでした。そして人々は、ひとたび取り除かれることを受け入れると、譲られていたものも、今度は自分から譲り渡しました。ある人々は犠牲を、ある人々は割礼を手放したのです。こうして、異邦人であった人々がユダヤ人となり、ユダヤ人であった人々がキリスト者となりました。少しずつの移り変わりによって、知らぬ間に福音へと導かれたのです。31:25:7 このことは、パウロに説き伏せてもらいなさい。パウロは、割礼を受けさせ、きよめを受けることから進んで、こう言うまでになったのです。『兄弟たちよ。わたしがもし割礼を宣べ伝えていたら、どうして、いまなお迫害されるはずがあろうか』（ガラテヤ五・一一）。前のことは配慮から出たこと、後のことは完全さから出たことです。

31:26:1 神について語ることも、これになぞらえることができます。ただ、向きが逆です。あちらでは、取り除くことによって移り変わりが起こりました。こちらでは、加えることによって完成に至るのです。31:26:2 それは、こういうことです。古い契約は、父をはっきりと宣べ伝え、子をそれよりおぼろに宣べ伝えました。新しい契約は、子を明らかにし、聖霊の神性をほのめかしました。今は聖霊が、わたしたちのうちに住んでおられ、ご自分を、もっとはっきりと示してくださっています。31:26:3 父の神性がまだ告白されていないうちに、子をあらわに宣べ伝えるのは、安全ではなかったからです。また、子の神性がまだ受け入れられていないうちに、聖霊をさらに背負わせるのも、安全ではありませんでした。もっと大胆な言い方をすれば、ですが。そうしたら人々は、力に余る食べ物を詰め込まれたように重くなったかもしれません。まだ弱い目を日の光に向けたようになったかもしれません。そして、もとからあった力まで危うくしたかもしれません。そうならないためです。むしろ、少しずつ加えることによって、三位一体の光が、より照らされた人々に輝き出るためでした。ダビデの言う『上り』（詩篇八四・五）[1]によって、栄光から栄光への進みと前進によってです。31:26:4 わたしの思うに、このわけで、聖霊は弟子たちのもとにも、少しずつおいでになっ

たのです。受ける者の力に合わせて、ご自分を量り分けておられたのです。福音の初めには、力あるわざをなさいました。受難の後には、キリストの吹きかける息としておいでになりました。昇天の後には、火の舌のうちにお現れになりました。31:26:5 イエスも、聖霊を少しずつ明かしておられます。もっと注意深く読めば、あなたも気づくでしょう。イエスは、こうおっしゃいます。『わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主をあなたがたにつかわして下さる。それは真理の聖霊である』（ヨハネ一四・一六〜一七）。ご自分が神に逆らう者だと思われないためです。何かほかの権威によって語っておられるように思われないためです。31:26:6 次に、こうおっしゃいます。「父がつかわす。ただし、わたしの名によってだ」（ヨハネ一四・二六）。『お願いしよう』は省き、『つかわす』は保っておられるのです。次に、『わたしがつかわそう』とおっしゃいます（ヨハネ一五・二六）。これは、子ご自身の品位を示します。次に、『来る』とおっしゃいます（ヨハネ一六・七）。これは、聖霊ご自身の権威を示します。

31:27:1 ごらんのとおり、照らしは少しずつ、わたしたちに輝いてきました。神について語ることには、順序があるのです。わたしたちも、この順序を守るのがよいでしょう。一度にすべてを明かすのでも、最後まで隠しておくのでもなく、です。一度に明かすのは、つたないやり方です。隠し通すのは、神を知らないやり方です。前者はよその人々をたじろがせ、後者はわたしたちの仲間をよその人にしてしまいかねません。31:27:2 わたしは、これまで述べたことに、もう一つのことを付け加えます。ほかの人々のうちにも、すでに思い至った人がいるかもしれません。けれども、わたしはそれを、自分の思いの実だと考えています。救い主には、弟子たちに言うべきことがありました。弟子たちは多くの教えに満たされていましたが、そのときにはまだそれに堪えられない、と救い主はおっしゃいました（ヨハネ一六・一二）。わけは、さきほど述べたようなものでしょう。そのため、それは覆い隠されていました。また救い主は、聖霊がおいでになって住まわれるとき、わたしたちはすべてのことを教えられる、ともおっしゃいました（ヨハネ一四・二六）。31:27:3 わたしは、聖霊の神性そのものも、そのことの一つだったと思います。それは後になって、はっきりと示されることになりました。そのころには、その知識が時の満ちたものとなり、もう受け入れられるものになっていたからです。それは、救い主がよみがえって、もとのお姿にお戻りになった後のことです。人々が、不思議のあまり救い主を信じられずにいることが、もうなくなった後のことです。31:27:4 救い主が約束なさったことでも、聖霊が教えてくださったことでも、これより大きなことがあったでしょうか。もっとも、約束されたことや教えられたことのうちで、何かを大きいとか、神の威厳にふさわしいとか考えてよいとすれば、ですが。

31:28:1 わたしは、これらのことについて、こう考えています。これからもそう考えていたいし、わたしの友である人もみな、そうであってほしいのです。すなわち、父を神として、子を神として、聖霊を神としてあがめることです。固有性は三つ、神性は一つです。その神性は、栄光においても、誉れにおいても、本質においても、支配においても分かたれません。少し前の、神の霊に動かされた人の一人が論じたとおりです。そう考えない者は、聖書の言うように、『明けの明星の昇るのを見ることのないように』（ヨブ三・九）[2]。天の輝きの栄光も見ることのないように。時の流れに合わせ、そのつど別の人になって、最も大切な事柄について腰の定まらない考え方をする者も、そうなるように。31:28:2 聖霊が、礼拝すべきかたでさえないなら、どうして洗礼によってわたしを神としてくださるでしょうか。礼拝すべきかたなら、どうしてあがめるべきかたでないことがあるでしょうか。あがめるべきかたなら、どうして神でないことがあるでしょうか。31:28:3 一つが一つにつながっています。まことに、黄金の、救いの鎖とでも言うべきものです。わたしたちが新たに生まれるのは、聖霊によります。新たに生まれることから、形づくり直されることが来ます。形づくり直されることから、形づくり直してくださったかたの品位を知ることが来ます。

訳注

1 口語訳は『シオンの大路』。ギリシア語訳は『上り』と言う。
2 口語訳は『あけぼののまぶたを見ることのないように』。

第31講話（29〜33章）聖霊の呼び名と、たとえの限界

31:29:1 以上のことは、仮に『聖書に書かれていない』としたうえでも、言えることでしょう。しかし今、聖書の証しの群れが、あなたに押し寄せてきます。それによって、聖霊の神性が、まことにはっきりと聖書に書かれていることが示されるでしょう。ひどく鈍くはない人々、聖霊に無縁ではない人々にはです。31:29:2 次のように考えてみなさい。キリストがお生まれになると、聖霊はそれに先立っておられます。キリストが洗礼をお受けになると、聖霊は証しをなさいます。試みをお受けになると、聖霊は荒野へお導きになります。キリストが力あるわざをなさると、聖霊はそばに伴っておられます。キリストが天へお上りになると、聖霊はそのあとをお継ぎになります。偉大なことで、神に属することのうち、聖霊におできにならないものがあるでしょうか。31:29:3 神に属する呼び名のうち、聖霊の呼び名とならないものがあるでしょうか。生まれないことと出生のほかにです。固有性は、父と子にとどまらなければならなかったからです。ほかのものまで秩序と美しい整いへ導く神性に、混乱が起こらないためです。31:29:4 わたしは、その呼び名の豊かさを思うと、身震いします。聖霊に逆らう人々が、どれほど多くの名を恥知らずにも辱めているかを思うと、身震いします。聖霊には、『神の霊』という呼び名があります。『キリストの霊』『キリストの思い』『主の霊』という呼び名もあり、聖霊ご自身を『主』とする言い方もあります。『子たる身分を授ける霊』『真理の霊』『自由の霊』という呼び名もあります。『知恵の霊』『悟りの霊』『深慮の霊』『才能の霊』『知識の霊』『敬虔の霊』[1]『神を恐れる霊』という呼び名もあります。聖霊は、これらすべてをもたらすかただからです。聖霊は、本質によってすべてを満たし、すべてを保っておられます。本質においては世界を満たし、力においては世界に収まりきらないかたです。聖霊は、よいかた、正しいかた、導き治めるかたです。それも、取り決めによってではなく、本性によってです。聖霊は、聖となさいますが、聖とされることはありません。お量りになりますが、量られることはありません。人があずかるかたであって、ご自分が何かにあずかることはありません。満たしてくださいますが、満たされることはありません。保っておられますが、保たれることはありません。聖霊は、人が受け継ぐかたであり、栄光をお受けになるかたです。人が父と子と一緒に数えるかたであり、このかたを汚すことはゆるされないと、脅しにも持ち出されるかたです。『神の指』という呼び名も、神のような『火』という呼び名もあります。本質を同じくすることを示すためだと、わたしは思います。聖霊は、お造りになったかたです。洗礼によって、また復活によって、造り直してくださるかたです。すべてを知っておられ、教えてくださるかたです。思いのままに、また思うだけお吹きになるかたです。導き、語り、遣わし、聖別なさるかたです。怒らされもし、人に試みられもするかたです。明かし、照らし、生かしてくださるかたです。いや、むしろ光そのもの、いのちそのものです。人を宮とし、神とし、完全にしてくださるかたです。洗礼に先立っておいでになることもあり、洗礼の後に人がなお求めることもあるほどです。神のおはたらきになることを、すべておはたらきになります。火の舌のうちに分かれてお現れになり、賜物を分け与えてくださいます。使徒、預言者、伝道者、牧師、教師をお立てになります。知性をそなえ、多様で、明らかで、鮮やかで、妨げられず、汚れのないかたです。これは、次のように言うのと同じです。最も知恵に富み、はたらきにおいて多様なかたです。すべてを明らかにし、鮮やかにしてくださり、思いのままにお振る舞いになり、変わることのないかたです。聖霊は、全能で、すべてを見守っておられるかたです。知性をそなえ、清く、最も細やかなすべての霊を、貫いて行き渡っておられます。その霊とは、天使の力のことだと、わたしは思います。預言者の霊も、使徒の霊もそうです。聖霊は、それらを同時に貫いておられます。しかも、それらは同じ場所にはいません。あちらこちらに分かれて散らばっています。このことによって、聖霊が限られないかたであることが示されているのです。

31:30:1 聖書でこれらのことを語り、教えた記者たちは、そのうえ、聖霊をほかの助け主と呼んでいます。いわば、もうひとりの神と呼ぶようにです。彼らは、聖霊を汚す言葉だけはゆるされないと知っていました。アナニヤとサッピラが聖霊を欺いたので、彼らは二人を、これほど恐ろしくさらし者にしました。人を欺いたのではなく、神を欺いた者としてです。この記者たちは、聖霊を神として宣べ伝えていると、あなたには思えるでしょうか。それとも、何かほかのものとしてでしょうか。31:30:2 このことに迷い、教える者を必要とするなら、あなたは、なんとひどく鈍い人でしょう。聖霊から、なんと遠い人でしょう。呼び名は、これほど多く、これほど生き生きとしているのです。31:30:3 言葉そのままの証言を、あなたのために並べる必要があるでしょうか。ここでも、御子のときと同じく、より低く言われていることがあります。人に与えられること、遣わしを受けること、分かれることです。賜物、贈り物、吹きかけられた息、約束、とりなし、そのほかこのようなことです。一つずつ挙げるのはやめておきます。これらはみな、第一の原因に帰さなければなりません。聖霊がどなたから出ておられるかが示されるためです。また、人々が、多くの神々を立てるように、分かたれた三つの始まりを受け入れることのないためです。31:30:4 サベリオスのように、一つのペルソナに結び合わせるのは不敬虔です。アレイオス派のように、本性を幾つにも分けて引き離すのも、それと等しく不敬虔なのです。

31:31:1 わたしは、知性の探りたがる性分のままに、どれほど多くのことを、ひとりで考えめぐらしたことでしょう。あらゆる方から話を吟味し、これほどの事柄の似姿を探しました。けれども、下のもののうちに、神の本性を何に比べればよいのか、見いだせませんでした。31:31:2 わずかに似たところが見つかっても、肝心のところは逃げてしまいます。わたしを、たとえと一緒に下に置き去りにしてです。わたしは、湧き口と泉と川を考えてみました。ほかの人々も考えたことです。湧き口に父が、泉に子が、川に聖霊が当たるのではないか、と思ったのです。31:31:3 これらは、時によって隔てられてはおらず、つながりにおいて互いに断ち切られてもいないからです。三つの特徴によって、いくらか分けられているように見えはしてもです。けれども、わたしは恐れました。第一に、神性が止まることなく流れ出ることを、受け入れることになるのを恐れました。第二に、このなぞらえ方によって、数において一つであることが持ち込まれるのを恐れました。湧き口も泉も川も、数においては一つで、ただ違う形をとっているにすぎないからです。

31:32:1 また、太陽と光線と光を思い浮かべました。けれども、ここにもおそれがありました。第一に、合わさっていない本性に、何か合わさった成り立ちを考えることになるおそれです。太陽と、太陽のうちにあるもののようにです。第二に、父にだけ本質を認め、ほかの二つには存立を認めないおそれです。それらを、神のうちにあるだけで、それ自体で存立しない、神の力にしてしまうおそれです。光線も光も、もう一つの太陽ではありません。太陽から流れ出る何かであり、太陽の本質に属する性質だからです。そうなれば、このたとえに従うかぎり、神に、存在することと存在しないこととを同時に帰すことになります。父には存在を認め、神のうちの力と考えた二つには、存在を認めないからです。これは、いま述べたことよりも、さらにおかしなことです。31:32:2 わたしは、ある人が、次のようなたとえを描いて見せるのを聞いたこともあります。日の光のきらめきが、壁に照り返して、水の動きのために揺れ動いています。光線が、あいだの空気を通してその動きを受け取り、はね返す壁に止められると、驚くような揺らめきが生まれるのです。31:32:3 そのきらめきは、多くのすばやい動きで跳ね回ります。多くというより一つ、とも言えず、一つというより多く、とも言えません。寄り集まっては離れるのがあまりに速く、目に留まる前に逃げ去ってしまうのです。

31:33:1 しかし、わたしには、これも採ることができません。一つには、光線を動かしたものが、まったく明らかだからです。けれども、神より先にあるものは何もありません。神を動かした何かがあるわけではないのです。31:33:2 神ご自身が、すべての原因であり、ご自分より先の原因をおもちにならないからです。第二に、ここでも同じことが疑われるからです。合わさってできていること、流れ広がること、止まることがなく定まらない本性です。そのどれも、神性について考えてはなりません。31:33:3 要するに、たとえのうちにかいま見るものを、いくら眺めても、わたしの思いをとどまらせるものは何もありません。ただし、似姿のうちの一つのことだけを取り、残りは分別をもって捨てるなら、話は別です。

31:33:4 そこで、ついに、わたしには、これが最もよいと思えました。似姿や影には別れを告げることです。それらは人を欺くもので、真理から最も遠く隔たっているからです。そして、わたし自身は、最も敬虔な考えにしっかりとつき、いくつかの言葉にとどまることです。聖霊を導き手とし、このかたから受けた照らしを、まことの伴侶、語らいの友として、最後まで守り通すことです。そうして、この世を切り開いて進みながら、ほかの人々にも、できるかぎり説き勧めることです。父と子と聖霊を、一つの神性、一つの力として礼拝するようにと。すべての栄光と誉れと権能は、世々限りなく、このかたのものだからです。アーメン。

訳注

1 イザヤ一一・二の七十人訳の語。口語訳は『主を知る知識と主を恐れる霊』。

神学講話

2026年11月23日版
著者　ナジアンゾスのグレゴリオス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/gregory-nazianzen-theological-orations/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/gregory-nazianzen-theological-orations
全文を、ギリシア語原文（Λογοι θεολογικοι）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。